3490
S
海軍兵學校
圖書館藏書

43002
教科書文庫
4
230
41-1900
20000
66235

資料室

教科書文庫
4
230
41-1900
2000066235

浜本純逸寄贈

照合済
51.
陸軍兵学校
図書館

引合済
15.11.29
陸軍兵学校
図書館

引合済
19.4.13
陸軍兵学校
図書館

4a
230
明38

和文

海軍兵學校藏書之印

普史171

明治三十三年五月十一日
文部省檢定濟

新撰西洋史全

文學士白鳥庫吉著

東京 合資會社 冨山房發兌

帝國圖書館藏書
明治四十年十月八日
6263

例言

一、此の書は中等教育に於ける西洋史の教科書に供せんが爲に編述したるものなり。

一、東洋史の中西洋史に密接の關係を有する事件に就いては勉めて其の要領を擧げ以つて東西相關の形勢を示せり。

一、此の書は事實の記述に止めて成るべく議論を避けたり。そは之を授くる者の隨意に自己の意見を挾み得る餘地を存せんが爲なり。

一、外國の人名及び地名の稱呼に就きては本邦に未だ定稱となれるもの尠きが故に今便宜の爲め英語の發音を用ゐたり。但し本邦人の既に呼び馴らしたるものは必しも之に拘泥する

広島大学 教 66235 図書
広島大学図書 2000066235

を要せず。

一、卷末に名稱對照表を附して英語名稱の下に原語の名稱及び佛獨兩國語の名稱を注したり。又名稱の中其の意味の解釋し得らるゝものは成るべく之を記したり。これ無意に聞ゆる外國の名稱をして有意ならしめ學生の記憶を助けんが爲なり。

著者しるす

訂正改版

新撰西洋史目次

第一卷　古代史

第一期　太古より波斯戰爭(紀元前五〇〇年)まで

第一章　埃及ヒエーブルー及びフェニシヤ　一

第二章　アッシリア及び波斯　六

第三章　太古の希臘　一〇

第二期　波斯戰爭よりピューニック戰爭まで(紀元前五〇〇年——二六四年)

第四章　波斯戰爭及びペリクリース時代　一五

第五章　スパールタ、シーブスの覇業、マセドーニアの勃興及びアレグザンダーの大

業
第六章　羅馬の建國及び其の伊太利征服　二〇
第三期　ピューニック戰爭よりジャーマン民族の移轉まで(紀元前二六四年——紀元三七五年)　二四
第七章　羅馬の外國征服　二九
第八章　羅馬の內亂及び其の版圖の擴張　三三
第九章　帝政の盛時及び基督教　三七
第十章　帝國の衰運　四三

第二卷　中古史

第一期　日耳曼民族の移轉よりチャーレメーン帝國の分裂まで(紀元三七五——八四三)
第一章　日耳曼民族の移轉及び其の建國　四七
第二章　東羅馬帝國　五三
第三章　サラセン帝國の勃興　五四
第四章　西羅馬帝國の復興　五七
第二期　チャーレメーン帝國の分裂より法王グレゴリ七世の登位まで(紀元八四三——一〇七三)
第五章　四方の蠻人及び希臘帝國　六一
第六章　神聖羅馬帝國及び佛蘭西王國の建設　六四
第七章　サラセン帝國の衰頽　六七
第三期　法王グレゴリ七世の登位より十字軍の終まで(紀元一〇七三——一二七〇)
第八章　法王と皇帝との衝突　七〇

第九章　英佛兩國　七一
第十章　十字軍　七六
第十一章　東歐の形勢及び蒙古人の侵略　八〇
第四期　十字軍の終より宗教改革まで(紀元一二七〇—一五一七)
第十二章　英佛兩國に於ける王權の發達及び西班牙の統一　八四
第十三章　神聖羅馬帝國の擾亂　八八
第十四章　土耳其の勃興、希臘帝國の滅亡及び露西亞の獨立　九二
第十五章　新航路及び新世界　九六
第十六章　伊太利の紛亂及び文藝復興　九九

第三卷　近世史

第一期　宗教改革の發端よりエストフェーリア會議まで(紀元一五一七—一六四八)
第一章　日耳曼に於ける宗教改革及び佛墺の競爭　一〇二
第二章　西班牙の雄圖、ネザーランドの獨立、及び東洋に於ける制海權の消長　一〇八
第三章　英國々教の確立　一一二
第四章　佛國の内亂及び其の治平　一一七
第五章　三十年戰爭　一二一
第二期　エストフェーリア條約より佛蘭西革命まで(紀元一六四八—一七八九)

第六章　佛國の雄大及び其の專制主義　一二五
第七章　英國兩度の革命及び其の憲法の發達　一二八
第八章　佛國の衰弱及び英國の優勢　一三三
第九章　露國の擴大　一三九
第十章　普魯西の勃興、獨乙國民の新氣運　一四三
第十一章　十八世紀の後半に於ける歐洲の形勢　一五〇
第十二章　亞米利加合衆國の獨立　一五四
第三期　佛國革命時代(紀元一七八九―一八一五)
第十三章　佛蘭西革命及び當時の列國　一五九
第十四章　ナポーレオン一世及び歐洲の大混亂　一六六
第十五章　各國の國民的反動及び佛國の王政復古　一七三

第四卷　現世史(紀元一八一五―)

第一章　十九世紀の文明　一八〇
第二章　神聖同盟　一八四
第三章　希臘の獨立　一八八
第四章　七月革命及び其の影響　一八九
第五章　英露の形勢及び東方問題　一九三
第六章　二月革命及び其の影響　一九六
第七章　ナポーレオン三世及びクリーミア

戰爭
第八章　伊太利の統一　二〇一
第九章　合衆國の內亂　二〇四
第十章　ナポーレオン三世の海外經營　二〇六
第十一章　普墺戰爭　二〇八
第十二章　普佛戰爭　二一〇
第十三章　英國の內政及び其の東方の版圖　二一三
第十四章　露國の內政及び其の亞細亞の經營　二一六
第十五章　露土戰爭　二一八
第十六章　最近の現象　二二〇
附　名稱對照表　二二三

訂正改版 新撰西洋史目次終

Pyramid. (pi-r'a-mid)

Persia (l'er'sha)
Egypt (ē'jipt)
Hebrew (hē'brō)
Phoenicia (fe-nish'a)
Nile (nīl)
Ra (rä)

訂正改版 新撰西洋史

白鳥庫吉著

第一卷　古代史

第一期　太古より波斯戰爭(紀元前五〇〇年)まで

第一章　埃及、ヒーブルー及びフェニシヤ

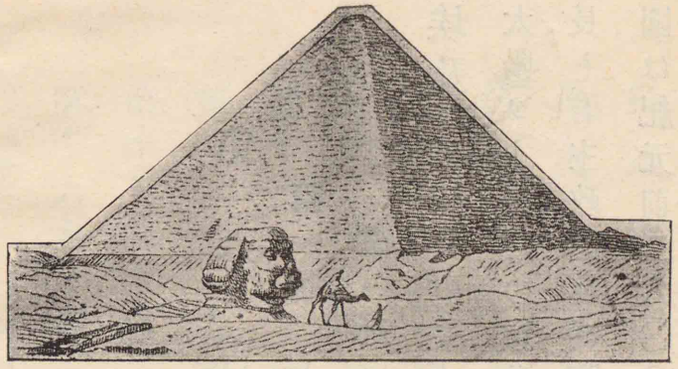
埃及　埃及の早く開けたるはナイル河の賜にして、其の太陽(ラー)崇拜の宗教及び天文曆學の智識も之に基きて成長し、君主政體及び階級制度の發達も自ら之と相關す。此の國は紀元前二八〇〇年頃より既に開明に趣き、金字塔(ピラミッド)の宏大なる建築物、其の頃の紀念として此の民族の特色を今に

Sphinx (sfinx)

Labyrinth (lab′irinth)
Obelisk (ob′e-lisk)
Rameses (ram′e-sēz)
Arabia (arā′bia)
Syria (sir′ia)
Mesopotamia (meso-po-tā′mia)

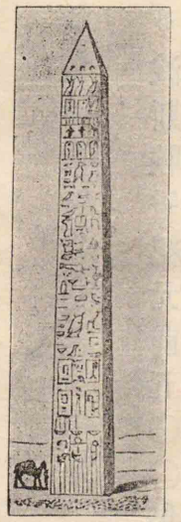
*以下、年代の殊に注意なきものは皆紀元前なり

殘せり。又た*一四〇〇乃至一二〇〇年頃の盛時には螺旋堂(ラビリンス)、尖形塔(オベリスク)の建築物を殘し、一五〇〇年乃至一二〇〇年の頃ラメシース二世(大王)等の英主屢外征の軍を起して亞刺比亞(アレービア)シリア、フエニシヤより遙にメソポテーミア地方を征服せし頃には、獅身人首像(スフインス)の建築を殘したり。凡て此の國の建築物には、聖字(ハイエログリフ)と呼ばるゝ象形文字にて、國王侯伯の銘を刻する習ありき。此の國の人民はハミチック派に屬す。



ピラミッド

スフインクス



クスリベオ

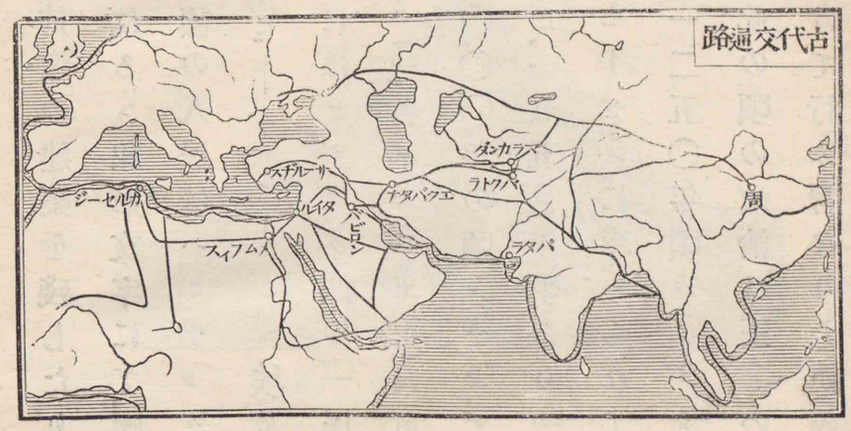
ヒーブルー

埃及の東北パレスタイン(一名ケーナン)にはセミチック派の一民族にして、一神教を奉ずるヒーブルー(一名イスラエル)人あり、其の酋長エーブラハムに從ひ、二〇〇〇年の頃メソポテーミアより此の地に移住したりしが、一五五〇年頃より一時埃及に移住し、一三二〇年頃酋長モーゼスに率ゐられて其の地を去り、サイネー半島に出で、一二五〇年頃パレスタインの故地を征服して歸り住みぬ。此の頃の政治は王といふ者なく、時の高僧が直に神意をうけて行ふ習なりしが、内には土人なほ絶滅せずして民族の

Abraham (ā′bra-ham)
Moses (mō′zes)
Sinai (sī′nā)

Hierogriph (hī′ero-glīf)
Hamitic (hamitik)
Palestine (pa-l′estīn)
Canaan (kā′nan)
Semitic (semitik)
Israel (is′ra-el)

David (dā'vid)
Jerusalem (je-rō'-salem)
Solomon (sol'ō-mon)
Judea (judē'a)



團結鞏固ならず、外には四隣異教徒の侵來打續きたりしかば、一〇五五年頃より國王を立てデーヴィドの位に上るに至り、異教徒を征討してジェルーサレム府をたて、四隣に威をふるひたり。次の王ソローモン(一〇〇〇年頃)の時は國運の最も盛なる時りしが、其の歿後イスラエル、猶太の二國に分裂し互に相爭びて國力漸く沈淪し行けり。

フェニシヤ　フェニシヤに

Carthage (kar'thāj)

Baltic sea (bâl'tik sē)
Africa (af'rika)
Damascus (da-mas'kus)
Baal (bā'al)
Sidon (sī'don)
Tyre (tir)

住せしセミチック派の一民族は航海の業に長じ、地中海上は更なり、大洋に出でゝは北の方ボールチック海より、南の方亞弗利加の沿海に往來して貿易を營み、地中海岸の到る所に其の殖民地を開きたりき。又東方諸國とは或は陸路ダマスカスを經て、或は紅海より海に浮びて往來貿易し、又た埃及王の命を奉じて亞弗利加の南端を廻りきといふ。此の民族はベーアル教(太陽崇拜)の信徒にして、始めて音字を發明したるはこの民族なりき。其の歴史を尋ぬるに、一五〇〇年頃既に數多の市府をなして各々世襲の王者を戴き、其の中心はサイドンなりしが、一一〇〇年頃よりタイル之に代り、一〇〇〇年頃この府最盛なりきといふ。其の後内亂起り八五〇年頃より市民多く亞弗利加に移りてカルセージを

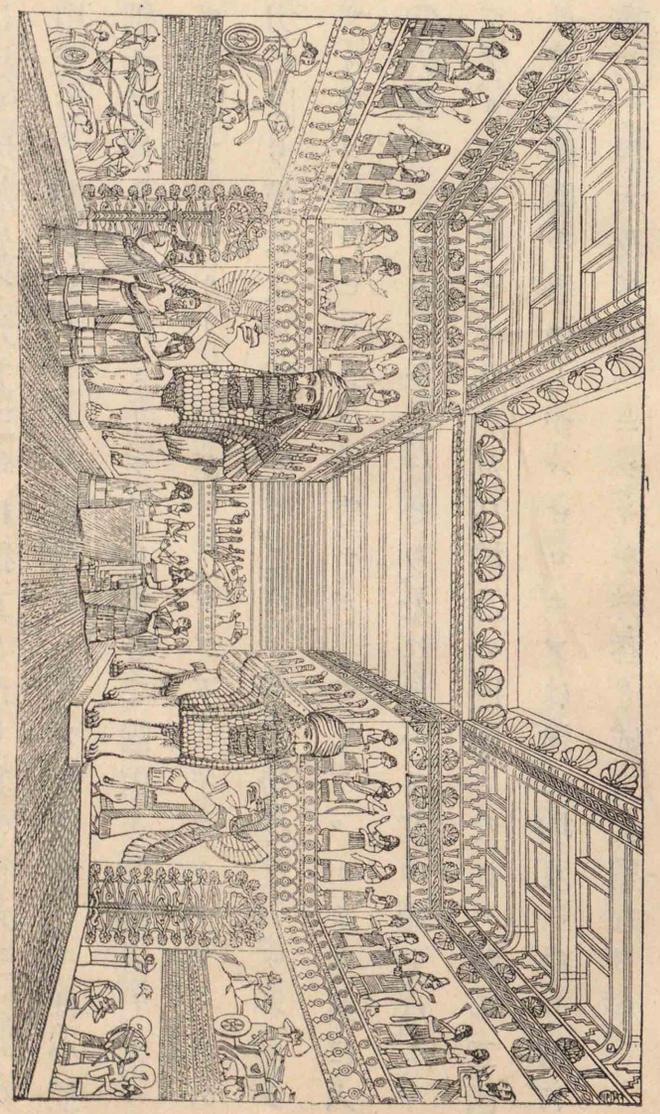
Neneveh (nin′e-ve)
Media (mē′dia)
Armenia (är-mē′-ni-a)
Sargon (sär′gon)
Lydia (lid′ia)
Assyria (a-sir′i-a)
Euphrates (ūfrātēz)
Babylon (bab′i-lon)
Babylonia (bab′i-lonia)
Cuneiform (ka-ne′i-form)
Tigris (ti′gris)

創めしかば、地中海上の制海權自らこれに歸するに至れり。

第二章　アッシリア及び波斯

アッシリアの統一及び其の四分

セミナック派の一派はまたユーフレーチース河畔のバビロンに於いて、二〇〇〇年の頃バビロニア國をたてたりき。この民族は最も曆學數學に長じ、楔形文字を使用し、又農業にも熟達したりき。然るに一二五〇年頃に至りタイグリス河畔なるニネヴェを首府とせる其の殖民地アッシリアに滅されにき。アッシリアは其の後兵を四隣に出して漸く版圖を擴め、ミーヂア、アールミーニア及びシリア地方を服屬せしめ、サールゴン（七二二）（七〇五）王の時、猶太を助けてイスラエルを滅ぼし、其の後埃及を亡ぼしリヂアをも服屬せしめ、地中海の東南地方殆



殿宮のアッシリア

Iran (ē-ran′)
Cimmeria (si-mē′ria′)
Scythia (sith′i-a)
Asia minor (ā′zia mī′nor)
Alyattes (a-li-at′ēz)
Cyaxares (sī-aks′a-rēz)
Nabopolassar (na-bōp-ō-las′sar)

と其の有に歸せしが、國家の結合鞏固ならずして叛亂各地に起り、埃及先づ六五三年に獨立したり。其の後六三二年の頃北方の蠻族シミーリア族及びシ、ア族來侵し、一は小亞細亞に侵入し、一はミーヂアを過ぎて國内を蹂躙せしが、リヂア王アリアチース及びミーヂア王サイアクサリースの力により僅に之を擊退せり。これより國勢益衰へ、サイアクサリースはバビロンの大守ナボーポーラッサルと共に六〇六年アッシリアを亡ぼせり。是に於いて其の領土はミーヂア、リヂア、バビロニア及び埃及の四國となれり。後の二國は互に覇權を爭ひしがバビロニアは遂に埃及を破り、勢に乘じて猶太及びフェニシヤを幷呑し威力甚盛なりき。

波斯の東方統一

ミーヂアの盛なりし時イーラン高

Darius (da-rīus)
India (in′dia)
Susa (su′sa)
Ister (is′ter)
Aegean sea (ē-gē′an sē)
Cyrus (sī′rus)
Zend (zend)
Aryan (ar′yan)
Bactria (bak′tria)
Zoroaster (zō-ro-as′tēr)
Cambyses (kam-bī′sēz)

原は殆ど其の領土となりしが、後波斯の酋長サイラス之に叛きて獨立し、遂にミーヂアを亡ぼせり。この高原の住民はゼンド語を用ゐるアリアン派にして、宗教は一〇〇〇年頃に出でたるバクトリアの聖人ゾーロアスターの教へたる二元教を信じたり。さて波斯は其の後リヂアをも亡ぼし、五三八年にはバビロニアを滅ぼし、ガムバイシース王のとき埃及を亡ぼしゝかば、地中海の東南なる古來の開明國は盡へ其の領土となり、其の文物はみなこゝに集れり。ダライアス王に至り宏壯なる建築物を以て首府スーサを裝飾し、地方制度を革め、交通機關を整頓して邦國の團結を鞏固にし、また、精鋭なる軍隊を組織し、かくて東は印度に侵入し、西はイスター河北なるシシア族の地に侵入し、大に威をふるひ

しが、こゝに始めてイージーアン海西の希臘と大衝突をなすに至れり。

Hellenes (hel′ēns)
Greace (grēs)
Rome (rōm)
Homer (hō′mer)
Iliad (il′iad)

第三章　太古の希臘

地理及び人種　希臘の半島は海岸線の出入極めて繁多にして、近海には島嶼相連り、遠く埃及、フェニシアに對し、内地には山脈縱横に交叉して自ら許多の小區分をなす。こゝに文明を開きしはヘリーンスと自稱せしアリアン派の一民族にして、之をグリースと云ふは羅馬人の呼びし名より來れるなり。

傳說時代　希臘には古代の物語として傳へられたるもの種々あれど、就中詩仙ホーマーの史詩イリアッド及びオヂシによりて傳はれるもの最も著し。ホーマーによれば、此の頃希臘は幾多の小王國に分れ、人民は概ね丘陵に住し、城壁を繞らしたりきといふ。希臘の宗教は豐富なる想像力より出でたる優美なる多神教にして、ホーマーの史詩は其の神髄を表出したるものなり。

Odyssey (od′i-sī)
Doria (dō′ria)
Achaia (a-kā′ya)
Ionia (ī-ō′-nia)

民族の移轉及び殖民　この民族はドーリア、アケーア、アイオーニア等の種族に分れ居たりしが、一一〇四年頃に起れる民族の移動より、ひいて海外殖民の道を開きたり。其の最も主要なるものは、アイオーニア族にして先づイージーアン海の諸島及び小亞細亞の西岸にあふれ出でしが、これより九〇〇年頃までの間にアケーア族及びドーリア族も續々小亞細亞及び附近の島嶼に殖民地を開けり。其の

Peloponnesus (pelō-po-nē′sus)
Laconia (lakō′nia)
Lycurgus (likėr′gus)
Delphi (del′fī)
Aollo (a-po-′ō)
Amphictiony (am-fik′ti-on-i)
Olympia (ō-limpia)
Zeus (zūs)
Sparta (spärta)

後殖民地の數は次第に增加し、地中海上に於いてフェニシヤの殖民地を次第に蠶食し行けり。

全族の一致　かくて各民族は各々分れて數多の邦國をなしゝが、宗教、言語、及び血族の一致は、よく全民族の統一を保たしめ、殊にデルファイのアポロー神社を中心とせるアムフィクチオニ會オーリムピアなるジュース祭等は、全族の結合を鞏固ならしむるに與て力あるものなりき。ジュース祭は七七六年より四年毎に行はるゝ習なりき。

スパールタ　民族移轉の際、ドーリア族はペローポニーサスに入りて原住者アケーヤ族を征服せしが、これより少數の征服者と多數の被征服者との爭鬪絕えざりしかば、ラコーニアなるスパールタ府にては、八二〇年のころライ

Athens (ath′enz)
Attika (at′i-ka)
Solon (sō′lon)
Archon (är′kon)
Pisistratus (pisis′tra-tus)

カーガスの定めたる法律により、極めて嚴格なる尙武的訓練と公共的修養とを市民に施し、征服者たる市民の權力を增加するに勉めたり。其の結果よく被征服者を壓服し、更に進んで四隣を征服し、遂にペローポニーサスなる諸國に對して覇權を握るに至れり。この國は二人の王ある君主政體なりき。

アゼンス　アゼンスはアッチカなるアイオーニア族の首府なり。ドーリアン族侵來のとき古來よりの王政廢せられて貴族政治となりしが、これより貴族と平民との軋轢を生ぜしかば、五九四年ソーロンの執政たりしとき、一般市民に政權を分配してこの政弊を救治せんとせり。其の後ピシストラタス僭主となり、黨爭の弊を芟除して平民の利を

Tyrant (tī′rant)
Clisthenes (klis′-the-nēz)

圖るを務め、クリスゼニース出でゝ益國政を改革し民主政治の基礎を達てたり。この頃小亞細亞の殖民地に於いて哲學の研究起り、抒情詩の新體あらはれ、文字の術もはじまり、希臘文明の曙光先づこゝに放たれしが、其の地波斯の治下に屬せしかば、この覊絆を脱せんとして遂に希、波兩國の大衝突を起すに至れり。

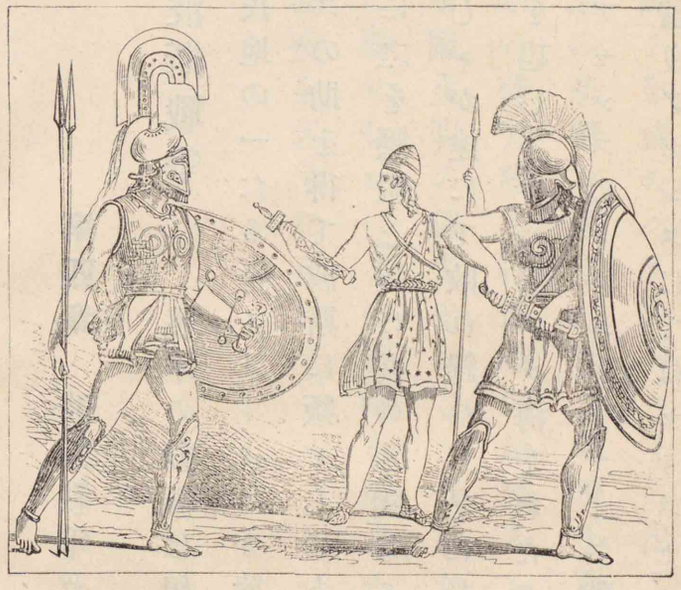
Aristides (ar-is-tī′-dēz)
Punic (pū′nik)
Pericles (per′i-klēs)
Miletus (mī-lē′tus)
Marathon (mar′athon)
Miltiades (miltīa-dēz)
Themistocles (the-misto-′klēz)

第二期　波斯戰爭よりピューニック戰爭まで(紀元前五〇〇—二六四)

第四章　波斯戰爭及びペリクリース時代

波斯戰爭　戰爭の動機は紀元前五〇〇年小亞細亞殖民地の一たるマイリータスが附近の同族を糾合しアゼンスの助を得て波斯に叛せしにあり。波斯王ダライアスは直に之を壓服し、更に其の本國なる希臘に對して遠征軍を出しゝが途にて敗れ歸れり。是に於いて王は更に遠征の大軍を起し、イージーアン海をわたりてマラソンに上陸せしが、アゼンスのミルタイアヂース擊ちて之を破れり。此の時に當りアゼンスにてはセミストクリース、アリスタイヂース

Xerxes (zėrk′-sez)
Thrace (thrās)
Thermopylae (thėr-mop′i-lē)
Salamis (sal′a-mis)



希臘武士及び其の從卒

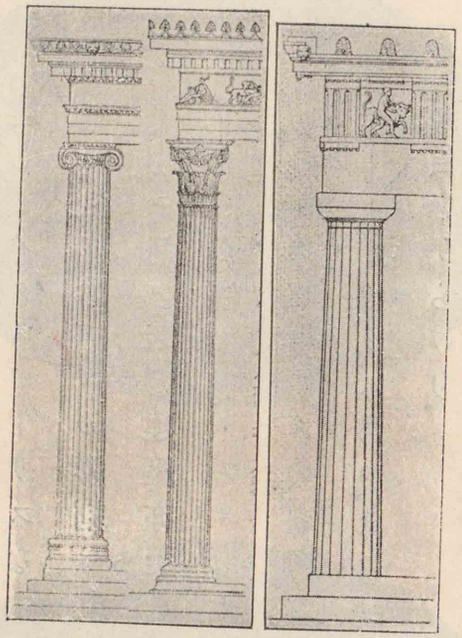
の二傑ありて互に權を爭ひしが、セミストクリース遂に政權を握りて大に海軍を擴張し邊防を嚴にし、四八〇年波斯王ザークシースが自ら大軍を率ゐてスレースより侵入し來るや、列國を糾合しスパールタを盟主として之を防げり。然るにサーモピリーの險先づ破れ、海軍も亦たサラミス灣に退き、形勢甚だ危急に迫りしが、ア

Delos (dē′los)

センス市民殊死して之と戰ひ、遂に大に敵軍を此の灣に破れり。

ペリクリース時代

戰終りし後、アゼンスにては一般市民に同等の參政權を與へて益平民政治の基礎を固うし、沿海諸府と新にデーロス同盟を組織して其の盟主となり、屢波斯の海軍を擊破し、遂に小亞細亞の殖民地をして波斯より獨立せしめたり。ペリクリース（四四四―四二九）がアゼンスの政を執るに及



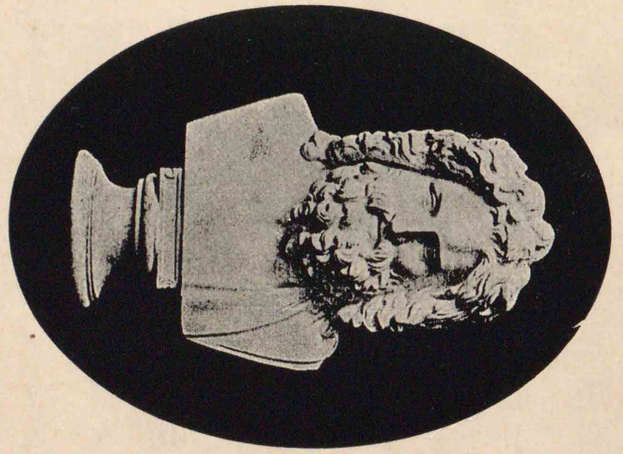
コリンシアン式　ドーリアン式　イオニアン式

Aristophanes (ar–is–tof'a–nēz)
Herodotus (he–rod'o–tus)
Thucydides (thū–sid'i–dēz)
Protagoras (pro–tag'oras)
Acropolis (ak–ro–pō'lis)
Athena (athē'na)
Phidias (fid'i–as)
Aeschylus (es'ki–lus)
Sophocles (sof'o–klēz)
Euripides (ū–rip'i–dēz)

び國勢益興隆せしが、之と共に學術技藝も著く發達して燦然たる文華の光彩を放ち、建築にはドーリアン式發達の極點に達してアクロポーリスなるアシーナ神社に其の標本をとゞめ、フィヂアスの彫刻は其の神像に不朽の美を遺し、アイオーニアン式の建築、亦た此の頃より流行し初めたり。文學にはエスキラス、ソフォクリース、ユーリピヂースの悲劇、アリストファニースの喜劇あり、史學にはヘロドタス及びシューシチヂースあり、またプロタゴラス出でゝ哲學に一新面目をひらけり。

ペローポニーサス戰爭　されどアゼンスの隆盛は希臘列國の猜忌心を惹起し、遂にアゼンス及び其の同盟とスパールタ及び其の同盟との間に戰爭を開き、ペローポニ

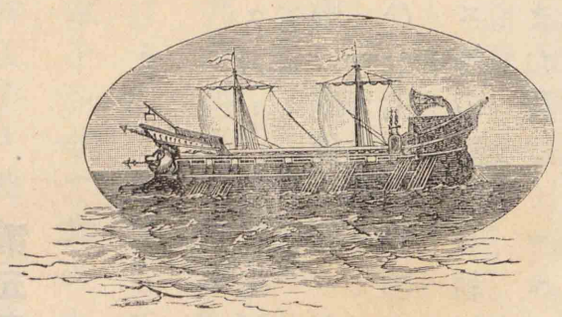
神ユピテル



神ユノー

Socrates (sok′ra–tēz)
Plato (plā′tō)
Aristotle (ar′–is–totl)

ーサス及び伊太利の殖民地に於いて兩軍相爭ひしが、四〇四年スパールタは波斯と連合して遂にアゼンスを陷れぬ。翌年に至りアゼンスの獨立は回復せられしも勢また古の如くならずなりぬ。



希臘船

三大哲學者

此の時に當りアゼンスにソクラチース出で倫理哲學をときて大に世道人心を警醒せしが、國神を信ぜず少年を誘惑すとの誣告を受けて遂に毒殺せられき。

其の門にプレートーあり、プレートーの門にアリストトルあり、前者は深遠高妙なる理想説を説き後者は該博精緻な

る諸種の學術を起したり。

Thebes (the′bes)
Macedonia (mase-dō′nia)
Alaxander (a-leg-zan′-dèr)
Epaminondas (e-pam-i-non′das)
Pelopidas (pelo-p′i-das)

第五章　スパールタ、シーブスの覇業、マセドーニアの勃興及びアレグザンダーの大業

スパールタ及びシーブス　スパールタはかくて希臘の覇權を握りしが、其の國は却て漸く古來剛健の風を失ひ、三七一年の頃より其の位地はエパミノンダス、ペロピダス等の國政を執れるシーブスに移りぬ。されどシーブスもまた程なくマセドーニヤのために其の權を奪はれたり。

マセドーニア　マセドーニアは純粹の希臘民族にあらざれども、歷代の國王熱心に希臘の文物を輸入せしかば、

國力漸く強くフィリップに至りて大に國威を擧げ希臘列國の班に加はり、三四六年アムフィクチオニ會の監理者となれり。是に於いてアゼンスなるデモスゼニースは列國を遊說し、波斯をも誘ひて之に抗せしかど、三三八年ケローニーアの役、其の軍大敗し、コリンスの列國會議はフィリップを希臘の盟主となしぬ。

Philip (fi-l′ip)
Demosthenes (de-mos′-the-nēz)
Chaeronea (ker-ō-nē′a)
Corinth (kor′inth)
Gaugamela (gâ-ga-mē′la)

アレグザンダー大王の東征　フィリップは希臘聯邦を糾合して波斯を征せんとする素志を抱きしが、未だ發するに及ばずして弑せられしかば、其の子アレグザンダー位をつぎて其の志を繼ぎ、三三四年東征の軍を發せり。彼はゆく〳〵波斯の軍を破り、小亞細亞、シリア、フェニシヤ、パレスタインを略して埃及を征し、路を轉じてゴーガミーラに

Parthia (Pär′thia)
Jaxartes (jax-sär′-tes)
Seleucus (selū′kus)

波斯王ダライアスの軍を破り、スーサを陷れて全く波斯を滅ぼし、それよりパールシア、バクトリアをへてジャクサールチースの彼岸に達し、又た印度を侵して歸れり。王は此の遠征中重要の地毎に新市府アレグサントリヤを建てゝ希臘人を在留せしめしが、これ其の素志東洋諸國を統一して希臘風の一大王國を建設せんとするにありし故なり。されど事未だ成らずして王は三二三年バビロンに歿し、其の領土も分裂せしが、就中マセドーニア及び希臘、シリア、埃及の三王國最も著しきものなり。たゞこれより希臘及び東方の文物は互に相混和してヘリーンス風の文明は地中海の東西に傳播したり。

シリア　シリアはセリューカスの領土なりき。其の版

Antioch (an′ti-ok)
Ptolemy (tól′e-mi)
Euclid (ū′klid)
Zeno (zē′nō)
Stoic (stō′ik)
Epicurus (ep—kū′rus)

圖地中海よりジャクサールチース及びシンドに達し、其の都アンチオクは東西交通の衝に當りて其の文物融合傳播の媒介となれり。其の後パールシア(安息)バクトリア(大夏)パレスタイン相次いで獨立分離し、シリアの勢傾けり。後バクトリアは月氏に滅ぼされ、パールシアも亦た其の襲擊を受けたり。

埃及　埃及なるトレミ家歷世の國王は文學技藝の奬勵、商業貿易の保護に力を盡し、アレグザンドリアは爲に學術及び商業の中心となれり。トレミの地理學、ユークリッドの幾何學は實に此の處に出でしなり。

マセドーニア及び希臘　希臘の文物は依然としてアゼンスに存し、ジーノー(ストーイック派)エピキューラス、

Gaul (gâl)
Sicily (sis′i-li)
Pyrrho (pir′ō)
Aetolia (ē-tō′lia)
Rome (rōm)
Italy (it′a-li)
Apennine (ap′e-rīn)
Alps (alps)

ピロー等の哲學者輩出し、コリンシアン式の建築流行し、繪畫彫刻は纖巧に傾きしかどもなほ盛に行はれたりき。政治上に於ては希臘人がマセドーニアに服從するを屑とせざるより、アケーヤ、イートーリアの二同盟起りて其の羈絆を脱せんとし、スパールタと鼎足の勢をなしゝが、其の間また相乖離して兵を交へ、イートーリアは遂に羅馬の援を乞ふに至れり。

第六章　羅馬の建國及び其の伊太利征服

地理及び人民

伊太利半島には數多の民族あり、アペナイン山の北アルプス山の南にゴール人據り、シシリの西部はフェニシヤ人の殖民地にして其の東部及び半島の南

Patrician (patri-sh′an)
Plebeian (ple-be′yan)
Tiber (tīber)
Etruscan (e-tras′-kan)
Latin (lat′in)
Sabine (sabēn′)
Albalonga (a′lda-long′ga)
Romulus (ro-m′ū-lus)

端に希臘人の殖民地あり、而して、タイバー河の右岸にエトラスカン人あり、左岸にはアリアン派なるラチン及びサビーン人ありて羅馬市は殆ど此の三族の會合點に位せり。

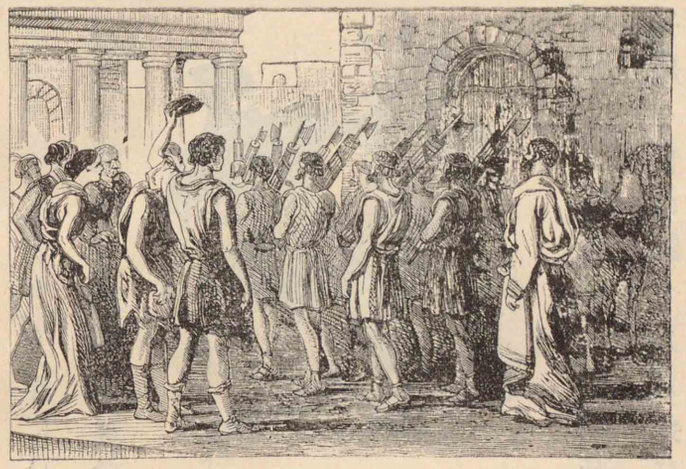
羅馬の平民

王政

傳說によれば羅馬は七五一年ラチン民族なるアルバ、ロンガ府の王子ロミューラスが、タイバー河畔に創設せし所にして、其の後七王相つぎて選立せられたりきといふ。羅馬はこの間漸次ラチン諸都府を征服して其の捕虜を伴ひ歸り又た連に移住民を招致せしかば、原住者パトリシャンと新來者プレビーヤンとの間に階級の區別生

Senate (senā't)
Republic (repub'lik)
Consul (kon'sul)

じ、前者は元老院を組織して政治に參せしも、後者は毫も公權を有せざりしを以つて、其の間に爭鬪絶えざりしかど、外に向つては次第に威を同族市府の上に振ひ、遂に其の盟主となれり。政體は五一〇年より共和政治となり、貴族より選ばれたる二人の執政（コンサル）に當ることゝなりぬ。



執政及び衛兵

貴族及び平民の爭鬪

貴族（パトリシヤン）平民（プレビーヤン）の爭鬪は是より益々激烈となり、平民は政治上の同權を得ざるを憤り、特に小

Tribune (tri-bun)
Licinius (li-si-n'ius)

地主及び借地人は公有地分配法の偏頗、兵制の不公平及び負債法の苛酷にして奴隷の域に陷るもの多きを怨みしが、四九四年平民意を決してこの府を退去せんと謀るに及んで貴族は漸く讓歩し、平民より二人の保民官（トリビューン）を選出すべきを定めたり。これより平民の權利は次第に增加し、四五〇年十二銅標の法律編纂せらるゝに至れり。其の後も兩族の爭なほ全く絶えざりしが、他民族との戰爭は還つて平民の權利を增す因緣となり、三六七年ライシニアスの改革案通過し、執政の一人は必ず平民より選ぶことゝなり、兩族の爭は次第に減少しゆけり。

近隣諸民族との戰爭

この間羅馬の外征は概ね勝利を得て三三八年ラチン同盟を解散し、二九〇年には非ラ

Samnium (sam′nium)
Tarentum (taren′-tum)
Rubicon (rö′bikon)
Macra (mak′ra)

チン民族の大聯合を擊破して南方サムニアム地方を平定し、遂に希臘殖民地タレンタムを併呑するに至れり。かくてルービコン、マクラ兩河の以南以太利の全土は悉く羅馬の所領となりしが、これより威を海外にふるはんとして先づカルセージと希臘風の文明行はるゝ地とに其の鋒をむけたり。

German (jér′man)
Aegatis (ē-gā′tiz)
Province (pro-v′ins)
Cisalpine Gaul (sisal′pin gâl)
Sardinia (sar-di-n′i-a)
Spain (spān)

第三期　ピューニック戰爭より日耳曼民族の移轉まで（紀元前二六四年——紀元三七五年）

第七章　羅馬の外國征服

第一及び第二ピューニック戰爭　陸上の主宰たる羅馬と海上に優勢を有するカルセージとの衝突は茲に至つて免るべからず、二六四年兩國遂に戰端を開きぬ。羅馬は鋭意海軍を擴張して敵に當り、イーゲーチスの海戰に大勝を得しかば、二四一年羅馬は殆どシヽリの全島を取りて屬領（プロヴインス）となし和を許せり。其の後羅馬はシサルパイン・ゴール及びサルヂニアを併呑して益勢をふるひしが、カルセージも國勢の挽回を計りて先づ西班牙を征服し、進んでゴールと盟

Hannibal (han′i-bal)
Scipio (sip′ō)
Africanus (af-ri-ka′nus)

約し、東方にてはマセドーニアと同盟を結び、二一八年西班牙の守將ハンニバルはアルプスを超えて伊太利に侵入し、其の地を蹂躪せり。然るに羅馬は其の同盟國を攻擊し、又たシピオー（老アフリカナス）は直ちにカルセージに侵入して大に之を破りしかば、カルセージは二〇一年西班牙及び地中海に於ける領地を羅馬に讓りて和を媾

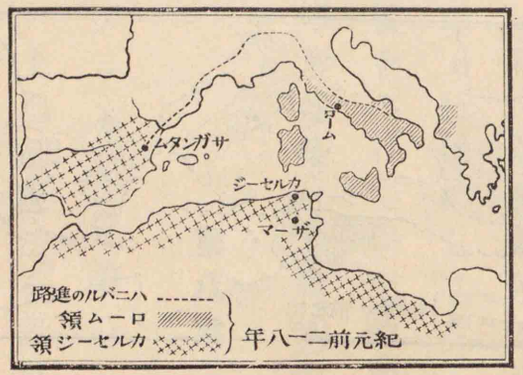
羅馬の兵卒

Taurus (tâ′rus)
Cato (kā′tō)

じぬ。

マセドーニア及び希臘の征服

マセドーニアはシリアと聯合して羅馬の勢に抗せしかば、羅馬は希臘の列邦を助けて之を擊ち、先づマセドーニアより希臘を獨立せしめ、シリヤよりトーラス山以西を取り、次いでマセドーニアを滅ぼしゝが、程なく希臘列邦間の爭鬪に干與して次第に之を滅ぼし、一四六年コリンスを破壞し、遂に其の全土を屬領となせり。



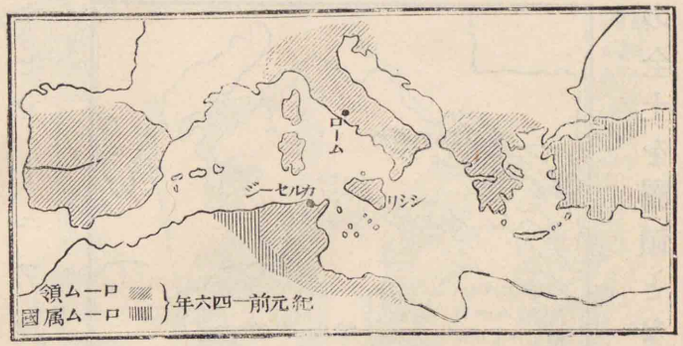
第三ピューニック戰爭

其の後羅馬はケートーの議に

從ひ一四六年にシピオー（小アフリカナス）を遣はしてカルセージを伐たしめ、遂に其の市を陷れぬ。此の時七十万の市民概ね戰死し、殘餘の民は悉く奴隷とせられたり。

屬領の政治及ひ羅馬の繁榮

羅馬はかくて西、西班牙より東、小亞細亞に至り、地中海の南岸をも併せて八屬領を有するに至れり。而して此等の地方より徵收し來る財貨は官吏社會が豪奢の料となり、建築造營壯麗を爭ひ、遊宴嬉戯華美を競ひしが、奴隷の數は甚しく增加し、屬領の穀物輸入せられて小農其の業を失



Tiberius Gracchus (tibé'rius grak'us)
Caius Gracchus (kā'yus grak'us)

ひ、土地は次第に富者に兼併せられ、貧富の懸隔日に加はりぬ。されと此の時より希臘の文藝は盛に輸入せられ次第に一種の希臘羅甸的文明を陶冶するに至れり。哲學に於いて最も行はれしはストーイック學派にして、法律學も其の影響をうけて學術的研究の域に入り、またエトラスカン式の穹形建築は希臘式の圓柱法と相混じて一新機軸を出せり。

第八章　羅馬の內亂及び其の版圖の擴張

グラカス兄弟

一三三年保民官チビーリアス・グラカス土地制限法を設けて貧民を救はんとせしが富者のために殺され、其の弟ケーヤス・グラカス兄の遺志をつぎて貧民の利益を增加せんとはかりしが遂に又た失敗せり。

Pontus (pon′tus)
Mithridates (mith–ridā′tēz)
Dictator (diktā′tor)
Pompey (pom′pi)
Triumvirat (trium′virāt)
Marius (mā′rius)
Numidia (nūmid′ia)
Jugurtha (jü–gėr′tha)
Cimbri (simbrī)
Teuton (tū′ton)
Sulla (sul′a)

兩黨と外戰

かくて貧富の軋轢益はげしく、貧民黨の領袖メーリアスは一〇五年ニューミヂア王ジュガーサを伐ち、又た北狄シムブライ及びチュートンを討滅して大に名聲を博せしが、富民黨の首領サラが小亞細亞なるポンタス王ミスリデーチースを伐たんとして遠征せる虚に乘じ、其の黨人を殺戮して政權を握りしかば、サラは急に歸りてメーリアス黨を殺戮し、八二年自ら無期のヂクテートルとなりて政權を其の手に收めたり。其の後富人黨のポンピなるもの東洋鎭壓の全權を委せられて亞細亞に至り、パールシアと盟約してポンタスを亡ぼし、又たシリアを幷せ、パレスタインをも服屬せしめて歸りぬ。

三頭政治（トライームヴィレート）

ポンピは其の意見の政府に容れられざりしを憤り、反つて貧人黨のシーザルと結び、又たクラサスといふものとも同盟し、三人協力して六〇年遂に政府の全權を握れり。三人は相約し、シーザルはゴールの大守となり、ポンピは西班牙の大守となり、クラサスはシリアの大守となりしが、クラサスは程なくパールシアと戰つて死せり。ポンピは目代を任地に遣はし、獨り羅馬に駐つて威福を弄したりしが、シーザルはこの間に全くゴールを平定し、二回ライン河を渡り、二回ブリタニアに上陸し、大にローマの威を揚げ、又た自己の勢力を養ひしかば、ポンピは之を妬みて遂に之と不和を生じ、兩勇相爭ふに至れり。シーザル是に於いて兵を率ゐ、羅馬に迫りしが、ポンピは希臘にのがれしかば追擊して之を破り、それより亞弗利加の政敵を倒し、西班牙の

Caesar (sē′zar)
Crassus (kra′sus)
Rhine (rīn)
Britania (bri–tan′i–a)

Imperator (imperā′tor)
Brutus (brū′tus)
Cassius (kas′i-us)
Antony (an′tə-ni)
Octavius (ok-tā′vius)
Lepidus (lep′i-das)

殘黨を殲し、遂に全勝を得たり。

シーザル　シーザルは是に於いてイムペレートル(文武の大都督)となり、ついで終身のヂクテートル及びコンサルとなり、政權を一身に掌握せり。其の政績の著明なるものは西斑牙及びゴールの人民に公民權を與へ、四方の屬領に羅馬の貧民を移住せしめたる事なるが、其の他財政及び法制を整頓し、太陽曆を執行したるも其の力なり。其の後パールシアを征せんとせしが未だ發せざるに先ちブリュータス、カシアス等に殺されたり。されど政權は程なくシーザルの黨與アントニ、オクテーヴィアス及びレピダスの手中に落ち、所謂第二回の三頭政治なるもの起り、オクテーヴィアスは西部、アントニは東部、レピダスは亞弗利加を分治する

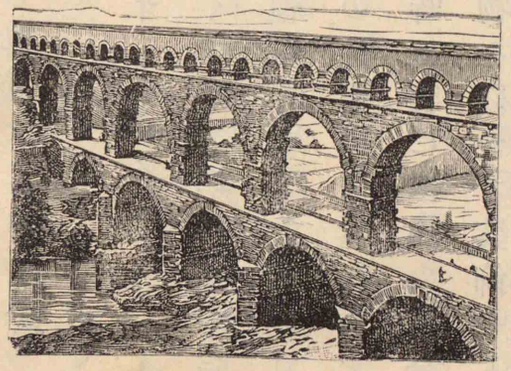
Augustus (â-gus′tus)
Octavianus

約を結びしが、オクテーヴィアスは遂に二人の所領を併呑し、且つ埃及を滅し、三〇年に至り全く天下を統一せり。

第九章　帝政の盛時及び基督教

オーガスタス・シーザル　オクテーヴィアナスはかくて二七年に元老院よりオーガスタスの尊號を受け、其の他重要なる文武の官職を盡く一身に帶びければ、共和政治の外形は依然たれども其の實全く君主政治となれり。この時は實に羅馬の黃金時代にして、市街は宏大莊麗なる建築物を以つて裝飾せられ、世界的大帝國の首府たるに愧ちざるに至れり。當時羅馬の領土は殆と地中海を包含し、北はラインを以つて日耳曼(ジャーマン)種族と境を接し、東はユーフレーチー

ス河に於いてパールシアと接せしが、オーガスタスは地方の制度を改め、近衛軍及び地方邊鎮の制を定めて之を統治せり。かくて廣大の領土は羅馬を中心として一君の統治をうけしかば、羅馬の文明は次第に各地方に傳播せしが、希臘以東の諸州に於いてはなほ希臘文明の特色を有し、また其の包含するところ雜多の民族なるを以つて、之が精神的統一をはからんがため、帝王崇拝の教を設けて羅馬の領土に一定の國教を布かんとせり。然るにこの時東方猶太の一寒村に耶蘇基督生れ、其の教羅



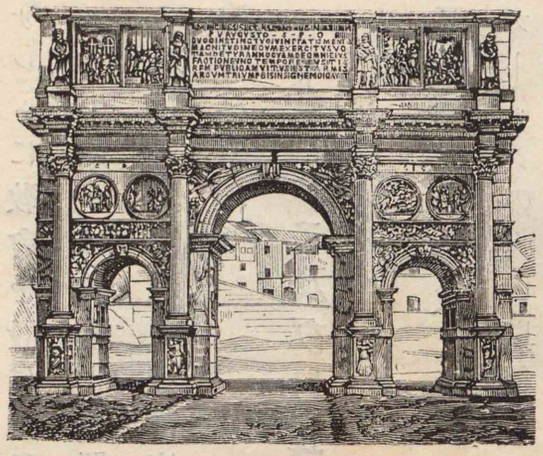
水道

Jesus Christ (jē′zus krist)
Bethlehem (beth′-le-em)

馬に傳播するに至りぬ。

基督教

猶太人は常に他國の羈絆を脱する能はず種々の辛酸を嘗めたりしが、尚ほ古來の一神教を固守し必ず救世主の出でゝ國運を開導する期あらんと信じたりき。然るに羅馬甚だ強盛にして猶太は殆んど滅亡せんとし益悲境に陷りしが此の時ベスレエムに耶蘇基督（ジーザスクライスト）（所謂紀元前四年に生れたりと傳へらるゝ）なるものありて自ら救世主なりと公言し、猶太の勝利は政治界にあらずして精神界にありといひ、新に



羅馬の凱旋門

Poul (pâl)
Peter (pē′ter)
Teutoburg (toi′to-börg)
Mauretania (mâ-re-tā′nia)

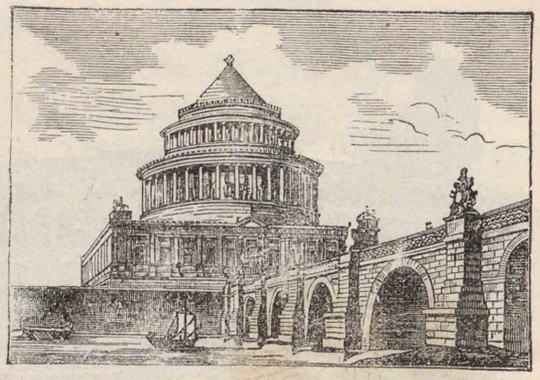
*以下の年代は皆紀元後なり

其の教を唱へたり。されど時人の容るゝ所とならず叛逆の誣告をうけて磔刑に處せられぬ。後其の十二使徒ジェルーサレムに教會を設けて猶太民族を教化し、ポール及びピーターの如きは希臘より羅馬に來つて其の道を傳へしが、其の教は羅馬國教との衝突を來して歴代帝王の爲に甚しき迫害を蒙れり。

パールシア及び日耳曼

オーガスタスは東方に於いてパールシアと和親を結びしかど、北方に於いては屢日耳曼諸族と戰ひ、イスター河南を收めしが紀元九年、トイトブールグの大敗以後ラインの右岸には遂に其の威を及ぼす能はざりき。帝の後數代の間に領土は益擴張せられて南部ブリタニア、モーレテーニア、スレース等も亦た加はりしが、オーガスタスの統たえてより軍隊漸く勢を得て帝王の選立に關與するに至り、これより後帝位は概ね地方邊鎮の守將の交る〳〵廢立簒奪する所となり、外敵に對してもライン、イスター間及びブリタニアの國境に堡塞を城きて保守防禦の策を主とするに至れり。

Nerva (nėr′va)
Trajan (trā′jan)
Hadrian (hā′drian)
Antonius Pius (an-tō′ni-us pī′us)
Marcus Aurelius (mär′kus â-re′lius)
Plutarch (plu′tärk)



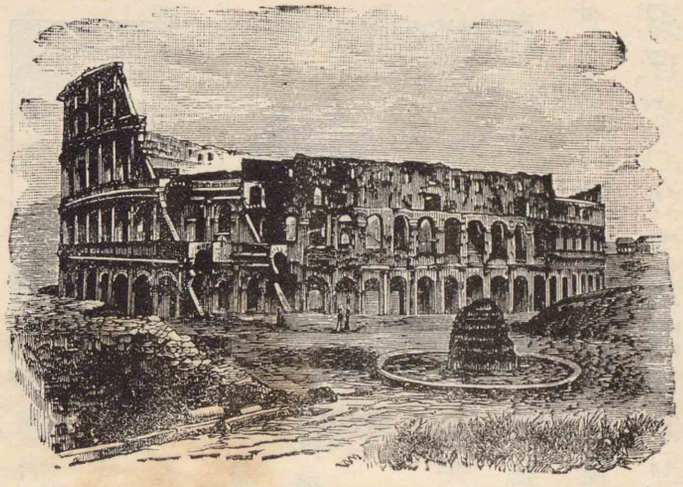
ヘードリアン帝の墓

帝國の繁盛及び其の弊風

ナーヴァ、トレージャン、ヘードリアン、アントーニアス・パイアス、マールカス・オーリーリアス五帝の治政（九六——一八〇）間は羅馬が繁榮の極點に達せし時にしてプルーターク、タ

Tacitus (ta-s'i-tus)
Seneca (se-n'e-ka)
Epictetus (ep-ik-tē'tus)

シタス等の文士輩出して文藝大に現はれ、建築造營連に起り、商賈交通もまた進みたり。されど市民の道德は甚だ壞頽して逸遊淫靡に陷り、奴隷の賣買盛に行はれて其の待遇は苛酷を極め、卑猥なる喜劇、殘忍なる競技、一般に流行したりき。セネカ、エピクテータス等のストーイック哲學者が顯はれしはこの時なり。されば、これより後は政綱次第に壞廢して軍隊の跋扈漸く甚しく、外敵は益强大となり



羅馬の劇場

Artaxerxes (ar-taksérks'ēz)

て國威復た振はざりき。

第十章　帝國の衰運

近衛軍及び邊鎭の跋扈

其の後凡百年間の帝王は概ね近衛軍及び邊鎭の擁立する所にして廢立常なく簒奪相繼げり。而して此の間或は屬領の人民に公民權を與へて歲入の增加を圖り或は日耳曼人を軍隊に編入し又た之に土地及び官職を與へしが如きは實に羅馬中心の制度を破壞せしものなりき。

帝國の二分

此の時に當り、東方にては二二六年アルタクサークシース一世パールシアを亡ぼして新に波斯國を創め、新興の勢を以て亞細亞地方を統一せんとしければ、

Nicomedia (ni-ko-mē'dia)
Mediolanum (mē-di-ō-lā'num)
Milan (mi'lan)
Constantine (kon'stan-tīn)
Byzantium (bi-zan'tium)
Saxon (sak'sn)
Frank (frangk)
Alamanni (ala-man'i)
Goth (goth)
Euxine (ūk'sin)
Diocletian (dī-o-klē'shian)

羅馬は屢之と交戰せしかど却て敗北し、又た北方に於いては日耳曼諸民族の勢力益加はり、サクスン族は北海の濱に向ひ、フランク族はゴールに、アラマニ族は伊太利に臨みて侵攻絶えず、ゴス族はユークシン海の西北方に割據し、イスター河をも渡りて連に來攻したりき。是に於いて二八四年ダイオクリーシアンの位に上るや、帝國を分割して二人のオーガスタスを立て、ニコミーヂア、ミーヂオーレーナム（今のミラン）にありて東西を分治し、又た別に二人のシーザルを置きて邊疆を統治せしめたりしかば、一時各地の叛亂を平げ外敵を防ぐを得たり。されど帝の沒後は各地に帝號を稱するもの多く、益々紛亂を增したりしかば、三二三年コンスタンタインまた全國を一統して都をビザンチアム（今のコンスタンチノープル）に移し大に國政を改革せり。

Constantinople (kon-stan-ti-nō'pl)
Nicaea (nī-se'a)

基督教の公許

これより先き基督教は各地に傳播し既に亞弗利加よりゴール地方にも及びたりしが、コンスタンタイン始めてこれを公許し之を羅馬の國教となせり。羅馬の政治的統一漸く破壞に近つきて基督教は精神的統一の歩をすゝめたりしなり。されど教會の內部に於いては神學の研究盛になれると共に教理上の異說紛々たりしかば、コンスタンタイン帝は三二五年ナイシーアに宗教會議を開きて信條を一定したり。かく宣教の盛なるに從ひ教會の組織も次第に整頓し來り、アレグザンドリア、アンチオク、コンスタンチノープル及び羅馬の教會は其の地方小教會を統轄するに至りぬ。

Burgundy (bér′gundi)

帝國の壞頽　帝の沒後帝國の內部は分合常ならず、外に對しては屢波斯と兵を交へ、又たフランク、アラマニ及び此の時ラインの上流に來れるバーガンヂ族と戰絕えざりしが、三七五年ゴス族の動搖より日耳曼種族の大移轉を招き、以つて帝國の大混亂を開きぬ。

Suevi (swē′vī)
Vandal (van′dal)

Charlemagne (char′le-mān)
Neckar (nek′kär)
Alamanni (ala-man′i)
Elbe (el′be)
Thuringia (thurin′-jia)
Lombardy (lom′bardi)

第二卷　中古史

第一期　日耳曼民族の移轉より、チャーレメーン帝國の分裂まで(三七五——八四三)

第一章　日耳曼民族の移轉及び其の建國

地理及び人民　日耳曼民族は此の時ネッカール河畔にバーガンヂ族あり、マイン河畔にアラマニ族あり、ライン河の下流にフランク民族あり、其の東エルベ河に至るまではサクスン族の地にして、其の南にチューリンヂア族あり、又たエルベの下流にロムバルヂ族あり、東南地方にはスヰーヴァイ族あり、ヴァンダル族あり、西ゴス族あり、黑海の北岸に東ゴス族あり。而して此等日耳曼民族の東北なる平原

Ravenna(ra-ven'a)
Slav (slav)
Alani (a-lā'nī)
Itil (itil')
Hun (hun)
Theodosius (the'-o-dō'shi-us)
Alaric (al'a-rik)

地方はスラヴ民族の占領する所なれども、コーカサス山の北にはアレーナイ族(日耳曼族の一派)あり、其の東方イチル水域にハン族ありき。

ハン族の侵入ゴス族の西進　三七五年ハン族はアレーナイ族と合して東ゴス族を侵擊し、又之と共に西ゴス族に迫りければ、基督敎徒なる西ゴス族は帝國の領土内に移住したり。帝國は三九五年シオドーシアス沒後より永く東西の二帝國に分裂せしが、西ゴス王アラリックの伊太利に侵入するに至り、西帝國は都をラヴェナに移し、ゴール、ブリタニアの邊鎭を招還して之を防ぎしより混亂は更には げしくなりぬ。羅馬は四一〇年一度びアラリックのために陷られたり。

Tolosa (tō-lō'sä)
Genseric (jens-er-ik)

西ゴス及びヴァンダル族の建國　是に於てフランクはゴールの北部に侵入し、バーガンヂは上ライン地方を占領し、ヴァンダル、スエーヴァイ、アレーナイ族等はゴールを横りて西班牙に侵入せり。然るに西ゴスは西帝國より此等の諸族に對する藩鎭としてゴール、西班牙に移住するを許され、四一五年都をトーローサーに定め、次第に西班牙を征略せしかば、スエーヴァイ族は西北部に追はれ、アレーナイ族は分裂し、ヴァンダル族は其の王ジェンサーリックに從ひて四二九年に阿弗利加に渡り、後カルセージを取りて首府とし、地中海上の諸嶋を征服せり。又た北方に於いてバーガンヂ族はゴールの東南部に進み、アラマニ族は上ライン地方を占領せり。

Attila (at'i-la)
Cata'aunia (ka-ta-lâ'nia)
Odovacar (ō-dō-väkar)

アッチラ　此の時に當りイチル河よりライン河に至りイスター河よりボールチック海に至る廣大の土地は盡くハン族の所領となり、其の地の日耳曼民族及びスラヴ民族皆な之に服屬せしが、其の王アッチラは四四一年東帝國を侵し、更に西帝國に向ひてゴールに侵入し、四五一年西帝國及び西ゴス、バーガンヂ、フランク諸族の連合軍とカタローニアに大戰し、翌年更に伊太利に侵入せしが中途にして退きぬ。されど四五三年アッチラ沒して後其の國は忽ち瓦解せり。

西帝國の滅亡　此の項、西帝國の政柄を握りしものは傭兵たる日耳曼人なりしが四七六年其の長オードーヴァーカルといふもの遂に帝を廢して自ら伊太利の執政となれり。西帝國是に於いて滅びぬ。

Theodoric (the-od'orik)
Merovingian (merovin'jian)
Clovis (klō'vis)
Syagrius (sīā'grius)

東ゴス王國　東ゴス族は是より先き東帝國の保護を得てパノーニア地方にありしが其の王セオドリック伊太利に侵入して四九三年オードーヴァーカルを仆しラヴェナを首府として王國を建てたり。

フランク王國　フランク族はメロヴィンジアン家の王クローヴィス之を統一して其の王となり、四八六年西帝國の將軍サイエーグリアスが有せるゴールの西北部を略取し、其の後アラマニを滅ぼし、バーガンヂを從へ、西ゴスの地を蠶食せしが、之と共に次第に羅馬文明の風化をうくるに至れり。フランク族がかくゴールを略取するに當りて、其の土地の大部は王の領土となし、其の殘餘をば部下に分與

Ireland (īr′land)

Jut (jöt)
Angle (ang′gl)
Scot (skot)
Pict (pikt)
Wessex (wes′eks)
Egbert (eg′bert)

して其の私領となさしめたりしが、これ後の封建制度の基礎となりしものなり。

英吉利王國　ブリタニアは四四九年頃より六世紀の頃まで漸次ジュート、サクスン、アングルの諸侯侵入し、土人をば或は驅逐し、或は征服して四王國を建設したりき。列國は互に相爭ひ、又たスコット、ピクト諸族とも相戰ひしが、八二八年に至りエッセクス王エグバート始めて全國を統一し英吉利王國を建設せり。

日耳曼諸族の改宗　日耳曼民族の東南地方にありしものは移轉の前より既に基督教に歸依せしかフランクもクローヴィスの時に至りて之を奉じ、アイルランド及びブリタニアにも亦た此の頃より宣教の道開かれぬ。

Justinian (jus-tin′ian)
Avar (ä′vär)
Moravia (morā′via)
Bohemia (bō-hē′-mi-a)
Poland (Pō′land)

第二章　東羅馬帝國

東帝國の內部は其の後紛亂相次いジャスチニアンて起りしが、ジャスチニアン（五二七—五六五）の位に即きてより一たび國勢を振興したり。浩瀚なる法典を編纂したるは其の大事業にして又た支那の近傍より養蠶の術を傳へ、壯麗なる建築（ビザンチン式）を營み、外に於いては波斯と戰ひ、ヴァンダル王國を滅ぼし、東ゴス王國を仆し、又た西ゴス王國の一部分をも蠶食せり。

スラヴ族の動搖及びロムバルト王國　此の時スラヴ族は東方よりアーヴァール族の侵攻を蒙り、其の一部は西に向ひてモレーヴィア、ボーヒーミア、ポーランド等を

Turk (tėrk)
Saracen (sar'a-sen)
Bulgaria (bul-gā'ri-a)
Alboin (al'boin)
Pavia (pāvē'a)
Abtal (ab-tal)
Chazar (ėha'zar)
Khosru (kos-rō)

占領し、遠くボールチック海の濱に及び、他の一部は南に向ひてブルゲーリア族と共にダニューブ河の南に侵入せり。またロムバルド王アルボインは伊太利の大半を征略し、五六八年パーヴィーアを首府としてロムバルド王國を建てたり。

波斯　波斯は曾て東方のアプタル北方のハザルと常に兵を交へしがコスルー一世の時突厥と不和を釀しければ、東帝國はヂャスチニアン二世の時突厥と連合して波斯に當り、これより兩國相爭ふこと絶えざりき。

第三章　サラセン帝國の勃興

モハメット　亞刺比亞の民は、セミチック派に屬し、遊牧

Koran (kō-ran)
Mohamed (moham'ed)
Mecca (mek'a)
Medina (medē'na)
Hegyrah (hej'i-ra)
Moslem (mos'lem)
Caliph (kā'lif)

商業を業として偶像教を奉じたりしが、メッカの人モハメッドのとける一新宗教に歸依してより忽ち世上の一大勢力となれり。彼は少時より商業に從事してシリア地方に往來し、基督教及び猶太教の感化を受けたりしが、四十歳の時自ら上帝の天使なりと信じ、眞神の唯一なるを說きて、其の福音を傳へんとしたりしなり。されど初めは市民に容れらずして六二二年メジーナに逃れ(之をヘジラと稱しモスレムの紀元とす)こゝに兵威を蓄へてメッカを陷れ、遂に亞刺比亞を統一したり。

版圖の擴張　モハメッドの沒後、代々の嗣者、經典(クーリッコーラン)と刀劍と朝貢との三者を以て四方に臨み、シリア、埃及を征略し、六四二年波斯と戰ひて之を滅せり。波斯王は援兵を唐の太

Charles (chälz)
Bagdad (bag-dad′)
Cordova (kor-dō′va)
Harun-al-Rashid (hä-rön-äl-rashid)

宗に乞ひしが効なかりしなり。後都をダマスカスに移し、東帝國を侵して利あらず、鋒を轉じて亞弗利加を征服し、西班牙に伐ち入りて西ゴスを滅し、進んでゴールを侵しゝが七三二年フランクの宮宰チャールスに破られぬ。東方に於いては又た中央亞細亞及び印度に侵入して益、其の版圖を擴め、後都をバグダッドに移せり。たゞ西班牙の地は七五六年よりコルドーヴァを首府として獨立せしかばサラセン帝國は是に於いて東西に分裂せり。

サラセン帝國の繁盛　サラセンはハールーン・アールラシド（七八六―八〇九）の頃最も繁榮を極め、バグダッドは啻に商業の中心となりしのみならず又た文學技藝の淵藪となり、希臘の文學印度の學術はこゝに集りて熱心に研究せられ、

Pepin (pep′in)
Fieff (fēf)
Feudal system

又た到る處に學校の設あるに至れり。されど衰運は既に其の裏に崩し、突厥人漸く實權を得て埃及の如きは獨立國となりぬ。

第四章　西羅馬帝國の復興

メロヴィンジアン家の衰頽　フランク王國は其の後チューリンジア、バーガンヂを滅ぼし、東ゴス王國の西北部を蠶食せしが、六八七年宮宰ペピンが其の政權を握りてフランク公と稱せしより益强大となれり。其の子チャールスは日耳曼人古來の風習を利用し領土を封地（フイーフ）として臣下に割與し、其の報酬として軍馬の役に服する義務を負はしめ、以て所謂封建制度（フユーダルシステム）の基礎を定めたり。かくて七三二年大に

サラセン軍を破り、之を西班牙に打ち退けぬ。

羅馬法王とフランク王との結托

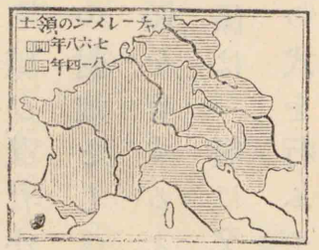
羅馬が政治上の位地を失ひてより羅馬僧正(法王)の權力は却つて次第に加はり來りしが、五九〇年グレゴリ其の職に就き希臘教會より分離して西方の教會を總轄せしより法王の權一層鞏固となり、羅馬ガゾリック教は全く獨立したりき。其の後偶像破壞のことに關して東西の教會に衝突起り、羅馬市民は法王を戴きて東帝國と抗爭せしが、ロムバルト王此の機に乘じて羅馬を占領せんと計りしかば、法王はフランクなるチャールスの子ペピンの助を求め、其の力によりてロムバルド王を破り、地を割き取りて法王の領土となせり。これを法王領の基礎となす。ペピンは七五一年フランク王となり

Gregory (greg'o-ri)
Catholic (kath'o-lik)

てカロリンジアン朝を創めたり。

チャールス大帝(チャールレメイン)

七七一年チャールスのフランク王となるや、ロムバルド王國を併呑して伊太利王の稱を冒し、サクスン國及び東北地方の諸族を征服し、オーデル河よりエーブロー河に至る廣大の領土を統一して、八〇〇年羅馬なるピーター寺にて法王より西羅馬皇帝の帝冠を加へられたり。之を西帝國の復興とす。當時宗教及び文學の中心となりしはベニーヂクト派の僧にして、制欲、樂貧、從順の三條を奉じ、基督教の宣布に身を委ねたり。當時學者の用語及び教會の文書はラテン語の稍變化せしものにして、各地方の俗語は未だ文書に



Carolingian (kar-ō-lin-jian)
Oder (ō'der)
Ebro (ā'brō)
Benedict (benēd'ikt)

用ゐられず、純粋なるラチン古典の研究も次第に衰へゆきぬ。

封建制度の發達　封建制度はこれより益發達し、王の臣下たる領主も其領地を自己の臣下に與へて君臣の關係を結ひ、又た小領主は其の領地を大領主に納め、更に之を其の封地として受領するもあり、各地の僧正も亦た其の教會領を有するより同樣の關係を結ぶに至りしかば、君臣の關係は一般に又た幾層にも行はるゝに至れり。君臣既に宣誓の式を行ふや臣は君の軍務に服し、政務に參し、又た君の捕虜となりたる時之を償ひ、其の嫡子女の冠婚に當りて資を獻ずべき義務を負ふ定めなりき。

Scandinavia (skan-di-nā'via)
Denmark (den'märk)
Norman (nôr'man)
Norway (nor'wā)
Normandy (nôr'man-di)

第二期　チャールレマーン帝國の分裂より法王グレゴリ七世の登位まで(八四三—一〇七三)

第五章　四方の蠻人及び希臘帝國

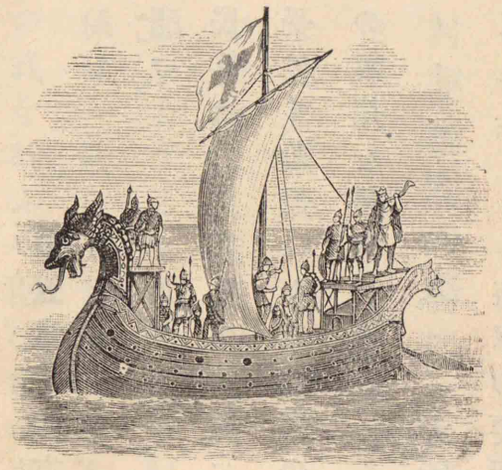
北人　スカンヂネーヴィア及び丁抹(デンマーク)半島なる日耳曼民族は曾て羅馬の文化に接せず、又た未だ基督教の感化を受けず、殺伐にして航海の業に長じ、八〇〇年の項より各國の海岸を侵略せり。

ノールマン人　大陸の海岸を劫掠せしは多く那威(ノルウェー)人にして、ゴール海岸の要所は殆ど其の害を蒙らざる所なかりしが、九一一年西フランク王がノールマンヂを之に與へ

Sweden (swē′den)
Iceland (ī-s′land)
Greenland (grēn′land)
Vinland (vin′land)
Dane (dān)
Alfred (al′fred)
Cannute (ka′nūt)

てより、其の災始めてやみぬ。那威人は又た遠くアイスランド、グリーンランド、ヴィンランドを發見して殖民地を開きたりき。

デーン人　英國にては七八九年より丁抹人の侵掠甚しくして歷代の國王爲めに苦まざるはなく、英國の海軍及び文學の始祖と稱せらるゝアルフレッド大王（八七一―九〇）の如きも地を割きて和を求めし程なりき。其の後両民族の爭絶えず、一度びは丁抹人全島を征服し其の王カニュート（一〇一六―一〇三五）は本國、瑞典、那威の



ノールマン人の船

Scotland (skot′land)
Russia (rush′a)
Fin (fin)
Rurik (rö′rik)
Novgorod (nov′gorod)
Kiev (kē′ev)

一部及び英國を統治し、蘇格蘭（スコットランド）をも服從せしめたりき。されど其の歿後程なく丁抹人の勢力衰へて王統舊に復しぬ。

露西亞（ラシヤ）　フイン人及びスラヴ人の間に侵入せし瑞典人の一派ルス族の一酋長ルーリックは八六二年ノヴゴロッド城を建てゝ附近のスラヴ族を征服せしが、他の一部は更に南下してキーエヴに據りしかば、其の子に至り之を併せてスラヴ族の大半を統べ、キーエヴを首府となせり。之を露西亞の建國とす。其の後次第に强大となりて屢東帝國及び南方諸民族を侵し、また東帝國の文化をみちびき、希臘教を國教となせり。

東帝國及び其の鄰族　東帝國に於いては希臘教會の羅馬教會と分離せしよりラチン的元素は益衰退し、希臘

Dalmatia (dal-ma'tnia)
Servia (sèr'via)
Turanian (tura'nian)
Magyar (mo'dgor)
Holy Roman Empire (hō'li rō'man em'pīr)
France (frans)

語は公用語となり、希臘文學も復興せり。然るに七世紀の頃よりスラヴ族及びブルゲーリア族國内に侵入し、前者はダルメーシア地方にサーヴィア等の國を建て、南は遠く希臘半嶋までも侵入し、後者はセッサリ地方にブルゲリーア王國を建てたり。ブルゲリーア人はチュラニアン種に屬すれど此の時は概ねスラヴ風に化せられたりしなり。此の頃又たモザヨル族東北方より襲來して東帝國及び西帝國の國境に迫れり。

第六章　神聖羅馬帝國及び佛蘭西王國の建設

領土分割　チャーレメーンの沒後其の諸子の間に國土分割の爭を生じ、八四三年ヴェルダン條約に於て長子ロ

Odo (ō'dō)
Hugh Capet (hū-kā'pet)
Verdun (verdun')
Lothair (lōthār)
Lorraine (lo-rān')
Mersen (mer'sen)
Paris (Păr'is)
Robert (robert)

ーセールは中部(ロレーン及び伊太利)其の二弟は東西を分治することゝなりしが、八七〇年メルセンの決議により、更に東西二國及び伊太利に三分せられぬ。就中伊太利は或は西フランク王の治下に合し或は東フランク王を戴きしが、其の後諸侯互に位を爭ひ法王も其の間に干渉して紛亂打續きたりき。

佛蘭西王國の起原　西フランクは常に北人の侵掠に苦みしかば其の防禦に功ありし爲めパリスに封ぜられたるロバート大に勢を得、八八八年其の子オードー遂に諸侯に推されて王位に上り、九八七年其の裔ヒューゴ・ケーペットの王となりしよりこの統永く王位を占む

Franconia (frang'kōni-a)
Conrad (kon'rad)
Otto (ot'tō)
Hungary (hun'ga-ri)
Stephen (stē'ven)

るに至れり。

神聖羅馬帝國の起原　東フランク國も亦た北人の劫掠に苦み、一時モヂョル族を援きて之を却けしが、其の後却つてモヂョル族の侵害を蒙り、國步益困難なりしかば、九一一年フランコーニア侯コンラット、諸侯の推選によりて王位に上りぬ。其の後オットー一世(大王)の位につくや、內諸侯の亂を平げ、外益此等諸民族を威服し、又た伊太利の內亂に干涉して其の王となり、九六二年羅馬に於いて神聖羅馬帝國(エムパイヤ)(ホーリー、ロー、マン、)の帝冠を法王より加へられぬ。

匈牙利及び波蘭の起原　モジョルはオットー大王に敗られてより復た來り犯さず、一〇〇〇年スチーヴェンの匈牙利王となりてより其の國の組織漸く整ひ、日耳曼の文化を輸入し、羅馬教を奉ずるに至れり。波蘭も亦た此の頃より日耳曼の文化と羅馬教との感化とをうけたりき。

Castile (kas-tēl')
Aragon (ar'a-gon)
Portugal (pōr'tugal)
Seljuk (seljūk')

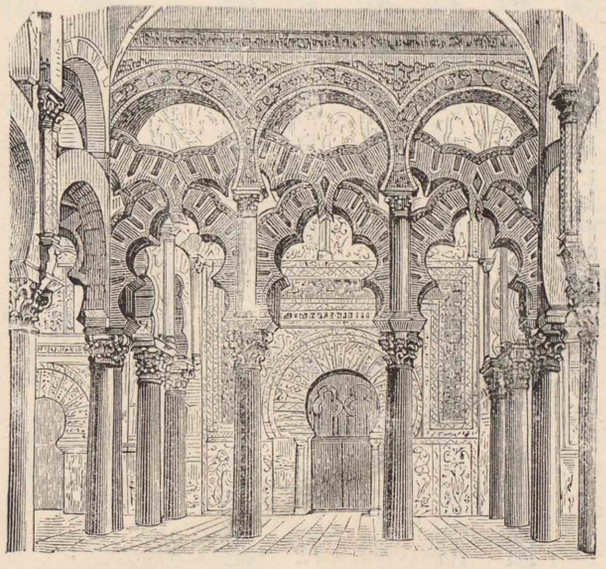
第七章　サラセン帝國の衰頽

コルドーヴァ王國　コルドーヴァは十世紀の頃、其の繁榮の極に達せしが十一世紀の終よりアフリカより來れる民族のために勢を奪はれたり。其の後北方の耶蘇教國は次第に强盛となり、カスチールは一二三六年コルドーヴァを陷れ、アラゴンは東海岸に沿ひ、ポールチュガルは西海岸に沿ひて幷に南方に領土を擴張せり。

バグダッド王國　バグダットなるケーリフの領土も亦た漸く分裂を始め、裏海の東濱より起れる突厥種なるセル

Togrulbeg (tōg'rölbeg)
Emir al omra (emir-al-omra)
Ispahan (is, ahän')
Bokhara (bōkhara)
Samarkand (säm-ar-känd')
Sultan (sul'tan)

ジューク族のトーグルールベグといふもの一〇五八年に全帝國の政權を奪ひてエミール・アル・オムラと稱し、ケーリフは唯教權のみを保つこととなれり。彼はイスパハーンに首府を置き、トーラス山よりボーカラ、サーマルカーンドに至る版圖を統一せしが、この時、寺院學校到る處に設けられ、商業亦た盛にして頗る繁榮の觀を呈せり。されど十一世紀の末に至り其の領土は數個のサルタン領に分裂せり。



コルドーヴァの回教寺院

第三期　法王グレゴリ七世の登位より十字軍の終まで（一〇七三——一二七〇）

第八章　法王と皇帝との衝突

法王權の强大

基督教の傳播すると共に其の首長たる法王は次第に權力を得て、教會に關する特殊の法令を發し、僧侶の犯罪を裁判する特權を有し、又た各國帝王の上に位する世界最高の裁判官として仰がるゝに至りしか、一〇七三年グレゴリ七世の法王となるや、益其の權力を擴張せんとし、遂に時の皇帝ヘンリ四世（一〇五六—一一〇六）と衝突を來したり。法王は帝を破門して其の臣民に服從の義務なしと宣告せしかば、帝は一時法王に屈服して其の宥免を得しが、帝に

Guelf (gwelf)
Ghibellin (gib′e-lin)
Hohenstaufen (ho′enstaufen)
Frederick (fred′er-ick)
Innocent (i-n′o-sent)

不和なりし諸侯は法王の認可を得て別に皇帝を選立しければ、帝は大に怒つて其の黨を擊破し、一〇八〇年進んで羅馬を陷れ法王を追へり。

グェルフ及びギベリン兩黨の爭

其の後ホーエンスタウフェン家（一一三八—一二五四）の帝位に上りてもこの紛爭はなほやまず、コンラット三世のバヴェーリヤ家と爭ひフレデリック一世（バーバロッサ、一一五二——一一九〇）のロムバーヂ諸市（ミラン其の中心たり）を征討するや法王亦た常に皇帝に反對し、これより所謂グェルフ（法王黨）ギベリン（ホーエンスタウフェン黨）兩黨の爭たえざりき。有名なるイノセント三世（十三世紀の始）の法王となるや、亦たグェルフ黨の强援となり兩黨互に帝位を爭ひて戰亂打續き、帝位に上るものも殆ど其の實權なきに至れり。かくてコ

Anjou (an'jü)
Philip (fil'ip)
William (wil'yam)

ンラッド四世の沒後に至り所謂大空位時代となり、十七年間（一二五六―一二七三）帝位の空虛を見るに至りぬ。

ネープルス王國　十一世紀の頃にノールマン人が南伊太利を東帝國より奪ひ、シヽリをサラセン人より奪ひて建設したるネープルス王國は十二世紀の終よりホーエンスタウヘン家の有に歸せしが、法王は之を奪ひて佛國の王族アンジュー家に與へたり。

第九章　英佛兩國

英佛二國に於ける法王權　佛蘭西に於いても法王の權力は強大にしてフイリップ一世は法王グレゴリ七世に屈服し、王の時ノールマンヂ侯ヰリヤムは法王の認可を得て英國を征服し、法王の權力は從て其の國に確立せられたり。

ヰリヤム勝王の英國征服及ひ英國の封建制度　ヰリヤム（一〇六六―一〇八七）は一〇六六年英國に渡りて王位に即き、封建制度を此の國に移植してノールマンヂ人を諸侯に封せり。之より英國社會の秩序一變して佛蘭西語は上流社會の用語となりぬ。

ヰリヤム勝王

プランタジェネット家　其の後一一五四年ヘンリ二世佛國なるアンジュー家より入りて英國の王位に即き、プラ

Henry (hen'ri)
Plantagenet (plantaj'e-net)

Magna Charta (magna kar'ta)
Langton (lang'ton)

ンタジェネット王統を開きしが、此の頃より英佛二國の人民は次第に融和し、封建制度は益固定するに至りぬ。王は佛國に於いて父の遺産と王妃の領土とを有せるを以て佛國の大半は其の有に歸し、其の威遙に佛王を凌ぎたりき。此の時佛國にはフィリップ二世王位にあり、大に諸侯の權力を抑制して王權の振興を勉めしが、英國王ジョンの立つに當り佛國に於ける其の領土の大部を沒收せり。

大憲章（マグナカールタ）　ジョン王は連に諸侯の獻金を徵し、命に應せざるものを恣に罰せしを以つて大に諸侯の攻擊を受け、また法王イノセント三世の怒にふれしが爲め其の國を法王に獻じ更に其の封地として之を受領する如きことありしかば、益民人の怨嗟を招きたり。是に於いて大僧正ラングトンは僧侶及び諸侯と共に古來の習慣を基礎として起草せる大憲章を提出し、一二一五年六月十五日王に迫りラニミードの野に於いて之を承認せしめたり。此の憲章は六十三條より成れるものなるが、其の重要なる箇條は封建的義務として臣下の出金すべき場合の外補助（エード）金を徵收するには必ず豫め貴族及び僧侶より成れる會議の承認を要すること、自由民は同輩の裁判若しくは法律によるに非らざれば逮捕監禁せらるること等なり。されど王は此の憲章を無視して諸侯と爭ひ、ヘンリ三世の時に至りても憲章の規定は屢破られたり。且つ當時内には法王黨勢を得、外には佛國の隙を伺ふあり、國步頗る困難なりき。當時佛國にてはルーイス九世（一二二六―一二七〇）位にありしが大に諸侯の權勢と法王の

Runnymede (run'i-mēde)
Aid (aid)
Parliament (par'lia-ment)

Urban (ér'ban)
Hermit (hér'mit)
Clermont (klermôn')
Piacenza (pēächen'za)
Godfrey (god'fri)

威力とを抑制したりき。

第十章　十字軍

十字軍の原因

サラセン帝國の政權が突厥人に歸してよりジェルーサレムの靈地また其の治下に屬せしが、これより基督教徒の此の地に參詣するものは常に其の殘虐を蒙りたりき。是に於いて法王アーバン二世はピーター（隱士）を佛國に遣はして靈地を基督教徒の手に回復せんことを遊說せしめ、又た自らクレルモーン及びピーアーチェンザの會議に臨みて之を奬勵せり。

十字軍

一〇九五年佛國なる烏合の民起つて先驅をなし空しく小亞細亞に白骨を曝せしが、翌年ゴッドフリを

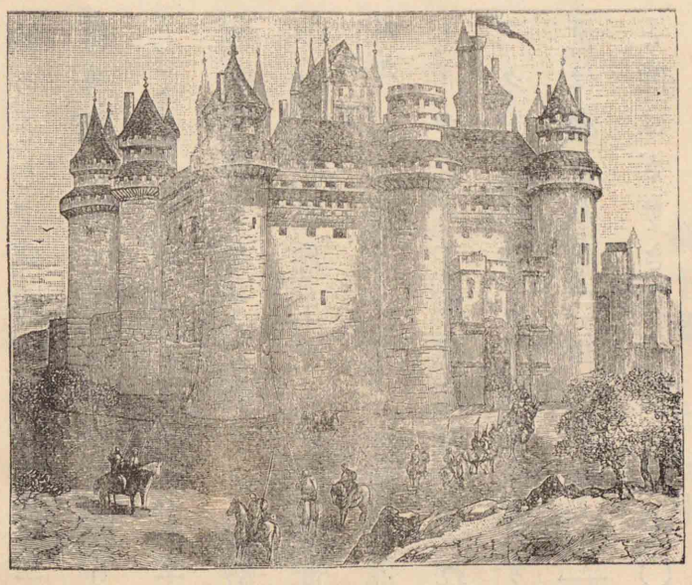
Richard (richärd)
Venice (ven'is)

始めとして佛國の諸侯等第一回十字軍（一〇九六—一〇九九）を起し、希臘帝國を經て小亞細亞に渡り、一〇九九年遂に聖地を占領してこゝにジェルーサレム王國を建設せり。然るに其の後回教徒勢を得てこの地の形勢危急に迫りしかば、皇帝コンラット三世、佛王ルーイス七世協力して第二回十字軍（一一四七—一一四九）を起しゝが之を救ふ能はず、一一八七年に至りジェルーサレム王國遂に滅ぼされぬ。是に於いて皇帝フレデリック一世は陸より、佛王フィリップ二世、英王リチャード一世は海より第三回十字軍（一一八九—一一九二）を起しゝが志を達する能はざりき。其の後一二七〇年に至るまで四回の十字軍を起しゝが聖地恢復の目的は遂に達せられざりき。只佛國の諸侯はヴェニス人と共にこの間一度希臘帝國を滅ぼし

たることあり。

十字軍の結果

十字軍は教會及び法王の權力の强大なるを示すものにして其の遠征は封建諸侯の業なりき。またこの遠征の間に生ぜし著きものは騎士の組合にしてテムプラル、ホスピタラー及びチュートンの三あり、チュートン組合の騎士は一二二六年に普魯西を征服して之を領し



中古時代の城郭

Templar (tem′plar)
Hospitaler (hos′pi-ta-ler)

Florence (flo-r′ens)
Crimea (kri-mē′a)

Dominic (dom′i-nik)
Franciscan (fran-sis-kan′)
Mendicant (men′dikant)
Free city (frē siti)
Genoa (jen′oa)
Pisa (pē′sä)

たり。また騎士と共に基督教及び法王の權威を擴張するに力ありしものをドミニック派及びフランシスカン派の乞士（メンディカント）とす、此の宗派は啻に基督教の無上權を信ずるのみならず法王の命令さへ疑ふべからざるものとなせり。されど十字軍の効なくして終ると共に法王の權やゝ衰へ封建諸侯もまた勢を減じたる觀ありき、之に反して市府の發達は著しく、漸く諸侯及び教會の管治を脱して自由市府（フリーシチー）となるもの多く、伊太利にてはロムバルヂ諸市、ヴェニス、ジェノア、ピーサー等東洋貿易の市場として繁盛を極め、フロレンスは工業地として有名なりき。此等の市民は遠くクリーミア、コンスタンチノープル、アレグザンドリア等に往來して東洋の物品を輸入し、歐洲貴族の奢侈品を供給したりき。又た日

Lubeck (lü'bek)
Hanseatic (han-se-at'ik)
Provence (prōvons')
Dante (dan'te)
Gothic (gothik)
Yaroslav (yalsslav')

耳曼に於いては諸侯及び騎士の暴威を防ぎ商業を擴張せんが爲に市府間の同盟行はれ、リューベックを中心として北部日耳曼の諸市を糺合したるハンシアチック同盟の如きは其の最大なるものなりき。學術には數學理學化學の研究起り、プロヴァンス、佛蘭西、西班牙及び日耳曼の民族各國語の詩篇を出し、伊太利には名高きダンテ(一二六五—一三二一)の神曲出でぬ。ゴシック式の建築法佛蘭西に始まりたるも此の時代なりき。

第十一章　東歐の形勢及び蒙古人の侵略

東歐の形勢　露西亞にてはヤロスラヴ一世(一〇一九—一〇五一)の後幾多の小侯國に分裂して爭亂相續き、ポーランドもボ

Batu (ba-tö)
Mangu (man'gö)
Wahlstadt (vál'stät)

Boleslav (bo-les-lav)
Transylvania (tran-sil-va'nia)
Temudjin (temuzin)
Chinghis Khan (chin'giskan)
Kiptchak (kipchäk')
Octai (oktai)

レスラヴ三世(一一一〇—一一三八)の四子を分封せしより其の間に爭鬪起れり。匈牙利は其の後益東南地方に版圖を擴めて十一世紀の始めにはトランシルヴェーニア地方を併領し、サーヴィアは常に匈牙利及びブルゲーリアとの爭絶えず、ブルゲーリアは十三世紀の始に最も盛んなりき。蒙古に鐵木眞(成吉思汗、元の太祖)の出でたるは恰も此の時なりき。

欽察の建設　成吉思汗の時其の部將はコーカサスより北進し露西亞諸侯の軍を破りてクリーミアに至りしが、窩濶臺(元の太宗)の時一二三六年其の甥拔都、蒙哥等西征の軍を起し、先づウーラル地方なるブルゲーリアを滅ぼし、次いでノヴゴロッドを除く外露西亞の全部を征服し、一二四一年其の一隊は波蘭に侵入してヴァールスタートの役大

Anatolia (ana-tō'lia)
Iconium (ī-kō'-nium)
Tabriz (tablēz')
Pesth (pest)
Adriatic Sea (ā-dria-t'ik)
Sarai (särī')
Ilkhan (il'kan)
Hulagu (hölagö')
Mameluk (mam'e-lūk)

にシリーシア侯及びチュートン騎士の軍を破り、匈牙利に向ひたる本軍に會してペストを陷れ、進んで墺太利に侵入せり。是に於いて羅馬法王は列國に向ひ十字軍を起して之を防がんことを計りしが、拔都は窩濶臺の訃に接して軍を旋し、エードリアチック海濱を掠略して歸りぬ。かくて一二四三年拔都はヴォールガ河畔のサーライに欽察國をたて、其の征畧地を統治せり。

イルカン國の建設

其の後旭烈兀(フーラグー)また西南亞細亞の征服を企て、一二五八年にバグダッドのケーリフを滅ぼし、シリア地方を征畧して埃及に向ひしがマメルークに阻まれて北に轉じ、アールミーニア、アナトーリア、アイコーニアムを侵畧し、タブリーズに首府を置いて之を統治せり。之をイルカン國といふ。此の時東部亞細亞は元に統一せられ、中央亞細亞は察濶臺國となり、時の大汗忽必烈(クブライ)(元世祖)の威は世界を震動し、法王及び西歐の國王亦た好を通ずるに至れり。ウェニスの人なるマルコ・ポーローが忽必烈と法王との間に周旋し、支那內地を歷巡し東海より印度洋に浮んで歸りしは此の際なりき。我國の名がチパンゴー(日本國の訛)として西歐に傳はりしは實に彼の談話に始まりしなり。

Kubkai (kub'lai)
Marco Polo (marko-pō'lō)
Zipango (zipang'gō)

Clement (kle-m'ent)
Avignon (avēn-yôn')
Valois (val'wä)

第四期　十字軍の終より宗教改革まで（一二七〇—一五一七）

第十二章　英佛兩國に於ける王權の發達及び西班牙の統一

法王權の衰退

佛王フィリップ四世（一二八五—一三一四）は深く王權の擴張に意を注ぎて諸侯の勢力を殺ぐを勉め、また教會領の課稅に關して法王と確執を生じ、國民の贊助を得て遂に法王の命を奉ぜざりき。これより法王の權大に衰へ、一三〇九年佛人クレメント五世法王となりてよりはアヴィニョンに其の居を移すに至りぬ。

百年戰爭

フィリップ六世のヴァルワー家より入り

Joan of Arck (jōan'ov ärk)
Orleans (or-läan')

て位を繼ぐに至り、英王エドワード三世王位の繼承を要求し、一三三九年兵を率ゐて來攻せり。これより英佛兩國の戰端開け、佛國騎士の軍は常に利あらず、商民及び農民の反亂亦た內に起り、兵を交ふること數十年に及びしが、バーガンヂ侯の英國に內通せるを以つて一四二二年チャールス七世の即位せし時には僅にルワール河南を保つのみなりき。ジョーアン・オヴ・アールク（ジャンダーク）と云へる一處女がオルレーアン城の圍を解きて英軍を退けたるはこのときのことなり。其の後バーガンヂ侯と和し常備軍を編成し一四五三年大に英軍を破りて百年戰爭の局を結べり。

佛國の統一

ルーイス十一世（一四六一—一四八三）位を承け亦た法王及び諸侯の權を殺ぐに勉めしかば王及びチャールス

House of Lords
Wicliffe (wik'lif)
Edward (ed'ward)
Wales (walz)
Shire (shîr)
City (sit'i)
Borough (bur'ō)
House of Commons

八世(一四八三―一四九八)の代に諸侯國は概ね併合せられて佛蘭西は殆ど一統の域に達しぬ。

英國兩議院の起原　エドワード一世(一二七一―一三〇七)はウェールスを合併し蘇格蘭及び佛國と交戰し軍資を要することの多かりしかば、屢貴族と紛爭を釀しゝが、一二九五年に至り貴族及び僧侶の外別に州、市郡の代表者を召集して國會を開けり。これ實に英國庶民院の基礎なりとす。王の時政府の組織、裁判及び租稅の制度も改革せられたるもの多かりき。後エドワード三世の代、一三四一年に至りて貴族院及び庶民院の別確定せられぬ。また王の時キクリッフといふもの僧侶の豪奢を攻擊して寺院の改革を主張したりき。キクリッフは聖書を國語に翻譯せし人にして詩人チョーサー亦

Ferdinand (fér'-di-nand)
Chaucer (chā-sér)
Lancaster (lang'kastér)
York (yôrk)
Tudor (tū'dor)
Star Chamber
Isabella (iza-b'elā)

た此の時の人なり。

薔薇戰爭　この後ランカスター家とヨーク家との間に王位の爭起り、諸侯各之に與りて一四五五年より所謂紅白薔薇の戰起りしが、一四八五年ヘンリ七世の位に上るに至り兩家の結合したるがためこの亂始めて平きぬ。其の王統をチュードル王統といふ。戰亂の爲に諸侯の數大に減ずると共に、ヘンリ七世は大砲を備へたる常備軍を置き、星廳(スターチャムバ)を設け、國會をば殆ど召集せず、大に王權の振張を圖りたり。

西班牙の統一　アラゴンは其の後サルヂニアを併せ、ネープルスをアンジュー家より奪ひ益勢を得しが、カスチールの女王イザベラーと結婚したるファーヂナンドが一四七九年位に即くに及び兩國一王の治下に歸し、其の孫チ

ヤールスが王位に上りてより兩國は全く合併せられぬ。フアーヂナンド及びイザベラーの時常備軍を組織し、一四九二年グラナーダを滅ぼして全く回教徒の勢力を打破し、宗教裁判所を設けて異教徒を處刑したりき。又た此の頃より葡萄牙には航海事業進歩したり。

第十三章　神聖羅馬帝國の擾亂

皇帝と諸侯

大空位の後選立せられたるハプスバーグ家のルードルフ（一二七三―一二九一）は伊太利を拋棄して日耳曼の統一に意を注ぎしが、これより後諸侯は微弱の侯伯を選立せんと勉め、又た選立せられたる帝は自己の領土を擴張して勢力を蓄へんことを欲し、紛亂絶ゆることなかりき。當時

Granada (gra-nä′da)
Hapsburg (haps′-bérg)
Rudolph (rö′dolf)

の選帝侯（エレクトル）はマインツ、トリール、コーローンの三大僧正、ボーヒーミア王、パラチネート伯、サクスン・ヰテンバーグ侯、ブランデンブールグ伯の四侯伯にして選擧はフランクフォルトに於いてし、即位はエークス・ラー・シャーペルにて行ふ定めなりき。ハプスバーグ家はこのころより墺太利を領せしが、一四三八年匈牙利を併領せる墺太利侯アルバートが帝位に即きしよりこの家は永く帝位を世襲するに至れり。大空位以來かく内亂打續き諸侯騎士は暴威を極めしを以て、農民は苦境に陷り、市府も城壁を築き軍隊を備へて自ら守らざるべからざるに至れり。されど十五世紀の末となりては火藥の使用普く行はれて戰術も次第に變化し、武士諸侯の勢を殺ぐ一原因となりたり。

Brandenburg (branden′-börg)
Frankfort (frank′-fort)
Aix-la-chapelle (āks-lä-shäpel′)
Albert (al-bért)

Elector (elekt′or)
Mainz (mīnts)
Trier (trēr)
Cologne (kōlōn′)
Palatinate (palat′i-nāt)
Wittemburg (witen-bérg)

Uri (ö'ri)
Schweiz (schwiz)
Unterwalden (ön'tervälden)
Morgarten (mörgär'ten)

瑞西の獨立　ウーリ、シュワイツ、ウーンテルヴァールデンの三州はハプスバーグ家の領なりしが、州民は其の羈絆を脱せんとし、一二九一年三州の同盟を結びて墺太利家と爭ひ、一三一五年モールガールテンの役其の農民軍が大勝を得てより勢益强く、また新に同盟に加入するものあり、各州は共和政府を組織して十五世紀の末に至り全く墺太利人を放逐し十三州の聯邦を形成せり。

教會の分裂及び法王權の衰退　此の時代に至りては法王加冠の儀も殆ど行はれず、一三三八年の選帝侯會議は帝位は選擧に基くものにして加冠によるにあらざるを公言せり。又た一三七八年以後は羅馬及びアヴィーニョン兩處に法王あり、教會二分して紛擾を極めしが、一四二七年コンスタンスの大會議にて僅に統一するを得たり。此の時プレーグの教授ジョン・ハスなるもの、キクリッフの說を承けて寺院の改革を唱へしが、異端と認められて焚殺せられき。

Humanism (hū'manism)
Crete (krēt)
Constance (kon'stnz)
Prague (prāg)
John Huss (jon hus)
Medici (med'i-che)
Petrarch (pē'trärk)
Boccaccio (bok-ka'-chō)

伊太利の市府　伊太利にては各市府間に於ける爭鬪併呑の結果ミラン侯國、ウェニス、ジェノア、フロレンスの各市及び法王領の五國となり其の政權は概ね僭主の手に歸せり。就中一四〇〇年頃よりフロレンスの政權を握れりしメヂチー家は文學技藝を奬勵し圖書館及び學校を起し、かばピートラールク、ボッカチョー等いでて羅甸文學を復興し所謂人道派（ヒューマニスム）の學を此の地に開けり。又たウェニスはクリート及びサイプラスを始め希臘近海の島嶼にも其の領

Lithuania (lithūā'nia)
Dnieper (nēp'er)
Moscow (mos'kou)

土を有して東洋貿易の利益を占め、十五世紀の前半に於いて其の勢最強盛なりき。

第十四章　土耳其の勃興、希臘帝國の滅亡及び露西亞の獨立

東歐の形勢

希臘帝國は一二六一年に至りて復興せしも國勢また振はず。波蘭は十四世紀よりリシュエーニアー王國と合併したりしがこの國は十三世紀の半より漸く著はれ、十四世紀の始に至りて強大となり、露國を蠶食してニーペルの東方に及びしものにして、これより益勢を振ふに至る。露國の大部は依然として欽察の治下にありしが、モスコウ大侯は其の汗の保護を得て次第に列侯の上に威を振

Othman (othmän)
Janizary (jan'i-za-ri)
Timur (tē-mōr')
Chagatai

ふに至れり。

オスマン土耳其の勃興

是より先きアイコーニアム國の領内にオスマンといふ土耳其人の一派來住せしが、この國のイルカン王國に滅ぼされし後、十三世紀の終に至りニコミーヂアを征略して建國の基を開き、其の子孫は十四世紀に至りて歐洲に渡り、スレースを取り、サーヴィア、ブルゲーリアの大部を屬國となし、ジャニザリと稱する軍隊を組織して益威をふるひ、十五世紀の始に至りて、其の領土東はユーフレーチース河より西はダニューブ河の北方匈牙利の領土に達し、遂にコンスタンチノーブルを圍めり。

チームール

當時東方に於いては察濶台（チャガタイ）は數國に分裂し、イルカンは既に成吉思汗の後裔を失ひて紛亂を極め

Angora (angō′ra)

たりしが、土耳其人ナームールなるもの察潤台の領内に起りて一三九六年其の地を統一し、イルカンの故地を併呑し、更に北に進みて欽察を侵し、露國の南部を掠め、又た印度をも征畧せり。然るに適オスマン土耳其の勢の盛なるを聞き、シリアより小亞細亞に進み、一四〇二年大にオスマンの軍をアンゴーラに破れり。晩年明國を討たんとして果さず、其の歿後廣大なる領土は忽ち瓦解せり。

希臘帝國の滅亡

かくてオスマンは再び勢を回復し、益希臘帝國に迫りしかば、希臘は西方諸國の援助を求めんとし、羅馬法王は爲めに十字軍を起さんとて各國に勸誘せしも皆行はれず、帝國は一四五三年遂に土耳其のマホメット二世に滅ぼされぬ。土耳其はこれより希臘帝國の故地を

Trebizond (treb′i-zond)
Bessarabia (bes-sa-rā′bia)
Kasan (kazan′)
Astrakhan (ästrächän)
Ivan (ē′vān)

收め、西はヴェニスを攻め、東はクリーミア、トレビゾンドを取り、北はベッサレービアに及び、南はシリア及び埃及を征服せり。

露西亞の獨立

モスコウ大侯は次第に勢を得て、列侯の大半を糾合し、欽察の羈絆を脱せんとせしが、十五世紀に至り、欽察にカザン、アーストラーハーン、クリーミア等獨立分離して其の勢衰へしかば、モスコウのイーヴァーン三世は一四八〇年大に欽察を破りて露國の獨立を得たり。欽察は一五〇二に至りクリーミアの爲に滅ぼされたり。露國はこれより漸く四方に其の地を擴張し希臘帝國の滅ぶるに及び、其の學者僧侶をモスコウに誘致して益其の文化を輸入し、希臘教の根據をこゝに移し、希臘帝國の後嗣を以つて

Bartholomeu Diaz (bar-thol'ōmu dēas)
Cape of Good Hope (kāp ov gud höp)
Vasco da gama (vasko da gä'mä)
Malabar (malabär)
Calicut (kal'ikut)

自ら擬するに至れり。

第十五章　新航路及び新世界

東洋の新航路

コンスタンチノープル及びアレグザンドリアが土耳其人の手に落ちてより東洋貿易の途いたく阻害せられければ、伊太利人の利益を羨んで地中海外に航路を求めんとせし歐洲人は益其の必要を感じ、遂に葡萄牙人をして其の功を成さしめたり。この國民は十五世紀の始よりアフリカ西海岸に沿うて遠洋航海を試みしが、一四八六年バルソロー・ミュー・ディーアスは其の南端(喜望峯)に達し、一四九八年ヴァスコ・ダ・ガーマは印度洋を經て印度のマラバール海岸なるカリクトに達しぬ。法王は新に發見し

Goa (gō'ä)
Malacca (malak'a)
Java (jä'va)
Macao (mäkä'ō)
Christoph Columbus (kristō'fér kolum'bus)

る地を以つて皆な此の國の領土となすを許したりしかばこれより此の國人は益船艦を東洋に送り、亞弗利加・亞刺比亞・波斯の海岸を侵掠してイスラム教徒の商權を奪へり。印度にては一五一〇年に取れるゴーアー(臥亞)を根據として其の東海岸及び錫蘭に至り、更に進んでマラッカ(滿刺加)ジャヴァー(爪哇)を侵畧して一五四一(天文一〇)年我が國に來り、一五六三年支那の瑪港(マカオ)を占領せり。

亞米利加の發見

此の間に西班牙人は偶然ジェノアの人クリストーファー・コラムバスによりて亞米利加を發見せりコラムバスは印度に達する捷路は太西洋を西航するにありと主張せしが其の說西班牙の女王イサベラーに用ゐられ、其の保護を得て探檢の路に上り、一四九二年十月十

Mexico (mek'si-kō)
Montezuma (montezō'ma)
Pizaro (pizä'rō)
Peru (perō')
Inca (ing'kä)
San Salvador (sän sälvädō'r)
Orinoco (ō-ri-nō'kō)
Amerigo Vespuci (amerigo vespöchē)
Cabral (kä-bräl')
Brazil (brazil)
Cortez (kor'tez)

二日始めてサーン・サールヴァードール島に達し、附近の島嶼を發見して歸れり。コラムバスはこの地方を印度と思惟したり。かくて法王は西方の新發見地を西班牙領とし東方のを葡萄牙領となすべしと令したり。コラムバスは其の後なほ三回の航海をなしゝが第三回には大陸に達してオーリノーコー河口に到れり。これより各國人の新大陸に向つて航するもの陸續として起りしが、一四九九年に南亞米利加に達したるフロレンス人アメリゴ・ベスプーチーより亞米利加の名生ぜり。其の後一五〇〇年葡萄人カーブラールはブラジルを占領し、西班牙人コルテスは一五一九年の頃墨其哥(メクシコ)なるモンテズーマ王國を滅ぼし、ピザーロは一五三一年頃ペルーなるインカー王國を滅ぼして共に西班牙の領土となせり。また一五一九年に西班牙を出帆せるファーヂナンド・マジェランの船ははじめて世界を一周したり。かくて新大陸は殆んど西班牙人の有に歸せしが、彼等の土人を遇すること甚だ殺酷を極め、また亞弗利加の黑人を奴隷としてこの地に輸出し勞働に使役したり。

Magellan (majel'an)
Maximilian (Max'i-Mil'i-an)

第十六章　伊太利の紛亂及び文藝復興

佛王の伊太利侵擊

伊太利にては各國間の競爭絕ゆることなく、爲に其地をして歐洲列國の戰場たらしむるに至れり。一四九五年佛王チャールス八世のミラン及びネープルスを征服するや、法王及ひ皇帝マクシミリアン(一四九九—一五一二)は英王ヘンリ七世、(一四八五—一五〇九)西班牙王ファーヂナンド

Lonrenzo Medici (loren′zō medichē)
Leo (lē′o)
Raphael (rä′fāel)
Michael Angelo (mī′kel an′jelō)

及ひ伊太利諸國と同盟して之を退け、ネープルスを回復せり。後またヴェニス、西王、皇帝、英王ヘンリ八世及び瑞西諸國は神聖同盟を結び、一五一三年佛軍を伊太利より驅逐して其の本國に迫れりこれ實に歐洲列國間に合縱連衡の勢起り國力平均の思想生せる權輿なり。

文藝復興

此の間に於て伊太利の文物は益發達し、フロレンスのロレンゾー・メヂチー及び法王リーオ十世の如きは熱心なる文學技藝の保護者なりき。羅甸の古典は甚だ尊重せられ、希臘の學者が移住し來れるより希臘古典の研究も盛になりぬ。而して印刷術の流行は大に其の傳播を助け、歐洲各國到る所に人道派の學者を見るに至れり。美術の復興亦た之に伴ひ、ラフェール、マイケル・アンヂェローは畫

Titian (ti′shan)
Veronese (vārō nā′ze)
Ariost (arēōs′tō)
Tasso (tas′sō)

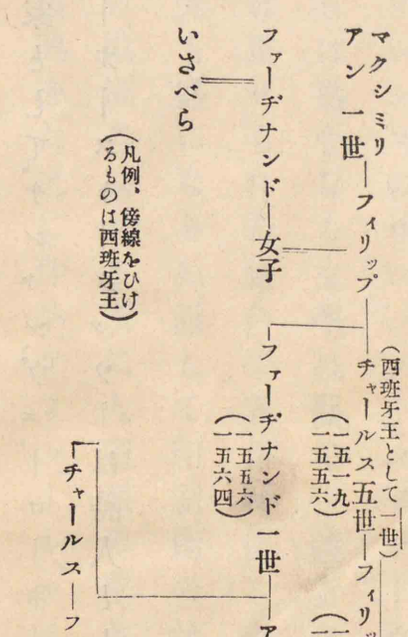
家として、チシャン、ヴェーローネーゼは彫刻家として、アリーオーストー、タッソーは詩人として著しかりき。

Westphalia (west-fā'li-a)

第三卷　近世史

第一期　宗教改革の發端よりエストフェーリア會議まで（一五一七——一六四八）

第一章　日耳曼に於ける宗教改革、及び佛墺の競爭



Martin Luther (mär'tin lö'sér)
Indulgence

教界の趨勢　僧侶の敗德、教會の腐爛は既に久しく、之に對する改革の聲は中世期の末葉より現はれ始めしが、人道派の傳播と共に聖書の研究盛となり、ヒーブル！語の原書さへ講讀せらるゝに及びて世人は益宗教界の腐敗を知るに至れり。

マールチン・ルーサー　然るに法王リーオ十世の發したる贖罪狀の賣却は端なくマールチン・ルーサーの抗議を招きて茲に宗教改革の端緒を開きぬ。一五一七年彼がヰテンバーク寺院の門扉に公示したる九十五條の抗議は忽ち識者の贊成を得て其の說四方に傳はりしが、彼はこれより法王の諭告に服せず、聖書を引證して大に其の說を唱導したり。

Worms (vōrms)
Wartburg (värt'borg)
Francis (fran'sis)

チャールス五世　一五一九年新に西班牙王より選立せられて帝位に即けるチャールス五世はウォールムス(Worms)國會を開き、其の決議によりてルーサーを追放したり。ルーサーはこれよりサクスン選帝侯フレデリックの保護を得てヴァールトブールグ城内に隱棲し、靜に聖書の翻譯に從事せり。されど其の說は益勢を得特に北部諸侯は概ね改革派となりて南部諸侯の舊教派と爭ひ、一五二五年東普魯西の大公となりしブランデンブールグの公子アルバートも亦た其の國をして改革派に與せしめぬ。然るに帝は伊太利の事に關して佛王フランシス一世と戰を開きしかば、國内の一致を謀らんが爲め一五二六年信教の自由を令し、かくて新教徒の軍をあはせ伊太利にて大に佛軍を破れり。然るに

Vienna (vien'a)
Moldavia (moldā'via)
Tunis (tū'nis)
Algier (al'jēr)
Barbarossa (bärbarosa')

Speyer (spī'er)
Protestant
Augusburg (âguz'bèrg)
Melanchthon
Confession
Schmalcalden (shmä''kälden)

其の後スパイエルの國會は再び改革派を排斥したるを以て、改革派は大に之に反抗したるが、プロテスタント(抗爭黨)の名稱は之より起れり。一五三〇年オーグスバーグの國會に於いて新教徒はメランクトン等の手になれる所謂オーグスバーグ信條(コンフェッション)を提出し、新教の諸侯はシュマールカールデン同盟を結んで舊教徒に反對せり。然るに土耳其は匈牙利を侵し墺太利に入りてヴィエナを圍みしかば、帝は一五三二年また新教徒と和し、全國の兵力を集めて土耳其軍を却け、トランシルヴェーニア、モルデーヴィアを讓與して和を講ぜり。其の後土耳其はチューニス及びアルジールを占領せる海賊バールバロサ及び佛王と聯合して帝國に迫りたり。

Loyolo (lō-ō'lä)
Jesuit (jezūit)
Nether'and (nether'-land)
Franche Comte (fronsh-kôn-tā')

信教の自由

法王の黨派は益新教徒を壓服せんとし、西班牙人ロヨーラの如きはジェジュイット教會を組織して舊教の新氣運を開かんとしたるが、帝も又た法王及びネザーランドより得たる軍隊を率ゐて新教諸侯を征服せんとしたり。新教徒は是に於いて佛王ヘンリ二世と同盟して帝に抗せしかば、帝は戰破れて西班牙に逃れ、ついで新教徒と講和條約を結びしが、一五五五年オーガスブールグにて勅令を發し、信教の自由を諸侯及び市府に許し、新舊兩派の同權を公認せり。翌年帝は位を弟フアーヂナンドに讓りて墺太利家の領土を與へ、其の子フィリップを西班牙王となしてネープルス、ミラン、チザーランド及びフローンシ、コンテーを領せしめぬ。

Zwingli (zwing'lē)
Calvin (kal'vin)
Geneva (jenē'va)
Copernicus (ko-per'ni-cus)
Kepler (kep'ler)
Galileo (gal'ilēo)

新教の別派

瑞西の人ツヰングリ一五一八年に贖罪狀の賣却を非難して宗教の改革を唱へければルーサーの外にも一派の新教生じたりき。其の說各地に蔓延し州政府の之を採用するものありしかば、舊教の各州は之と爭つて互に干戈を動かし、ツヰングリ亦た戰死せり。然るに一五三六年カルヴィン佛國より來り、ジェニーヴァに其の說を唱へてより新教の氣焰益熾となれり。

天文學上の新說

十六世紀の中葉より世人の耳目を聳動せしものにはコパーニカスの之を唱へケプレル及びガリリーオー等の之に和したる地動說あり、これまた舊教の教權に反抗せしものゝ一なりとす。

第二章　西班牙の雄圖、ネザーランドの獨立及び東洋に於ける制海權の消長

フィリップ二世　舊教徒たるフィリップ二世は新教を歐州より一掃し、之と共に列國の覇權を握らんとし、内には嚴に新教徒を迫害し、外には英佛二國の舊教徒に結びて其の内政に干渉せんとしたり、時にネザーランドに於いては新教の勢力漸く增加し、特に其の北部に於いて甚だ盛なりしかば、王は苛酷なる宗門裁判所を設け、之を迫害しければ、國民の之に反抗すること漸く甚しく、往々暴動をなすに至りしを以つて王は更に兵力によつて之を鎭壓せんと企てたり。

Holland (hol'and)
Orange (oranj)
Ghent (gent)
Utrecht (ū'trekt)

和蘭の獨立　是に於いて北部諸州はオランジ侯ヰリヤムを首領として兵を擧げ、また南部諸州とも聯合してゲント同盟を結び、協力して西班牙の覊絆を脫せんとせり。然るに其の後南部諸州は舊教を奉ずることを約して西班牙に服從せしを以つて、一五七九年北部七州はユートレクト同盟を結び、一五八一年獨立を布告し、ヰリヤムを世襲の盟主となし、英國の助を得て西班牙と戰へり。西班牙にては新大陸より流入せる金銀の爲めに人心腐敗し、異教徒を迫害せるため生産の業衰へ、また戰爭を永續する能はず、一六〇九年に至りフィリップ三世は媾和條約を締結せり。

葡萄牙の東洋貿易　されど一方に於いて西班牙は一五八〇年より葡萄牙を合併したり。此の國は十六世紀に於

Lisbon (liz′bon)
Xavier (zav′ier)
Mateo Ricci (mateo richi)

いて東洋貿易の全權を握りリスボンの繁榮前後無比なりしが是より租稅の徵求甚しくために其の商業も漸く衰運に向ひぬ。されど東洋に於ける彼等の事業は純然たる商業の利益を求むるに止まらずして、土地を侵略し宗教を傳播し、之が爲には頗る橫暴の擧動多かりき。宗教は一五四二年ジェジュイット會員フランシス・ザヴィアーのゴーアーに赴きてより鋭意東洋諸國の宣教を勉め、一五四九(天文一八)年より我が國にも其の途を開きて一時甚だ盛なりしが、一六一二(慶長一七)年に至り宣教を禁ぜられ、一六三九(寛永一六)年全く貿易を禁じられぬ。支那へは一五八一マテオ・リチ(利瑪竇)の渡りてより宣教の道を開けり。

西班牙の東洋貿易

西班牙の東洋貿易は一五六五年

Philippine (fi-lip′in)
Manila (mänē′lä)
Batavia (batā′via)
Sumatra (sömä′tra)
Ceylon (sē′lon)

フィリッピン群島を占領したるに始まり、マーニーラーを根據とせしが、甚だ盛なるに至らざりき。我國へは一五八〇(天正八)年より來りしが一六三九年に至り交通全く絶えぬ。

和蘭の東洋貿易

此の時に當り代つて東洋貿易の專權を占めたるものは新に勃興せる和蘭なり。此の國は一五九六年始めて東洋に航海し一六〇二年東洋印度會社の設立成り、これより盛に其の業を進めて到る處に西葡兩國の殖民地及び商船を侵擊せり。一六一九年よりはジャーヴァなるバテーヴィアを根據として貿易を營み、十七世紀の前半に於いてマラッカ、スーマートラ、錫蘭、喜望峯等を葡萄牙人より奪ひたり。我が國へは一五九七(慶長二)年に始めて來りしが一六四〇(寛永一七)年より日歐間の貿易業を專占す

るに至れり。彼等は又た一時臺灣をも占領し、一六〇六年には濠州（オーストレーリア）（新和蘭）を發見しぬ。又た新大陸にてはニュー・アムスターダムを建設せり。かくて和蘭は繁榮を極め其の海軍は列國を睥睨するに至れり。

Australia (âstrā'lia)
New Amsterdam (niũam'ster-dam)

第三章　英國々教の確立

ヘンリ七世
- ヘンリ八世（一五〇九―一五四七）
  - めーり（一五五三―一五五八）
  - いーりざべす（一五五八―一六〇三）
  - エドワード六世（一五四七―一五五三）
- 女子
  - ジェームス一世（蘇格蘭王として六世）（一六〇三―一六二五）
    - チャールス一世（一六二五―一六四九）

國教の制定　ヘンリ八世は信仰に於いては舊教信者なりしが其の后のことにより法王と相爭ひ、一五三四年首長令（オヴ、シユープレマシ）を發布して英國の教會及び僧侶の首長は國王なりと宣言し、獨立の國教制度を設けたり。エドワード六世の代に至り大僧正クラムマー等王を輔佐して國教の信條を新教の主義に改めしが、次の女王メーリ再び之を改めてヘンリ八世の舊に復し、加之自ら西班牙王フィリップ二世と婚し、更に法王權の回復に盡力せしかば國民の反抗甚しかりき。

Act of Supremacy
Crammer (kam'mer)
Mary (mā'ri)
Elizabeth (ē-liz'a-beth)
Knox (noks)

イーリザベス　是より先き蘇格蘭にてはジョン・ノックスの唱へたるカルヴィン主義の新教大に勢を得たりしを以つて、時の女王メーリは（フランシス二世の后）佛國の助を借りて之が抑壓を勉めけるが、英國の女王メーリの沒するや、フィ

Act of Uniformity
Anglican Church
Episcopal
Nonconformist
Puritan

リップ二世及び舊教徒の援を得て英國王位の相續を要求したり。然るにイーリザベス之を斥けて即位し首長令及び統一令（アクト、オヴ、ユニフォーミチ）を發して國教制度を定め、新教に據れる祈禱書を發布して新教々義を採用せり。之を英吉利（アングリカン）（エピスコパル）教會といふ。新教徒の中にても其の制度禮典を奉ぜざるもの（ノンコン）（非統一派（ノンコンフォーミスト）、清教徒（ピューリタン））あり、女王の之を迫害すること甚しかりしかば、其の徒和蘭に逃るゝもの多かりき。またフィリップ二世及び英佛の舊教徒は蘇王メーリを擁立して舊

イーリザベス及メーリ女王

Invincible Armada
Shakespeare (shāk′spēr)
Bacon (bā′kon)
Surat (sörät′)

教を回復せんとしければ、女王は遂に之を殺しぬ、女王は又たネザーランドの獨立を助け、フィリップ二世が一五八八年に來攻せしめたる不滅艦隊（インヴィンシブル、アルマダ）を擊破し、西印度を攻擊し、西班牙及び法王の助を得たるアイルランドの反亂を平げて其の地を統一したり。イーリザベスの世には農工の業、航海貿易の途著しく發達し、又た大戯曲家ウィリヤム・シエークスピーア、歸納法の主唱者フランシス・ベーコンの出でたる文運隆盛の時代なりき。

東洋航海及び亞米利加殖民

イーリサベスの治世はまた英國が東洋航海の緒を開ける時なりき。始め一六〇〇年東印度會社の設けられてより漸く貿易の歩を進め、印度なるスーラートを根據として次第に葡萄牙人を凌駕し

Virginia (vérjin'ia)
New England (nū eng'land)
James (jāmz)
Stuart (stū'art)

ゆきしが、又た大平洋の諸島にもすゝみ來り、一六一三慶長一八年より我が國と貿易の途を開きしも、此の方面にては和蘭人の競爭に敗れて遂に我が國との貿易も中止したり。亞米利加殖民は十六世紀の終よりはじまりしが一六〇七年より一六二〇年の間にヴァージニア及びニュー・エングランドに殖民せしより漸次歩武を進め、和蘭に逃れたりし清教徒及び舊教徒の移住するもの多かりき。

ジェームス一世及びチャールス一世　イーリザベスの沒するや蘇格蘭王ジェームス入りて英王となり兩國を一王の治下に合しぬ。これをスチューアート王統とす。ジェームス一世は國王神權說を持し、國會に財政上の要求をなさずして恣に獻金を徵し、外交上極めて軟弱の主義を執り、西班牙の甘心を得んが爲め其の王室との婚儀を圖りしが爲め常に國會の抗義を招けり。チャールス一世も亦た租稅の徵收に關し國會と衝突せしかば一六二八年の國會は權利請願(ペチション、オヴ、ライツ)を提出して之が承認を求めたり。其の重要なる條項は國會の協賛なくしては何等の名義によるも金錢を徵收せざること、裁判を經ずして人民を處罰せざること等にして王は已を得ず之を承認せしも、後また之を破りて省みざりき。また外國に對してはしめ丁抹、和蘭と共に大陸の新教徒を助けしも、內政紛擾の爲に其の態度を變するに至れり。

Petition of Rights

第四章　佛國の內亂及び其の治平

Huguenot (hü′genot)
Navarre (navär)

フランシス一世（一五一五―一五四七）
- フランシス二世（一五五九―一五六〇）
- チャールス九世（一五六〇―一五七四）
- ヘンリ三世（一五七四―一五八九）
- 女子 ＝ ヘンリ四世（一五八九―一六一〇）
- ルーイス十三世（一六一〇―一六四三）
- ルーイス十四世（一六四三―一七一五）

ぶーるぼん家

宗教の爭と政權の爭

佛國の新教徒（ヒューゲノット）はジョン・カルヴインの說を信するものにして、其の勢頗る强盛にして、特に南部に流行し、ブールボン家のナヴァール王其の首領たりき。當時の國王はフランシス二世にして母

Boorbon (bör′bon)
Guise (güēz)
St. Germain (st. jèrmān′)

カザリン之が攝政たりしが、舊教徒たるロレーン家のギューイース伯フランシス政權を掌握したりしかば、ブールボン家は之と權勢を爭ひ、政權の爭と宗派の爭と相關聯して轉た紛擾を極めたりき。されどカザリンはギューイース家の勢を得るを好まざりしを以つて、チャールス九世の時新教徒と和して之を制せんとし、一五七〇年セント・ジャーメーンに於いて信教自由の勅令を發し、ナヴァール王ヘンリに王妹を嫁して平和の鞏固を圖りしが、王が漸く新教に心を寄するに至りしを見て再びギューイース黨と結托し、セント・バーソロミューー祭日の夜半暴に新教徒を虐殺せり。此の慘劇各地方に傳播して三万余人の新教徒は數日の間に殺戮せられぬ。

Nantes (nauts)
Sully (sul'i)

新舊兩教徒の爭鬪

是に於いて内亂再發し、新教徒は英獨に於ける同志者の援助を得、舊教徒は西班牙の應援を受けて相爭へり。ヘンリ三世立つに及びギュイース黨は西王フィリップ二世と神聖同盟を結び、益舊教の勢を張らんとせしが王嗣なくして沒しゝかば、幾多の紛亂を經てナヴァール王ヘンリ位に即き、ヘリン四世と稱せり。

ヘンリ四世

ヘンリ王位に即きても舊教徒は之を奉ぜず、西班牙の力を假りて舊教の信徒を擁立せんとせしかば、王は自ら舊教に改宗して之を宥め、一五九八年ナンツの勅令を發して信教の自由を公許し、新教徒に滿足を與へたり。王は國内の統一とハプスバーグ家の抑制とを目的とし、賢相サリを登用して財政を整理し、大になすあらんとせしも事未だ發せざるに當り不幸にして弑せられぬ。王の時新大陸にアケーヂアの殖民始まり、これより漸次カナダ、新佛蘭西地方の殖民地を開くに至れり。

Acadia (akā'dia)
Canada (kan'ada)
Richelieu (rēsh'lye)
Mazarin (maz'a-rin)

リーシリュー及びマザリン

ルーイス十三世の治世の大半はリーシリュー（一六二四―六四二）政局に當りてヘンリの遺策をつぎ、大陸に於いてハプスバーグ家を抑制し、又た海軍を盛にして英國に抵抗し、佛國をして列國の首力たらしめんと勉めしが、其の死後より幼稚なるルーイス十四世の初年にわたりマザリン之をつぎて國威を發揚せり。

第五章　三十年戰爭

宗教上の二同盟

獨乙にては十七世紀に入りてより

Christian (kris'tian)

新舊二教徒の反目甚しく、新教徒はパヲナネート伯フレデリック(英王ジェームス一世の女婿)を首領となし、舊教徒はバヴェーリア候マクシミリアンを首領とし、各同盟を結んで相拮抗せり。而して皇帝は西班牙と共に舊教同盟と結び、英、佛及び和蘭は新教同盟と氣脈を通じたり。

ボーヒーミアの叛亂　然るに一六一八年ボーヒーミアの新教徒が新教同盟の援助を得て舊教徒なる國王フアーヂナンドを放逐せしより戰端破裂し、皇帝は西班牙及び舊教同盟の兵を併せて之を伐ち、大に之を破りて新教同盟を解散せり。

丁抹王の侵入　此の時新教徒なる丁抹王クリスチアン四世は英、蘭二國より軍資の補助を得、一六二五年に大舉

Wallenstein (väl'lenstīn)
Gustavus (gustä'vus)

日耳曼に侵入せり。是に於いてボーヒーミアの人ヴァールレンスタイン起ちて帝國軍隊の總督となり、西班牙軍と共に丁抹を侵擊して之を破り大に帝國の兵勢を加へぬ。

瑞典王の侵入　此の時佛國にてはリーシリュー政局に當りしかば、瑞典王ガスターヴァス二世は佛國より軍資の補助を得て一六三〇年に獨乙に侵入し全國を横行せり。帝乃ち再びヴァールレンスタインを起しゝが彼は新教徒に自由を與へて宗派の爭をたち、西班牙の干涉を斥けて帝國の統一を畫せんとせしかば、西班軍及び舊教同盟の惡む所となり遂に暗殺せられぬ。

佛軍の侵入　此の間に瑞典王は戰死せしが戰は依然繼續せられ一六三五年よりは佛軍も亦た西南地方に侵入

Pomerania (pom-erā'nia)
Metz (mets)
Toul (töl)

せり。加ふるに一六四〇年には西班牙に内亂起りて葡萄牙獨立し、佛國のマザリン、リーシリューの遺策により西班牙を侵したるを以つて舊教徒の勢大に衰へぬ。

エストフェーリアの條約　獨乙はかく永年の戰爭によりて人口は減少し百般の事業は衰微を極めしが、一六四八年エストフェーリアの條約にて始めて事平ぎぬ。此の條約にて瑞典はポメレーニアの大部及び其の附近の地を得て帝國議會に投票權を得、佛國はメッツ、ツール、ヴェルダン及びアールザース地方を取り、瑞西及び和蘭の二國は獨立の公認を得たり。又た帝國内の諸侯は大に權力を增加し、新舊兩教徒は同權を有すべしと定められたり。

Colbert (kōl'bār)
Pondichery (pon-disher'i)
Chandernagor (chan-dėr-na-gōr')
Louisiana (lö-ē-zi-an'a)
Mississippi (mis-i-sip'i)

第二期　エストフェーリア條約より佛蘭西革命まで（一六四八——一七八九）

第六章　佛國の雄大及び其の專制主義

ルーイス十四世の施政　リーシリューの時より佛國内政の主義は中央集權の確立にありしが、一六六一年王の親政するに至りてより「朕は國家なり」と公言して益專制主義を實行し、またコールベールを登用して經濟上の保護政策を行ひ、航海を奬勵し、海軍を擴張せり。王の時印度にてはポンヂシェリ及びシャンダーナゴールを占領して貿易の根據となし、新大陸にてはルーイージアナ（ミシシピ河畔）の地に殖民地を開けり。

Pyrenecse (pir′e-nōz)

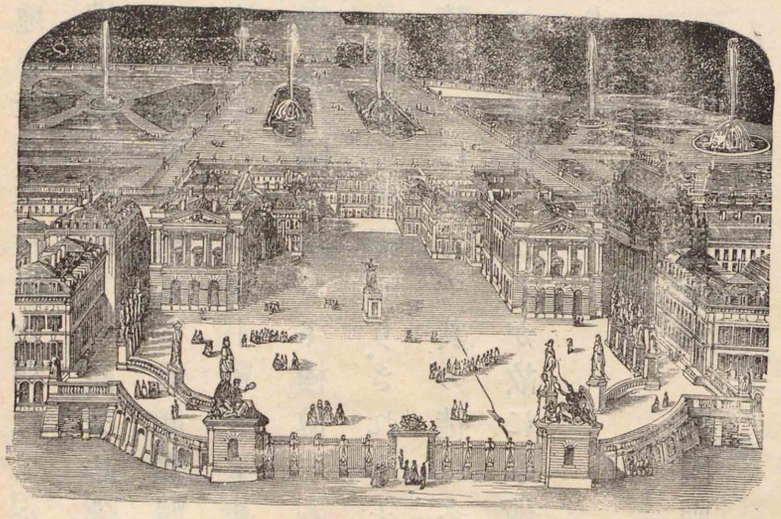
西班牙領ネザーランド及び和蘭との戰爭

一六五九年佛國は西班牙とピレニース條約を結びて國境の要地を取り、また兩國の王室に姻親を結びしが、西班牙王フィリップ四世の歿するや、ルーイス十四世は其の領土ネザーランドを得べき權ありとし之を侵擊せしが、和蘭は英國及び瑞典と

ルーイス十四世の宮廷

Nimwegen (nim′wā-gen)

三國同盟を結びて之に抗しければ、一六六八年エークス・ラ・シャーペルの和議にて其の要求を拋棄せり。是に於いて王は更に和蘭を攻擊せしが、和蘭はブランデンブールグ、墺太利及び西班牙と同盟し、更に英國とも訂盟して之に抗し、一六七九年ニムエーゲンの和議を結べり。これより王は益其の慾望を逞くし、帝國及び西班牙より國境の要



ヴァーセールス宮殿

地を奪ひ、又た伊太利にてジェノアを服屬せしめたり。

佛國の文化　此の時佛國の文化は其の絶頂に達し、朝廷は豪奢を極め、宮殿は艶麗を盡し、華美なる美術工藝あり、流麗なるコルネーイ、モーリエール、ラーシーンの著作あり、皆な列國の爭つて模倣する所となり、其の風習及び國語は全歐洲を風靡せり。されど王がナンツの勅令を廢し、新教を禁ずるに及んで其の徒は多く英、蘭及びブランデンブールグに移住したるが故に學術は衰へ、海軍は萎靡するに至れり。

Corneill (kor-nāy′)
Moliere (mō′lyār)
Racine (räsēn′)

第七章　英國兩度の革命及び其の憲法の發達

和蘭王……オリアム三世（一六八九―一七〇二）

ジェームス一世
- チャールス一世
  - チャールス二世（一六六〇―一六八五）
  - ジェームス二世（一六八五―一六八八）
    - めーり（一六八九―一六九四）
    - あん（一七〇二―一七一四）
- 女子……ジョージ一世（一七一四―一七二七）
  - ジョージ二世（一七二七―一七六〇）
    - フレデリック ルーイス
    - ジョージ三世（一七六〇―一八二〇）

Short Parliament
Long Parliament

內亂　チャールス一世は一六四〇年蘇格蘭鎭壓の軍資を得んが爲めに國會を召集せしかど要求の容れられざるを以つて忽ち之を解散し（短期國會）、更に新國會（長期國會）を召集せり。國會は乃ち大に王の非政を鳴らして兵權を委ねざりしかば、王は武力を以つて議院の首領を捕縛せんと

ork (yôrk)
Chav'alry
Roundhead
Independent
Oliver Cromwell (ol'ivêr krom'wel)
Rump Parliament

せしが成らずしてヨークに走れり。是に於いて下院は自ら軍隊を集めしかば、一六四二年、王黨(騎士黨)と下院黨(圓顱黨)との間に戰爭破裂せり。然るに下院の一派に清教徒よりなれる獨立黨あり、極めて過激の意見を抱きしが、その首領はオリヴァー・クロムエルにして軍隊の實權を握りしかば、下院は獨立黨を排除して王と媾和せんとせしも成らず、却つて獨立黨は下院より武力によつて反對黨を放逐し、自黨の議員を以つて國會(ランプ國會)を組織し、一六四九年遂に王を死刑に處しぬ。

共和政治　かくて國會は共和政治の建設を宣言せり、されどクロムエル獨り全權を握り、國會を解散して新に英蘇及びアイルランドの議員よりなれる新國會を組織し、此

Paradise lost
John Milton (jon mil'ton)

の國會より三國共和政治の保護者てふ稱號を得たり。彼は國教制度を廢し、舊教徒を罰し、演藝遊技を嚴禁し、文學美術を束縛して武斷的政治を施しゝが、其の秘書官に失樂園の著を以て有名なるジョン・ミルトンありき、彼はまた一六五一年に航海條例を發して和蘭の商業を妨害し、其の海軍を打破り、又た亞米利加なる西班牙の領土を侵略し、大に英國の國威を輝かしぬ。其の歿後、子リチャード職をつぎしも數月にして自ら辭しければ、一六六〇年に國會はチャールス二世を迎立せり。

王政復古、チャールス二世　チャールス二世は國教制度を回復したれど却つて私に舊教を保護し、又た佛王ルーイス十四世の賄賂を得て和蘭と戰ひければ、國會は大に之

Bill of rights　Test Act　Habeas corpus act　Whig　Tory

を爭ひ、ために審査令（テスト、アクト）及び人身保護令（ハベアス、コルパス、アクト）を制定したり。然るに舊教徒にして王の繼嗣たる太弟ジェームスを斥けんとするに及び國會の議論分裂し、國教と民權とに重を置けるホイグ黨と、王室の血統に重を置くトーリ黨との抗爭起りぬ。」

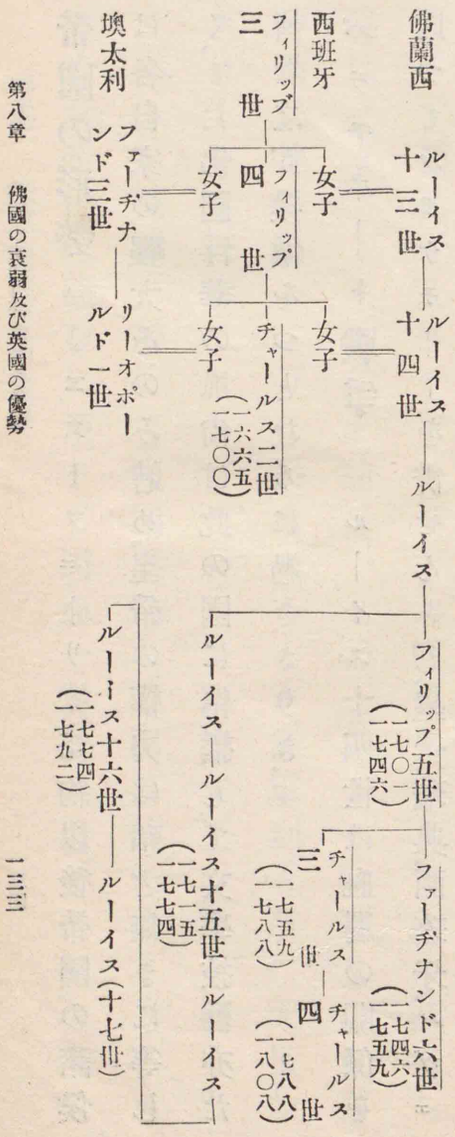
井リヤム三世の迎立

ジェームス二世は舊教の復興を計りて宗門裁判所を設け、又た貨財兵力を以て、國民を壓服せんとしければ、國民は王女メーリの夫たる和蘭のオランジ侯井リヤムを招きて時艱の救濟を謀れり。王は是に於いて佛國に逃れしかば國民は一六八九年井リヤム三世及びメーリを迎へ立て、國王となし、國會は權利條例（ビル、オブ、ライツ）を提出して其の承認を得たり。國會の協賛なくして法律を定め、租稅を課し、又た軍隊を置くべからざる事、國會は討論請願及び議員選舉の自由を有する事、宗教裁判所を置くべからざること、等は此の法律の要點なり。一七〇一年國會は相續令（アクト、オヴ、セツトルメント）を通過し、國王は必ず新教徒たるを要すべく、王妹アンの後は位をハノヴァー家に傳ふべしと定めたり。

Act of settlement　Anne (an)　Hanover (han′o-vèr)

第八章　佛國の衰弱及び英國の優勢

（傍線あるは西班牙王）



La Hogue (lä hōg)
Ryswick (riz′wik)

帝國の形勢　エストフェーリア條約以後帝國の諸侯は各自家の強大をのみ勉め、皇帝の權力は殆ど無きに等しく、また佛國浮華の風尚は此の國に傳播して文學技藝亦た皆な之が摸倣をつとむるに過ぎざりき。

パラチネート戰爭　ルーイス十四世は血屬の關係を以つてパラチネートを併せんとし、皇帝、瑞典、西班牙、バヴェーリア、サクスニ、パラチネート及び英、蘭二國の大同盟と戰を開きしが、ラー・ホーグの海戰に於いて英、蘭兩軍の爲に大敗し、一六九七年リスヰックに和議を結びたり。

西班牙王位繼承の亂　此の時に當り列國の耳目はチャールス二世の歿後に於ける西班牙王位相續問題に集まれり。ルーイス十四世と皇帝リーオポールドとは重なる

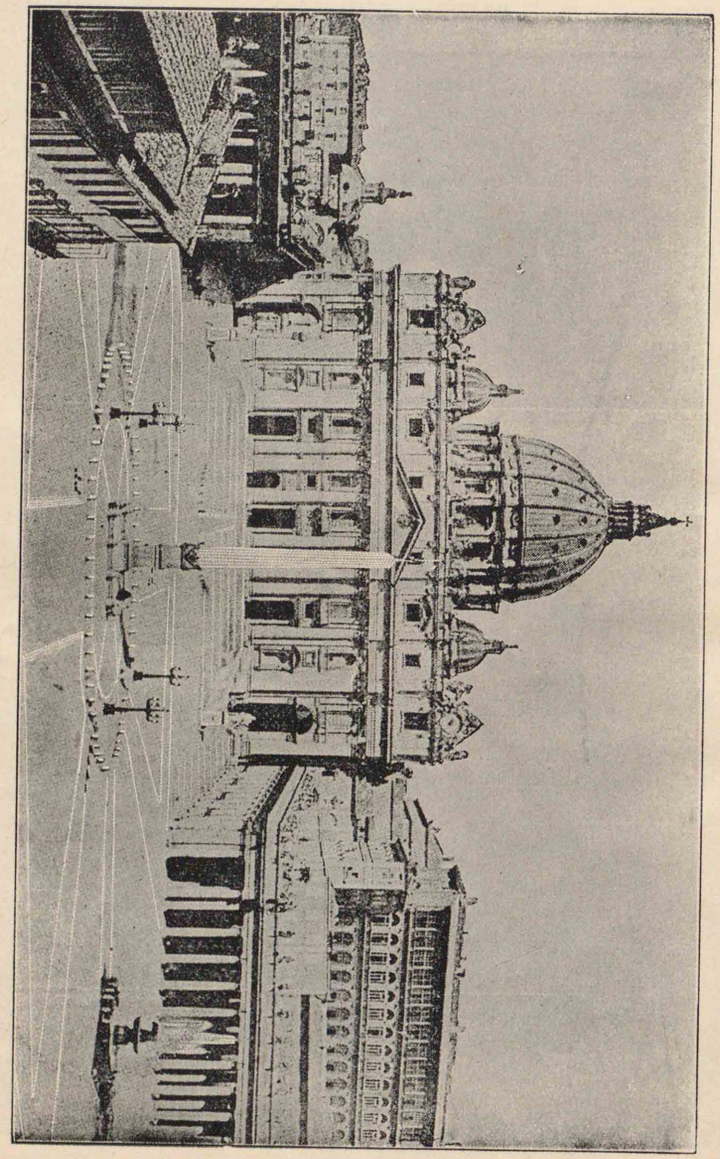
Savoy (savoi′)

競爭者たりしが、英蘭二國は之を何れの國にも與ふるを好まざるを以つて、王は孫フィリップを、皇帝は次子チャールスを推選せり。チャールス二世はバヴェーリア侯に位を讓らんとせしも、偶其の死するに會し、遂にフィリップを繼嗣と定めければ、王の歿後フィリップ(五世)は直に其の國に赴きて位に即けり。是に於いて英、蘭二國は皇帝、ブランデンブールグ、葡萄牙、及びサヴォイと大同盟を作りて之に抵抗し、佛はバヴェーリア侯と結び、一七〇一年より歐洲及び東西の殖民地に於いて互に兵を交へしが、佛軍到る所に大敗し、チャールス(三世)はミランに於いて西班牙王の號を稱したり。然るに英國に於いて内閣更迭し、帝國に於いてチャールス(六世)帝位を踐むに至りて局面一變し、一七一三年ユート

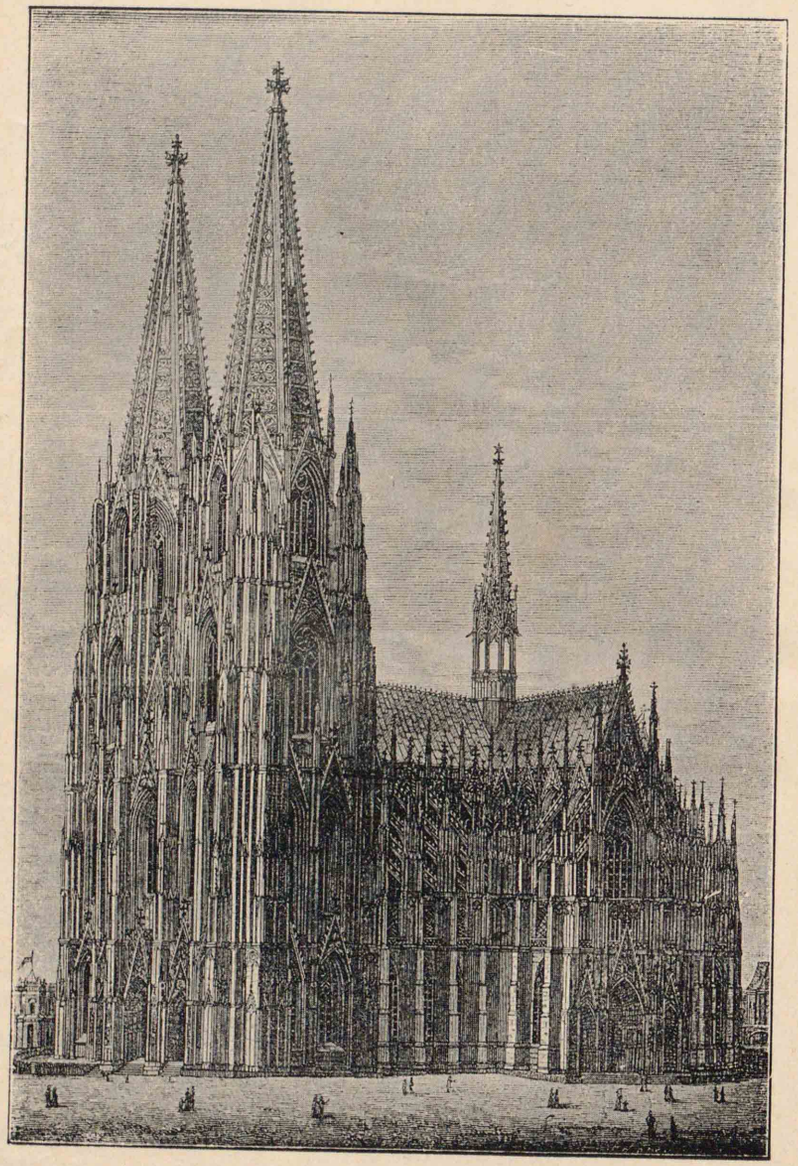
Nova Scotia (nō′va skō′shia)
Hudson (hud′son)
Gibraltar (ji-brâl-tar)
Minorca (mi-nor′ka)
Rastadt (räs′stät)
Baden (bä′den)

レクトの和議成りぬ。此の條約にて英國は佛蘭西、西班牙二國の決して合併すべからざることを條件としてフィリップ五世を承認し、佛國より亞米利加なるノーヴァ・スコーシア、ハドソン灣地方等を取り、西班牙よりジブロールタル及びミノルカを取り、サヴォイは王國となりてシヽリを得たり。翌年ラースタート及びバーデン條約にて墺太利はネザーランド、ネープルス、サルヂニア及びミランを得たり。其の後墺太利とサヴォイとの間にサルヂニアとシヽリとを交換しサヴォイ侯はサルヂニア王となりぬ。

佛國の疲弊　永年の戰陣に國力銷磨し豪奢の風習に人心腐敗し、ルーイス十五世に至りては佛國の光榮全く地に落つるに至れり。



聖　寺　ー　タ　ー　ピ　の　馬　羅



コローンの寺院

Lock (lok)　Great Britain (grāt'brit'n)
Pope (pōp)
Swift (swift)
Defoe (defō')
Addison (ad'ison)
Newton (nū'ton)

普魯西の勃興

ブランデンブールグ及び普魯西はフレデリック・ヰリヤム、が軍備を修め實業を奬勵せしより日に盛運に赴き、フレデリック一世之を繼ぎて益、祖業を擴恢し、西班牙王位繼承亂に關して大に戰功あり、爲に普魯西王の號を認許せられ、其の嗣フレデリック・ヰリヤム一世は勤儉武を好みて佛國文弱の風を惡み、軍制を更革し、普通教育法を設け、大に國本の培養を勉めたり。

英王アン

英國にてはヰリヤムの歿後、アン位につき、一七〇七年英蘇の二國を全く合併して大ブリトンと稱したり。アンの治世は再び文運の隆盛に向へる時期にして、ポープ、スヰフト、デフォー、アヂソン等の文士輩出し、ニュートンは重力の法則を發見し、ロックは經驗派の哲學を說きぬ。

Connecticut (konekt'icut)
Rhode Island (rōdi'land)
New Jersey (nūjér'zi)
Carolina (karo-līna)
Pensylvania (pen-silvā'nia)
Deiaware (del'a-wār)
George (jôrj)
Walpole (wol'pōl)
Pitt (pit)
Chatham (chat'am)
Massachusetts (ma-sa-chö'sets)
Maryland (mer'i-land)

ハノヴァー王統　アンの歿後ジョルジ一世入りて位につき、ハノヴァー王統を始めたり。其の後半よりジョルジ二世の前半はヲルポール政を執り、其の後半よりジョルジ三世の初年は老ピット(チャタム伯)政に當り、國勢日に進運に向ひ、憲法政治の運用次第に圓熟しゆけり。

新世界及び東洋に於ける英國民の膨張　亞米利加殖民地に於ては移住民の增加すると共に外國特に佛蘭西殖民地と競爭して漸次其の區域を擴張し、一七三三年に至りては新に佛國より得たる地方の外、ヴァージニア、マサチューセット、メリランド、コンネクチカット、ロードアイランド、ニュー・ジャージ南北カロライナ、ペンシルヴェーニア、デラヱーア、ニユー・ハムプシル、ジョルジア及びニューヨー

Mughal (mö'gal)
Cossack kos'ak)
Siberia
Tsar (tsar)
Don (don)
Irmak
Hampshire (hamp'shir)
Georgia (jor'jia)
New York (nūyork)
Madras (madras')
Calcutta (kal'kut'a)
Bombay (bombā)

クの十三州ありき。これらは皆な議會を有し、大憲章以來享有せる英國民の權利は大西洋を越えて齎し來れるを信ぜり。印度にてはマドラス、カルカッタ及びボムベーを其の根據地となしゝがムーガル帝國の分裂と歐洲列國間の戰爭とは次第に英國の勢を增進する機會となりぬ。

第九章　露西亞の擴大

コサックの西比利亞侵略　露西亞はイーヴァーン四世の時ツァルの尊號を稱し、カザン、アストラハーンを併せ、ドン河畔のコサックを服屬せしめたり。帝の時一五八〇年頃コサックのイルマックなるもの其の部隊を率ゐてウーラルを越えオービー河邊を征略せしが、これよりコサック

Ural (ö′ral)
Obi (ōbē)
Romanoff (rōmä′nof)
Michael (mī′kel)

の健兒は續々西比利亞に侵入するに至れり。

露西亞、波蘭及び瑞典

東歐に於ける此の三國の間にも紛擾常に絶えず、十七世紀の始までは露國概ね他の二國に壓倒せられたりしが、一六一三年ローマーノフ家のマイケル露帝に選立せられてより後漸く勢を回復し、先づ波蘭が當時選立王國となりて國王の選擧毎に紛擾を生じ國勢の衰へ初めたるに乘じ、其の東境の地をとりしが、瑞典はなほ、先に露國より取りし芬蘭地方及び新に波蘭より得たる、リヴォーニア、エスゾーニア等をボールチック海の東南に有し頗る優勢を保てり。

ピーター大帝

一六八九年ピーター大帝（一六八九—一七二五）露國に君臨せしが、帝は深く良港を得るの必要を感じ、獨伊等

Azoff (ä′zof)
Saint Petersburg (pētérz-bérg)

の諸國より工匠を聘して船艦を造り、一六九六年土耳其の地アーゾフを征略せり。これより益造船航海の業を奬勵し、又た自ら獨乙及び蘭英二國を巡歷し、親しく造船の智識を得て歸り、海軍の擴張に意を注ぎしが、其のボールチック海に門戸を得んとする希望は遂に波蘭及び丁抹と密約を結び、兵を出して瑞典の地を侵すに至れり。瑞典王チャールス十二世は先づ丁抹を擊破し、直ちに鋒を轉じて帝の軍を破り、ついで波蘭を攻擊せしが、帝は其の虛に乘じ芬蘭灣沿岸の地を占領して一七〇三年こゝにセント・ピータースバーグを創めたり。其の後瑞典王再び露國に侵入せしが大敗して土耳其に逃れしかば、露はアーゾフを還附して土國の歡をかひ、ボールチック海濱にては波蘭、普魯西及びハノヴァ

Tomsk (tomsk)
Yeniseisk (yenē-sā′isk)
Yakutsk (yākö′tsk)
Nystadt (nü′stät)
Livonia (livō′nia)
Esthonia (es-thō′nia)

ーと共に益、瑞典の地を侵略せしが、瑞典王の歿するや、ハノヴァー及び普魯西は各其の近隣の地方をとりて和を媾じ露は一七二一年ニュースタート條約にてリヴォーニア、エスヅーニア、及び其の附近をとりぬ。これより瑞典の勢大に衰へ露國は西方に勢をのばす端緒を開きぬ。帝は單に領土を擴張せしのみならず、鋭意西歐の文物を輸入し、頗る急劇の手段を以つて舊來の風俗制度を改革し國民智識の開發をつとめしかば、この國もまた漸く西歐の文化に接觸するに至れり。

東方經略　コサックの西比利亞征服は其の後益、歩を進め、河畔の要地にトムスク、エニーセーイスク、ヤークーツク等の堡塞を築きつゝ東方に進めり。かくて十七世紀の前半にはオーホツク海に達し、カームチャートカーに渡りしが、其の一隊は當時清の領域たりしアームール河畔に達して一六五一年にアールバージーン地方を占領し、イルクーツク、ネルチンスク等の堡塞を築きしが、一六八九年ネルチンスク條約を結びて此の地方を還附し、又たキーアーフタを兩國の互市場と定めぬ。帝は又た裏海の沿岸に於いて波斯より領地を奪ひしが、其の中央亞細亞遠征の擧は効なくして了りぬ。

Kiachta (kē′ächtä)
Ochotsk (ōchotsk′)
Kamchatka (kämchät′kä)
Amur (ämör′)
Albasin (älbä-sēn)
Irkutsk (ir-kötsk′)
Nertchinsk (ner-chinsk′)

第十章　普魯西の勃興、獨乙國民の新氣運

ばるーりあ侯……エムマニユエル——チヤールス（七世）（一七四二—一七四五）

皇帝

ファーヂナンド三世——リーオポールド一世（一六五七—一七〇五）

- 女子
- ジョーセフ一世（一七〇五—一七一一）
- チャールス六世（一七一一—一七四〇）
- マーリーあー、てりーざ（一七四〇—一七八〇）＝フランシス一世（一七四五—一七六五）
  - ジョーセフ二世（一七六五—一七九〇）
  - リーオポールド二世（一七九〇—一七九二）——フランシス二世（一七九二—一八〇六）

普王

フレデリック一世——フレデリック一世（一七〇一—一七一三）
- フレデリック一世（一七一三—一七四〇）
- フレデリック二世（一七四〇—一七八六）
- オーガスタス・ウリアム（一七八六—一七九七）
- フレデリック・ウリアム二世（一七九七—一八四〇）
- フレデリック・ウリアム三世（一七九七—一八四〇）

Marir Th re a (märiēä teré´sa)
Pragmatic sacntion

波蘭王位相續亂

一七〇〇年波蘭王位相續の問題に關して佛、西及びサルヂニアと獨露との間に戰端開かれしがヴィエナ條約に事局を收めたり。墺國がチープルス及びシ、リを西班牙王家に歸したるはこの條約の結果なり。

シリーシア戰役

皇帝チャールス六世は男子なかりしかば位を其の女マーリーアー、テーリーサに傳へんとして爲にプラグマチック・サンクションを發布し、一七四〇年この法令により王女帝位に上りしかば、バヴェーリア侯チャールス・アルバート、西王フィリップ五世及びサクスン侯オーガスタス三世各繼承權ありと稱して紛亂を生じたり。この年普國にてはフレデリック二世(大王)位に即きしが、此の機に乘じて突然シリーシアを占領せり。(第一シリーシア役)

Breslau (bres'lou)

かくて普、佛、西、露及びバヴェーリア、サクスニの同盟軍と英墺の聯合軍との間に戰爭を生じチャールス(七世)一度び帝位に上りしもブレスラウ條約にて墺太利は普國にシリーシアを與へて之と和し、これより大に同盟軍を打破りぬ。然るにフレデリックは墺軍の勝利を見、一七四四年チャールス七世及び佛國と同盟して再び兵を起し(第二シリーシア役)墺、英、蘭及びサクスニの連合軍と戰ひしが、チャールス七世歿してよりバヴェーリアは墺太利と和し、女帝は位を其の夫フランシス一世(タスカニ侯)に讓りしかば、普墺も亦た相和して前約を確認し、列國は一七四八年エークス・ラ・シャーペル條約に於いて和議を結べり。

七年戰役

皇帝はかく普國の勢力の隆盛なるを見、露

Hubertusburg (höbert'ös-börg)
Dupleix (düplāks')

佛と同盟して之を抑制せんとせしかば、フレデリックは一七五六年先づ兵を起して突然サクスニを侵擊せり。是に於いて墺、魯、佛及びサクスニの軍普國の四境に迫りしかば、フレデリックは其の訓練せる軍隊と其の毅然たる勇氣とを以つて之に當り、加ふるに英國の補助ありしが故に、始の程は常に勝利を得たりしが、其の後次第に厄境に陷るに至れり。されど露帝の更迭、英佛間の和議ありて形勢又た一轉し、一七六三年フーベルツースブルグに和議を結びてブレスラウ條約を確認せり。

印度に於ける七年戰役の影響

ボンデシェリの總督ヂュプレークスは印度に於て佛國の勢力を樹立せんことを勉め、爲にマドラスに於ける英人との間に衝突絶へざ

St. Lawrence (là'rens)
Florida (flor'ida)
Clive (kliv)
Bengal (bengâl)

りしが、七年戰爭の起るに及び、カルカッタなる英國東洋印度會社の書記クライヴはシャンダーナゴールを侵し、佛人に與みせるベンゴールの副王を仆してカルカッタ地方を略有せり。クライヴは一七五八年始めて印度殖民地の知事に任ぜられたり。

亞米利加に於ける七年戰役の影響

エークス・ラー・シャーペル條約以後も英國は益、佛國の殖民地を壓し、七年戰爭の開かるゝ前年より兩國の戰端破裂したり。されど一七六三年パリス條約にて英國は佛國よりセント・ローレンス灣内の諸嶋、アケーディア、カナダ及びミシシピ以東を得て西印度を與へ、西班牙よりもフロリダ及びミシシピ以東を得、また西班牙は佛國よりミシシピ以西を得たり。

Clopstock (klop'stok)
Lessing (les'sing)
Herder (her'der)
Schiller (shil'ler)
Goethe
Kant

フレデリック大王の内政及び獨乙の新氣運

大王は國政を改革し、教育を奬勵し、農商の業を開導せしが、特に七年戰爭の後は民力を休養し、實業を保護して、創痍の回復に勉めたり。この時は恰もクロプストック、レッシング、ヘルデルの出でゝ日耳曼文學の光輝を發揚せし時にして、獨乙はこれより十八世紀の終末に於いてシルラー、ゲーテ等の文豪を出し、哲學にはカントを出し、漸く歐洲文化の中心たるに至らんとする勢を示せるのみならず、この國文學の勃興はおのづから獨乙の國民的精神を發揚して將に其の獨立と統一との新氣運を導かんとするものあり。

第十一章　十八世紀の後半に於ける歐洲

Voltaire (voltār')

革命の氣運

十八世紀の後半に至りては中世紀以來馴致せし社會上の不平等其の極に達し、又た列國は多年の戰亂によりて財政紊亂し政弊積重せしが、就中佛國はこれらの弊害最も甚しく、負債山積して政府の歲入其の利子を拂ふだに不足を訴ふる程なりしも、貴族僧侶は古來の特權を利用して毫も之を負擔せず、平民獨り苛稅を徵せられたり。是に於いて政治上の改革論は漸く民間に動き、更に進んで社會組織の根柢に對する破壞思想を抱くものあるに至りしが、此の時恰も英國に生長せし經驗派の哲學思想この國に流入して極端にはせ唯物說となり、無神論となりて、益々人心を動搖せしめたり。かのヴォルテールが王權的改革

Catherine (kath'arin)　Montesquieu (montes-kye)　Rousseau (rösō')

論、モンテスキューの三權分立論、ルーソーの社會契約論の如き、みなこの時運に際會して起りたるものなり。

各國の新政

この間各國君主は往々貴族僧侶を抑制して之より起る種々の政弊を改革せんとし、墺のジョーゼフ二世、葡のジョーゼフ一世、瑞典のガスターヴァス三世、丁抹のクリスチアン七世の如き皆な之を試みたれど、貴族僧侶は百方之を妨害して十分の効果あらしめざりき。されば民間の物議は益〻昂進し來り、佛國に生れ出でたる諸種の革新思想は忽ちにして歐洲各國民の間に傳播し歡迎せられたり。

カザリン二世

この時露國にてはカザリン二世（一七六二、一七九六）位にあり、敎育を奬勵し、政治を改革し、頗る下民の利福

を計るところありしが、外國に對しては一層の雄圖を抱き、先づ普國と共に波蘭に干渉して其の國の希臘教徒及び新教徒に國教徒と同等の權利を有せしめたり。此の時波蘭に於いては貴族政權を專にして平民を抑壓し、私黨相鬩ぎ宗派相爭ひて紛擾を極めたりしが、國教徒は土國の助を得たりしを以つて露軍は波蘭に兵を出すと共に土より其の附屬たるクリーミア汗國を略し、又たブルゲーリア地方にも侵入し、海上にては大西洋より地中海に出でゝ土に迫りぬ。

波蘭の分割　普墺の二國は之を見て喜ばず、露を誘ふに波蘭の分割を以てし、一七七二年各兵を進めて恣に其の境上の地を三國の間に分取せり。之を第一回の分割といふ。露土の關係はクーチュークカイナールヂー條約にて決定

Kutschouc Kainardji (köt-chök-kī-när'je)

せられ露はダニューブ以北の諸州に於ける希臘教徒の保護權を得、又た黑海に於いて露國船舶の自由航海權を得たり。

英國の狀勢　英國にては名譽革命の後、航海貿易の業益々進み工藝殖産の途彌〻開けしが、之が保護のため殖民地人民の需要品は必ず本國の製造と輸入とによるべしと定められしを以つて、殖民地は爲めに不利益を感ずること大なりき。憲法政治の運用は次第に圓滑となりたれど、市郡の盛衰に伴ひて議員選擧法の改らざりしが故に、國會は漸く眞正なる國民の代表者たらざるに至り、國會革新の必要次第に感知せらるゝに至れり。

Continental Congress　Stamp Act
Philadelphia (fil-a-del'fi-a)

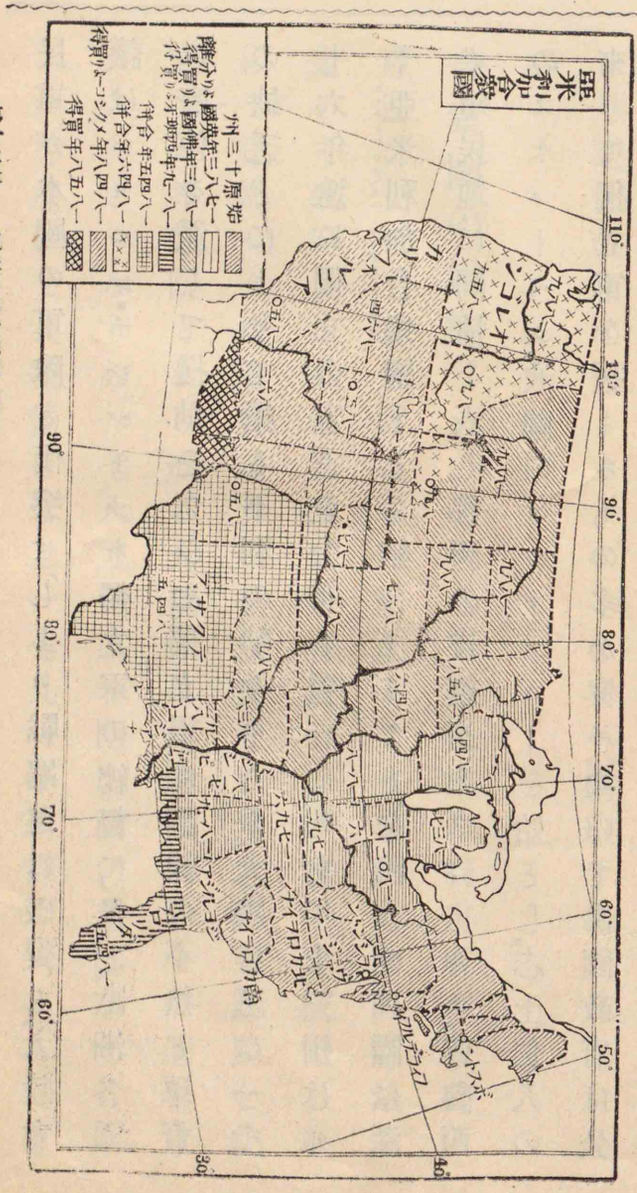
第十二章　亞米利加合衆國の獨立

殖民地の反抗

七年戰爭以後英國政府の歲出入平衡を失するに至りしかば、國會は代表者を出さざる殖民地にも課稅する權ありとて、一七六五年印紙條例（スタムアクト）を通過し、之を亞米利加に行はんとせり。然るに亞米利加各州の人民は之を米國民固有の權利を犯すものなりとして納稅を拒みしかば、此の條例は一たび廢止せられしも、政府は更に新稅を課し、軍隊を派遣して之を强行せんとするに及び、殖民地は益之に反抗し、互に約して課稅品の供給を本國に仰がずと定めたり。是に於いて政府は益兵力を以つて之を鎭定せんとしければ、殖民地は一七七四年大陸會議（コンチネンタル、コングレス）をフィラデルフィアに開きて殖民地の自治權を得るまでは本國との通商を中止する旨を決せり。

獨立戰爭

其の翌年に至りてマサチューセットの市



Washington (wosh'ington)
United States (ūnīt dstāts)
Lafayett (läfāyet')
Steuben (stū'ben)
Kosiusco (kos-i-us'kō)

民軍が本國の軍隊と衝突せしより戰端遂に破裂し、大陸會議はジョルジ・ヲシントンを獨立軍の總督に推し、歐洲各國に密使を派して援助を乞ひぬ。獨立軍は訓練の不熟と軍資の缺乏とによりて頗る不利の勢なりしが、大陸會議は一七七六年遂に獨立の宣言を公布し、翌一七七七年十三州は永く亞米利加合衆國（ユーナイテッド・スティーツ・オブ・アメリカ）として結合することを決せり。列國は深く殖民地に同情を表し、佛國の貴族ラーフェート、普魯西のスチューベン、波蘭のコシアスコーを始とし、志士仁人の來りて獨立軍を援くるもの多かりき。次いで佛國政府は公然其の獨立を承認し、西班牙と共に三國同盟を結びて英國と開戰せり。英國は又た獨乙諸侯國より雇兵を募りて亞米利加に送り、又た亞米利加と通商を營める和蘭に向つて開

Versailles (vėr'sā'z)
Tobago (tō-bā'gō)

戰を布告せり。然るに其の軍のヨークタウンに大敗せしより英國の意氣大に挫け、一七八三年パリスに國際談判を開き、尋てヴァーセールスに平和條約を結びて合衆國の獨立を承認し、佛國にターバーゴーを與へ、西班牙にフロリダ及びミノルカを與へぬ。

合衆國の組織

一七八七年新憲法の制定成りぬ。此の憲法によりて合衆國は聯邦組織となり、各州自由の憲法を定めて政府及び議會を設け、中央政府は國會と大統領とを以て組織せられ、國會は各州を代表せる元老院と人民を代表する衆議院とより成り、大統領は複選法に依りて選擧すべきことゝなりぬ。一七八九年第一回の國會を開きヲシントンを選びて大統領となし、一七九一年新都ヲシントンを

Federalist
Antifederalist

經營して政府の所在となせり、國會にては此の後合衆黨(フエデラリスト)及び非合衆黨(アンチフエデラリスト)の両政黨起り互に其の政見を異にせり。

National Assembly

Turgot (türgō')
Necker (nek'ér)
Calonne (kälon')

第三期　佛國革命時代(一七八九——一八一五)

第十三章　佛蘭西革命及び當時の列國

財政の困難　ルーイス十六世の代に至りて佛蘭西財政の困難は益甚くなりしかば、チュールゴー、ネッカー、カーロン等相尋いで擧げられ財政の改革を謀りしかども常に貴族僧侶の妨害に逢ひて成功せざりき。

國民議會　是に於いてネッカー再び登用せられ、王は其の議によりて一六一四年以來開會せられざりし國會を召集したり。一七八九年國會はヴァーセールスに召集せられしが、國會の組織について平民(第三級)と貴族僧侶との議合はず、平民の代議士は獨り集りて自ら國民議會(ナシヨナル、アツセムブリ)と稱し、貴

Bastille (bastēl′)　Mirabeau (mērä-bō′)
Constituent Assembly

族たるミーラーボー、ラフェーエト及び僧侶の一部も之に加はり、憲法を制定せざれば解散せずと公言せしかば、王は已むことを得ず貴族僧侶をして參會せしめたり。之を立憲會議（コンスチチューエント、アッセムブリー）と稱す。

バスチールの破壞　然るに王のネッカーを罷め軍隊を召集するに及んでパリスの市民大に激昂し、暴民蜂起してバスチール獄を破壞せり。此の騷擾は王の慰諭と護國軍の力とによりて鎭撫せられしが、之より暴動は各地方に起り、貴族は續々外國に出奔したり。

憲法の制定　其の後貴族僧侶は議會に於いて自ら其の特權を拋棄する旨を公言し、議會は「人權の宣言」を發布し、一七九〇年に及んで新憲法の草案成り、翌一七九一年に至

Girond (jirond′)
Feuillant (fëyon′)
Bailly (läyē′)

Club
Jacobin (jak′obin)
Robespierre (rōbesp-yār′)
Cordelier
Marat (märä′)
Danton (danton′)

りて公布せられぬ。茲に於いて貴族僧侶の特權は廢せられ、寺領は沒收せられ、地方區劃は改まりて自治の制設けられたり。

クラッブ　此の時パリスには共和主義なるジャコビン（ローベスピエール之が首領たり）及びコルデリール（マーラー、ダントン等之を率ゆ）立憲王政主義なるフューヨン（ラーフェーエト、バイー等之を率ゆ）の三クラッブありて政界の原動力となれり。

立法議會　王は過激黨の勢力次第に增加するを見、密に墺國に逃れんとせしが途にて捕へられ、これが爲に却つて過激黨の勢威を加へたり。この時新憲法によりて立法議會新に召集せられ、右方にフューヨン黨員及び其の他の立憲王政派あり、左方にジロンド黨（温和共和黨）及び山岳黨（ジャコビン、コ

Tuileries (twe-le-riz)

ルデリール兩黨員より成る過激共和黨）ありしが、立憲黨の勢力は甚だ微弱なりき。

外戰　普王フレデリック・ヰリヤム二世は墺のリーオポールド二世と共に兵を出して佛國の共和黨を鎮撫せんと謀りしかば、一七九二年政府はジロンド黨に要せられ之に向つて開戰を布告せしに、戰多く利あらずして人心動亂し、パリスの暴民トヰーレリスの王宮に亂入し、議會は王を幽閉したり。

共和政治　是に於いて憲法は自ら停止せられ、國民は更に國民集會を開いて時局を處せんとしたり。この時山岳黨は立憲王政の主義を抱くもの千餘人を殺戮し、共和黨の議員を以つて國民集會を占領せしかば、集會は劈頭先づ王政を廢して共和政治となすを議決し、次いで國王を審問して有罪なりとし、一七九三年之を死刑に處せり。此の間佛軍は次第に利を得て敵國に侵入せり。

波蘭の滅亡　此の時に當り波蘭にては憲法を定め國會を設け大に國權の回復を圖りしが、露王カザリン二世は巧に其の内部に干渉し普と共にジャコビン主義の鎮定を名として茲に兵を出し、一七九三年第二回の分割を爲せり。是に於いてコシアスコー等の志士は憤然として起ち、佛人の援助によりて一度は露軍を追ひしが、事遂に利あらず、一七九五年露、墺、普の三國は第三回の分割をなして全く波蘭を滅しぬ。

第一回列國同盟　この時英國に於いては國民概ね佛國革命に心醉し、人心頗る動搖の兆ありしかば、首相ピット

は其の源を清むるの必要を感じ、西蘭二國と共に普墺の軍に加はれり。

恐怖時代（レーン、オヴ、テロル）（一七九三年六月、一七九四年七月）　この時佛國の内部にては山岳黨暴力を以つてジロンド黨を國民集會より放逐し、新に革命裁判所及び公安委員を設けて政權を悉く其の掌中に握りしが、同盟軍は次第に國内に侵入し、勤王黨及びジロンド黨は各地に兵を擧げ、人心恟々たりしかば、公安委員會は乃ち國民の全力を盡して敵を防がしめ、又た委員を各地に派して其の政敵を禁囚殺戮せしめ、遂に故王の后をも殺すに至れり。而して其の空想を實現せんとするの甚しき、共和曆を制定し、共和政治建設の日（一七九二年九月廿二日）を以つて第一年の一月一日となし、基督教を廢して道理の崇拜を命ずるに

至れり。然るに一七九四年ローベスピエールがダントンの一派をも殺して獨り全權を握り、放恣横暴益甚しきを見、國民集會は遂にローベスピエール及び其の黨與を死刑に處し、次いで革命裁判所を廢止し、政治上の囚人を解放せり。

都督政治（ディレクトリ）　是に於いて國民集會はジロンド黨員を復席せしめ、一七九五年憲法を改定し、五人の都督（ディレクトル）にて行政の權を統べ、上下兩院を以て立法部を組織することゝしたり、かくて政府は武力を以つて自ら守り、又た人民の集會をなして政治に干與するを禁じたり。外戰は是より先き佛軍次第に勝利を得、和蘭を占領して之をバテーヴィア共和國とし、普よりはライン左岸の領土を取りて和を結びたりき。

Napoleon Bonaparte (napō'leon bōn'a-pärt)
Campo Formio (kämpo-for'mē-ō)
Liguria (li-gū'ria)
Helvetia (helvē'shia)

第十四章　ナポーレオン一世及び歐洲の大混亂

伊太利攻撃

新政府は大に外征の軍を出して墺國を侵撃せしが、伊太利方面に派遣せられたるナポーレオン、ボーナパールトは一七九六年其の地を蹂躙し、翌一七九七年墺國に侵入し、之とカームポー、フォルミーオー條約を締結して和を媾ぜり。此の條約によりて墺領ネザーランドは佛領となり、ヴェニスの大都は墺領となり、其のアイオーニア諸島は佛領となりぬ。此の年佛國はシサルパイン共和國（ミラン、モーデナー等）及びリギューリア共和國（ジエノア）を伊太利に建設し、翌一七九八年羅馬共和國（法王領）及びヘルヴィーシア共和國（瑞西）を建設し、皆な佛國の屬國とせり、

Consulate Government

Hasting (hās'ting)
Hyderabad (hīder-a-bād)
Misore (mī-ōr')
Nelson (nel'son)

埃及征伐

英國が印度に於ける勢力はヘースチングス及びクライヴの經營によりて強盛を致せしかば、佛國はハイダーラバード、マイソール等の諸國と同盟して之に抗せんとしたりき。然るに英の海軍は連に佛國及び其の與國の殖民地を侵略し、喜望峯及び錫蘭等をも占領しければ、ナポーレオンは英國の富源を破る端緒として一七九八年埃及を征服せり。されど其の海軍はネルソンの率ゐたる艦隊に破られしかばシリア及び土耳其の征略は遂行するを得ざりき。

第二回列國同盟及ひ執政政治

この時英國首相ピットは露、墺、土、葡及びネープルスと第二回の同盟を結びて佛國を攻撃せしが一七九九年に至り佛軍到る處に敗れ、

Coupd'etat

人心危惧して政府亦た動搖せしかば、ナポーレオンは突然パリスに歸り、クーデタを行ひて新政府を建設し、自ら十年の任期を以つて執政の筆頭となり、一切の實權を掌握したり。

佛露の連合　ナポーレオンは露帝ポールを說きて同盟を脫せしめしが、ポールは瑞典丁抹と北部同盟を結びて英國に敵せり。ナポーレオンは又たポールと共に印度に兵を出さんことを圖りしが、其の死に逢ひて事を果さざりき。英は印度に於て鋭意勢力の擴張をつとめ、遂に殆ど全く佛國の勢力を破り、又た波斯と防禦同盟を結びて露に備へたり。

墺國及び英國との和議　一八〇〇年ナポーレオンは大に墺軍を破り一八〇一年之とリュネーヴィールの和議を結びてラインの左岸を取り、又たネープルスと和睦し、西班牙よりは亞米利加のルイージアナを得たり。ルイージアナは其の後間もなく北亞米利加合衆國に賣却せられたり。一八〇一年英國は愛蘭を全く合併せしがピットの政策行はれずして辭職せしかば佛は一八〇二年英とアーミーアン條約を以つて和を講じぬ。

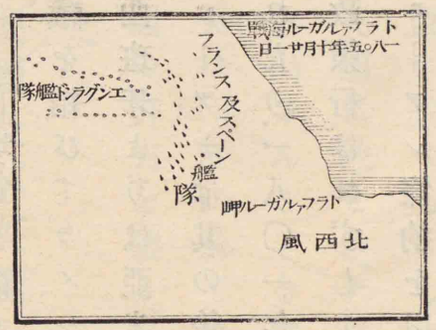
Lunéville (lünāvēl')

內政　かくてナポーレオンは大に內治に意を注ぎ、法典編纂の業を遂げ、敎會を復興し、學術を奬勵し、商工を保護し、權力と威望とを一身に集め、自ら終身の執政となりぬ。彼は又た伊太利共和國の大統領を兼ね、瑞西の保護者となりて其の威列國に輝けり。

Austerlitz (ous′terlits)
Presburg (pres′börg)

皇帝政治　一八〇四年ナポーレオンは遂に皇帝の號を稱し、法王の加冠をうけ、伊太利王をかね、其の子に羅馬王の稱を與へぬ。

第三回列國同盟　是より先き帝は英國を討たんとして先づハノヴァーを占領せしが英國にてはピット再び首相となり、一八〇五年露帝アレグザンダー一世及び墺太利瑞典と共に第三回の同盟を結びしかば、ナポーレオンは海軍を以て英國を衝かんとせしかど、機を失ひしを以つて遂に墺國に侵入し、南方獨乙諸侯の軍を併せて墺露の連合軍をアウステルリッツに破り、墺太利とプレス



Berlin (bĕrlin′)
Tilsit (til′sıt)
Trafalgar (traf-al-gär′)

ブールグ條約を結び、ヴェニス及び伊太利の數地を取りぬ。されど海軍はトラファルガールに於いて大にネルソンに破られ、全く海上の權力を失へり。

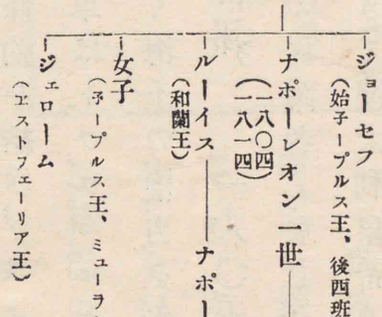
ライン聯邦　一八〇六年獨乙はライン聯邦を結びて佛帝を其の保護者となし、フランシス二世は神聖羅馬皇帝の位を退きて墺太利皇帝と稱しぬ。佛帝は又た其の兄ジョーゼフをネープルス王とし、弟ルーイスを和蘭王（バテーヴィア共和國を改む）となせり。

露、普との戰爭　此の年普王フレデリック・ヰリヤム三世佛國に向つて開戰を布告しければ、帝は直に兵を進めて之を破り、バーリンをも陷れ、一八〇七年再び露普の聯合軍を破り、チルシット條約を以つて兩國と和を講じ、ライン、エ

Wârsaw (wār'sâ)
Continental System

ルベ兩河間の地を取りてエストフェリア王國を建て、皇弟を以つて其の王となし、波蘭の地を取りてヲールソー公國を建てぬ。

大陸制度（コンチネンタル、システム）　一八〇六年帝はバーリンにありて所謂大陸制度の令を發し、列國に向つて英國と通商するを禁じたり。



Kerner (ker'ner)
Stein (stīn)
Hardenberg (här'den-berg)
Fichte (fiĕh'te)
Schelling (shelling)
Hegel (hā'gel)
Arndt (ärnt)

第十五章　各國の國民的反動及び佛國の王政復古

普國の形勢

普國にてはスタイン及びハールデンベルグ相次いで政局に當り、大に內地の改革を圖り、貴族の特權を廢し、耕奴を解放し、地方自治の制を布き、國民皆兵主義を施行し、又た最も國民教育に力を盡し、佛國の拘束を脫して日耳曼の統一を圖る準備をなせり。フィヒテ、シェリング、ヘーゲルの哲學者出で、アールント、ケルネルの詩人出でしは實に此の時なり。

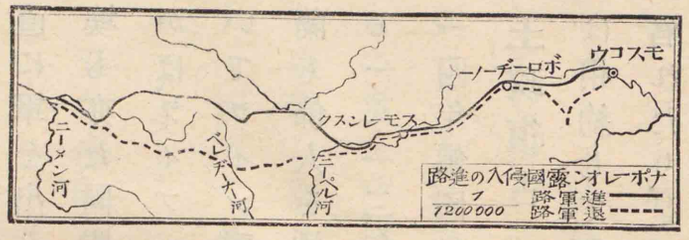
西班牙の國民的抗抵

帝は葡萄牙が大陸制度を奉ぜざるを以つて一八〇七年兵を出して其の王をブラジル

に追ひ、一八〇八年西班牙に兵を進め、其の王を廢しネープルス王を以つて之に代へたり。是に於いて西班牙の國民大に激昂し、英國の援助を得て佛軍を追ひしかば、帝は露國と密約を結びて墺を牽制せしめ、親ら西班牙を討ちて一八〇九年一度び之を壓服せしも、帝の去るや國民直に兵を擧げ英軍亦た勢を增したり。

墺國の奮起　帝が西班牙に赴ける虛に乘じ墺は大に奮起して兵を擧げしが、帝はライン聯邦の軍を併せて直に之を打ち破り、ヴィエナ條約を結びて和を講じ、ダルメーシアをとり、大陸制に加入せしめ、翌年墺帝の妹を娶りて后となせり。

露國征討　露は此の時北方に於いては英の與國瑞典と戰つてフィンランドを割取し（瑞典は此時大陸制に加入す）南方に於いては土國を侵してブルゲーリア地方に及びしが、大陸制度の不利なるを見て遂に英國との貿易を開始せり。是に於いて帝は一八一二年普墺の軍を併せ、大擧して露國に侵入せり。露は急に土及び瑞典と和し之れを防がんとせしが、未だ其の遑あらざるに佛軍は長驅直にモスコウに入れり。然るにモスコウ既に空虛となりしかば佛兵は忽ち饑寒に苦しみ、帝は已むことを得ずして退軍の途に上りしが、途にて露軍の要擊に逢ひ、兵士の大半は死亡し、己は僅に身を以て免れ歸りぬ。



Elba (el'ba)

普國の奮起、同盟軍の勝利　是に於いて普先づ奮起し、一八一三年露及び瑞典と盟約して兵を擧げゝれば、帝は直に軍を出しライン聯邦の兵を率ゐて之を破れり。然るに墺も亦た同盟軍に加はり、英は軍資を送りて之れを助けしかば、ライプシックの役終に同盟軍の勝利となれり。是に於いてライン聯邦は解散し、エストフェーリア王國は滅び、和蘭も佛人を逐ひぬ。西班牙は是より先き英軍の保護により て一八一二年に憲法を制定し、遂にジョーゼフを逐ひ、一八一四年佛國に侵入せり。

王政復古　一八一四年同盟軍は佛蘭西に侵入し、列國は相約して佛國と單獨に和睦せざるを誓ひ、遂にパリスを陷れたり。是に於いて元老院は帝の位を廢してエルバ島に移し、ルーイス十八世同盟軍の力によりて王位に上り、列國とパリス條約を結びて佛國の境界を一七九二年の舊に復し、ネープルスの外各國の君主を復舊せり。

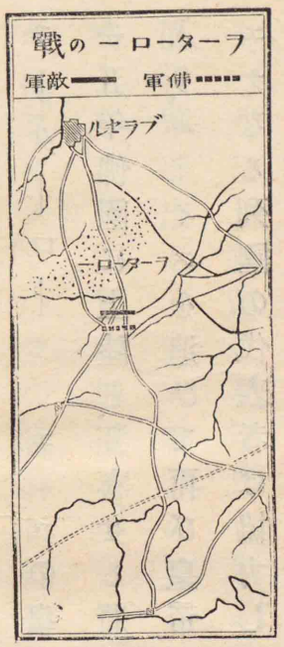
ヴィエナ會議　墺、普、英、露及び佛の五大國は列國領土劃定の爲めにヴィエナに公會を開きしが、波蘭及びサクスニの處置に關し列國の意見合はずして危機將に破れんとしたり。而して佛國の新政府亦た早く既に民望を失へり。

ヲーターロー　エルバの皇帝は此の機に乘じて一八一五年佛國に上陸し、狂喜せる將士に擁せられてパリスに入り、ルーイスを追ひて再び皇帝の位に上りぬ。是に於てヴィエナなる列國の代表者は協力して之を討つに決し、普英の聯合軍はナポーレオンをヲーターローに破り、次いでパリ

Waterloo (wâtèr'lo)

St. Helena (st. hel'ena)
Malta (mâl'ta)
Heligoland (hel'igōland)

スを陷れてルーイスを王位に復し、英軍はナポーレオンを捕へてセントヘレナの孤島に流しぬ。列國は第二回パリス條約に於いて佛蘭西の境域を殆ど一七九〇年の舊に復せり



ヴィエナ會議の結果

墺はミランを回復しヴェニス、イリリア等を得、普はヲールソーの一部、サクスニの大部、ポメレーニア等を得、獨乙は三十九國及び四自由市府を以つて聯邦を組織し、英はモールタ、ヘリゴーランド及び喜望峯を得、アイオーニア共和國の保護者となり、蘭は白耳義に合してネザーランド王國となり、露はヲールソーの大部を得、

Louenburg (lou'en-börg)

瑞典は諾威を併せ、丁抹はロウエンブールグを得、瑞西は聯邦の數を增し、戰亂中に廢せられし各國王は舊位に復せり。是れヴィエナ會議の議定せし大要なり。

Mayer (mi'er)
Darwin (där'win)
Comte (con't)
Spencer spensèr)

第四卷　現世史（一八一五―）

第一章　十九世紀の文明

自由思想及び國民的觀念　佛國革命は自由の思想を列國の國民に注入し、之についで起れるナポーレオンの混亂は自由思想と共に國民的觀念を養ひ、共に現世史に於ける政治上の重要なる動機となれり。

科學　科學の進歩は現世紀に入りて最も著しく、マイエル等の唱へたる勢力不滅説及びダーヰンの唱へたる生物進化説の如きは至大の影響を一般の學術に及ぼせり。而して實驗歸納を重んずる傾向は哲學及び種々の心的科學にも及びてコント、スペンサーの如き學者を出し、文學に於いては自然派又は實際派と稱せらるゝものを生ぜり。

科學の應用及び其の結果　科學の進歩によりて最も大なる變動を社會に與へたるは電氣力及び蒸氣力の應用なり。是れ皆な十八世紀の末より十九世紀の始に至りて實地に使用せられしものにして、其の後日に改良を加へ應用の途を擴め、以つて生産交易の方法より戰鬪の術に至るまで、殆ど其の面目を一新せり。かくて生産の規模廣大となるに從ひ、經濟の狀態も自ら變動して社會問題は次第に識者の注意をひくに至り、從つて社會黨は政治上の重大なる要素となれり。又た交通の機關發達するに從ひ、國際の關係は益〻密接となり、貿易商業益〻發達し、列國共同の事業も日に增加し來りぬ。また東洋諸國との交通發達するに從ひ、西洋

の文明は東洋に傳播し、歐洲列國の勢力は太平洋の波上に相競ふに至れり。而して之と共に東洋の文藝學術も漸く西人の玩味する所となり、東洋の情勢は西洋各國の行動に於いて重大なる要素となれり。

露帝
- ポール一世（一七九六―一八〇一）
  - アレグザンダー一世（一八〇一―一八二五）
    - ニコラス一世（一八二五―一八五五）
      - アレグザンダー二世（一八五五―一八八一）
        - アレグザンダー三世（一八八一―一八九四）
          - ニコラス二世（一八九四）

英王
- ジョージ三世
  - ジョージ四世（一八二〇―一八三〇）
  - キリヤム四世（一八三〇―一八三七）
  - エドワード
    - びくとりあ（一八三七―一九〇一）
      - エドワード七世（一九〇一）

普王及び獨乙皇帝
- フレデリック三世
  - キリアム（一八四〇―一八六一）
    - キリアム一世（一八六一―一八八八）
      - フレデリック三世（一八八八）
        - キリアム二世（一八八八）
  - フレデリック四世

墺帝
- フランシス一世（一八〇六―一八三五）
  - ファーヂナンド（一八三五―一八四八）
  - フランシス、チャールス
    - フランシス、ジョーセフ一世（一八四八）

佛王
- ルーイス
  - ルーイス十六世
    - ルーイス十八世（一八一四―一八二四）
    - チャールス十世（一八二四―一八三〇）
      - ルーイス、フィリップ（一八三〇―一八四八）
  - ルーイス十七世

Metternich (met'ternich)

第二章　神聖同盟

神聖同盟

一八一五年ナポーレオンの亂平ぐや露帝アレグザンダー、墺帝フランシス、及び普王フレデリック・ヰリヤム三世は上帝の敎を奉じて世界の平和を維持すべしとて三國の間に神聖同盟を結びたり。此の同盟は後に至り法王と英國とを除き歐洲の基督敎國皆な之に加盟し、新しき政治運動を抑壓防止する利器となりしが、其の中心となりしは墺國首相メッテルニヒなりき。されば自由の憲法を得んとし、國民的國家の組織を遂げんとする熱望は至る所に熾なれども、各國政府は勉めて之を抑壓せり。日耳曼聯邦の如きも徒に散漫なる集合たるに止まり、各聯邦の政府は

Karlsbad (kärl'sbäd)
Chili (chil'i)
Argentin (är'jentēn)
Columbia (kolum'bia)
Carbonari (kärbonä'ri)

概ねメッテルニヒの指顧に從ひ、一八一九年のカールスバート會議は聯邦政府をして民論抑壓の方針を執らしむることを約したり。

西班牙及び葡萄牙の革命

西班牙王ファーヂナンド七世が一八一二年の憲法を廢して專制主義を執るや、國民は憤怨して之に反抗し、亞米利加に於いてもチリ、アールゼンチーン及びコルムビアは獨立し、メクシコー、ペルーにも反亂起りしが、一八二〇年本國人民は遂に王に迫りて憲法を復活せしめたり。是に於いて當時英國人に依れる葡萄牙亦た忽ち之に倣ひて英人を追ひ假政府を設立せり。

伊太利各國の革命

伊太利に於いてはカールボナリと稱する秘密結社起り、伊太利の統一と自由の振張とを

Troppau (trop′pou)
Laybach (lī′bach)
Monroe (mun′rō)

畫策せしが、西班牙革命の報達するや、ネープルスの人民先づ起り王に迫りて西班牙憲法を頒布し、シシリ嶋民は假政府を設けて獨立せん事を圖り、サルヂニア、ミラン亦た不穩の兆を示しぬ。

革命の鎭壓　一八二〇年のトロパウ列國會議及び其の翌年のライバッハ列國會議はメッテルニヒの議に從ひ、列國共同して革命運動を鎭壓する約を結び、墺軍先づ伊太利を侵擊して、各地の新政府を破壞し、また一八二二年のヴェロナ列國會議は佛軍をして西班牙を鎭壓せしめたり。葡萄牙も亦た一八二八年に至りて憲法を破毀せられぬ。

マンロー主義　此の時亞米利加に於いてメクシコー及びペルーは獨立し、ブラジル亦た本國より分離せしかば、

Hetaireiai
Ypsilanti (ipsilan′ti)

神聖同盟は之をも抑壓せんとせしが、英國の同意なきため事ならざりき。合衆國大統領マンロー此の形勢を見、一八二三年の教書に於いて歐洲列國の亞米利加に干涉するは合衆國に敵意を表するものなりといひ、亞米利加の事は他國の容喙を許さずと宣言せり。所謂マンロー主義なり。

第三章　希臘の獨立

希臘の奮起　この時に當り希臘人も亦た獨立の兵を擧げたり。一八二一年ヘタイレーアイの會頭イプシランチ先づモルデーヴィアに事を起しゝが、之に次いで起れるモリーアの叛亂は忽ち全國を動かし、希臘人は遂に獨立の旗を擧げ、假政府をたて、國會を開き、其の軍は着々土軍を破れ

Ibrahim (ibrä-hēm)
Nicholas (nik'olas)
Canning (kan'ing)

り。ヴェロナ列國會議は之を目するに一種の革命運動を以てせしが、列國の有志者は軍資兵器を送つて之を助け、獨立軍の勢日に振ひしかば、土國政府は埃及副王の子イブラーヒームに之が鎮壓を命じ、イブラーヒームは一八二五年大擧來攻して殆ど全土を征服したり。

英露の態度　英國にては一八二二年よりカンニング外交の衝に當りて大に神聖同盟の主義に抗敵したりしが、一八二五年露帝アレグザンダー歿してニコラス一世位を嗣ぎ、先帝の政策を改めしかば、是に至り英露の二國相謀り、佛國と共にロンドンに會議を開きて希臘の自治を保護すべきを約し、一八二七年三國の聯合艦隊はナーヴァーリーノーにて土耳其埃及の軍を破れり。然るに其の後露軍深く

土耳其に侵入し、遂にアドリアノープルを陷れ、將に首都に迫らんとする勢ありしかば、列國はこゝに媾和會議を開き、露國は黑海東岸の要所を得、モルデーヴィア、ヲレーキアに於ける保護權を擴張し、土耳其はロンドン條約を承認せり。

希臘の獨立　一八三〇年三國は希臘の獨立を承認せしが、是より先き選立せられたる大統領は民望を失ひて殺されしかば、一八三二年バヴェーリアの公子オーソーを王となし、翌年都をアゼンスに移しぬ。

第四章　七月革命及び其の影響

佛國の狀態　王政復古以後、佛國には極端王政黨、自由黨、共和黨、ボーナパールト黨等の諸政黨ありしが、政府は極

端王政黨の手になりて專制抑壓の政を施し、一八二四年シャールス十世即位の後は益其の暴威を逞くしければ、いたく民望を失ひて一八三〇年の總選擧には失敗を招き、自由黨に多數を占領せられたり。

七月革命　是に於いて王は恣に改選を命じ、言論を束縛し武力に訴へて之を執行せんとせしかば、民論大に激昂し、パリスの市民は兵力によりて政府を顚覆せり。下等社會及び共和黨はこの時直に共和政治を建設せんとせしが、中等社會を根據とせる自由黨の多數を有せる國會はオルレーアン侯ルーイス・フィリップを迎へて王となし、憲法を修正して民權を鞏固にせり。之を七月革命といふ。

白耳義の獨立　七月革命の報ネザーランドに傳はるや、和蘭政府の壓制に不平を懷ける白耳義地方の民忽ち之に應じ、各地皆な叛旗を擧げて和蘭の官吏を放逐し、國民議會を開きて獨立を宣言せり。翌年英佛二國のロンドン會議は白耳義の獨立を承認し、白耳義はサクス・コーバーグ公子リーオポールドを迎へて王となしぬ。

波蘭の叛亂　波蘭は露西亞の屬國として特別の政治を受けたりしが、人民は古王國回復の念をたゝず、七月革命の報に接するや、私に佛人の援助を期待して兵を擧げ、露軍を放逐して假政府を設け波蘭の獨立を宣言せしも、國民の團結鞏固ならざりしかば、露軍の一擊にあひて忽ち敗れたり。これより露國は波蘭の特別政治を廢し、教育及び宗教の力を以つて其の國性を消滅せしめんことをつとめたり。

Saxe-Coburg (saks-ko'bêrg)

Custom (Union)
Carlos (cär'los)

獨乙に於ける革命の氣運

北部獨乙の諸國亦た七月革命の影響を受け、二三の侯國は人民の要求を容れて憲法を制定せり。されど多くは尚ほ專制主義の政を行ひしが、一八二八年普國を中心として北部諸國の間に關稅同盟（カストム、ユニオン）締結せられ、獨乙統一の思想先づ經濟上に於いて其の形をあらはすに至れり。

伊太利、瑞西、西班牙の動搖

パールマー、モーデナー、法王國にも一八三一年に革命運動起りしが墺軍の一擊に打碎せられぬ。又た瑞西にても自由主義の運動起り、西班牙にては女王イサベラー自由黨を率ゐ、專制黨に推戴せらるるカールロスを却けて新憲法を發布せり。

O'Connell (ōkon'el)
Chartist

第五章　英露の形勢及び東方問題

英國國會の改革

英國に於いては多年佛國と干戈を交へし結果、財政漸く窮迫して國債增加し課稅苛重となり、殊に其の穀物條例は甚だ勞働社會を困窮せしめて工商業の發達を妨害するに至れり。是に於いて國會改革の論、益々はげしく一八三一年ヰリヤム四世の第一次國會に於いて政府は遂に其の改革案を提出し、下院之を通過せしも、上院の否拒する所となりて成らざりしが、翌一八三二年に至り始めて兩院の通過を得たり。一八三七年女王ヰクトリア位につきて後もなほ政論の動搖やまず、オーコンネル等は勞働社會を煽動して劣狀黨（チャーチスト）を結び、一層急激なる國會の改革を

Cobden (kob'den)
Bright (brīt)
Singapore (sing-gapōr')
Aden (äd'en)
Alaska (alas'ka)
Sagalen (sä-gälēn')

主張し、コブデン、ブライト等は非穀物條例同盟を結び、之が廢止を計りしが、穀物條例は一八四六年に至り廢せられたり。

英國の東方經營

英國は印度に於いて益其の勢力及び領土を擴張し、更に進みて新嘉坡（シンガポール）を一八二四年に、アーデンを一八三九年に占領し、更に太平洋に出で一八四〇年には支那と戰ひて其の五港を開かしめ香港を割取せり。

露國の東方經營

露國は十七八世紀の交よりカムチャートカ、アラスカをとり、我が千島列島の大部を占領し一八〇四（文化元）年には通商を我が國に求むるに至れり。又た中央亞細亞の方面に向つては十八世紀より次第にキルギス種族を服屬せしめ、一八三九年にはヒーヴァ遠征の軍を

Afghan (af'gan)
Mehemed Ali (mā'hemed ä'lē)
Unkiar-Skelessi (ön'kēar-skā-les'sē)

出すに至りぬ。

アフガンに於ける英露の衝突

一八二七年露軍の波斯を破りてより波斯は露國に依賴し一八三七年其の後援を得てアフガンに侵入せり。この時英國の印度總督はアフガンと同盟せんとして露人に妨げられしかば、軍を出して其の首府カブールを陷れ、其の汗を更迭せしめたり。

埃及問題

一八三一年埃及副王メーヘメッド、アーリーが土領シリアを侵略するや、露は土を助くと稱して兵を其の國に進めしかば英佛二國は一八三三年土に勸めて埃及と和せしめしが、露は別にウーンキーアル・スケーレッシー條約を以つて土と攻守同盟を結びたり。其の後土は再び埃及と戰ひて敗れしかばロンドンに開きし列國會議は埃

及の強梁を抑制せんことを議決し、埃及が其の議に從はざるに及び一八四一年英佛の聯合軍は擊ちて大に之を破れり。露はまた程なくスケーレッシー條約を廢棄せり。

第六章　二月革命及び其の影響

Saint Simon (sansēmon′)
Communism

佛國にては政府の反對黨に共和ルーイス・フィリップ黨ナポーレオン黨及びブールボン黨(極端王政黨)等ありしが、サン・シーモン等が唱へたる共產主義(コムムニスム)に刺激せられて新に社會主義を抱ける極端共和黨なるもの起りたり。是に於いて政府は漸く言論を束縛して此等の運動を抑壓し、また當時の選擧法は財產の制限高くして選出せられたる議員は徒らに政府の盲從者たるに過ぎざりしかば下等社會及び共和黨は益政府を攻擊せり。

Reform Banquet
National Workshop

二月革命　一八四八年二月選擧法改正の爲に計畫せる改正宴會(レフォーム、バンクエット)の擧政府に禁ぜらるゝや人民遂に暴擧して政府を顚覆し、共和黨は假政府をたてゝ共和政治の建設を宣言し、國民工場(ナショナル、ヂーク、シヨップ)を設けて貧民に職業を與へ以つて社會黨の歡心を求めたり。これより幾多の紛擾を經て新政體の基礎漸く成り、ルーイス・ナポーレオン新憲法の定むる所により國民の直接選擧に於いて大統領に當選せり。

南方伊太利の革命運動　法王國及びネープルスに於いては二月革命の前より革命運動起り、共に新憲法を制定せしが、急激黨はなほ不滿を抱きて暴動を起し、シ、リは獨立を計畫せり。

墺國に於ける革命運動　二月革命の報墺國に傳はるや、ヴィエナの學生先づ起つて革命運動を企て勢甚だ猛烈なりしかば、メッテルニヒは逃走し、新内閣は國民議會を召集して憲法の制定を圖れり。匈牙利亦た此の機に乘じ獨立を企てゝ假政府を建て、伊太利の領土に於いても暴動起り、サルヂニア王之を助けて墺國と開戰し、プレーグにも叛亂起れり。

普國に於ける運動　普王フレデリック、ヰリヤム四世はバーリン市民の請願を容れて憲法を發布し、獨乙國民の自由及び統一の首導者たるべしと公言せり。過激黨の暴動はありたれども大事に至らずして鎮定したり。

獨乙國民議會　此の年バーデンの發議により立憲君主々義を以つて獨乙憲法を制定せんがため聯邦議會はフランクフォルトに各邦政府及び人民の代表者を召集して國民議會を開設せり。新議會は聯邦議會を廢し臨時中央政府を設けて墺太利大公ジョンを其の總裁となし、憲法の議事にかゝれり。

墺國暴動の鎮定　墺帝は位を其の甥フランシス・ジョーゼフに讓り、翌年新憲法を制定せしが、匈牙利をば露西亞の援助を得て壓服し、サルヂニア軍をも破りて伊太利を平定し、盡く各地の叛亂を鎮壓せし後新憲法を破棄せり。サルヂニア王は位をヴィクトル、エマニューエルに讓りぬ。

獨乙國民議會の解散　一八四九年國民議會は憲法を議定したれと、新帝國の組織より墺を除かんとして其の

Victor Emmanuel (vik'tor e-manüel)

Erfurt (er′fort)
Schleswig (shles′wig)
Holstein (hol′stāne)

抗議に逢ひ、普王を世襲獨乙皇帝の位に上ぼせんとして拒絶せられ、共和黨は亂を起し、各國は其の代表者を召還するもの多く、國民議會は何の結果をも得ずして解散せり。

普墺の衝突　國民議會の未だ終らざる前、普王は獨乙合衆聯邦を組織して自ら其の牛耳をとらんとし、先づハノヴァー、サクスニと同盟し北方諸邦を糾合して一八五〇年エルフールトに同盟會議を開きしが墺は之を承認せず、國民議會開設前の聯邦會議は依然存立せりとして之を召集し、兩國の平和將に破れんとせしが、露帝の仲裁と普國内部の動搖とにより普も亦た墺の議に服し、一八五一年の列邦會議は舊聯邦政府の回復を承認せり。

シュレスヰッグ、ホルスステーン　此の二州は一八四八年丁抹より分離し獨乙聯邦に加入せんことを求め、假政府をたてゝ丁抹と戰ひしが、英露の干渉により一八五二年丁抹の屬國と定められたり。

羅馬の革命及び復舊　一八四九年マーツィーニー等の計畫により法王國に於いて共和政治の建設宣言せられしが、佛國より軍を送りて法王を助け、ガーリバールヂー等の軍を破りて法王を復歸せしめぬ。かくて南方伊太利も亦た舊態に復したり。

Mazzini (mät-sē′nē)
Garibaldi (gärē-bäl′dē)

第七章　ナポーレオン三世及びクリーミア戰爭

佛國の第二帝政　ナポーレオンは就任以來力を盡し

て人心の收攬を勉めたりしが、一八五一年議會を解散し、大統領の任期を十年と定め、翌一八五二年遂に皇帝の位につきて佛蘭西は第二回の帝國となれり。

クリーミア戰爭

一八五三年露帝は垂死の病人たる土耳其を分割せんとし英國に告ぐるに露はサーヴィア、ボスニア、ブルゲーリア及びチレーキア、モルデーヴィアを獨立せしめてわが保護國とし、又た一時土耳其の都を占領すべく然る上は英の埃及、クリート及びサイプラスを取るを承諾すべしとの意を以てせしが、英は之を拒みたり。露は乃ち土に向つて其の國内に於ける希臘教徒の保護權を要求し、之が擔保としてモルデーヴィア、チレーキアを占領せり。是に於いて英國は土耳其國内に於ける基督教徒の保護權

について露と相爭へる佛國と連合し、二國は一八五四年遂に露に向つて宣戰を布告せり。英佛の聯合軍はクリーミアなるセバストポールを攻撃して頗る苦戰せしが、サルヂニア亦た兵を出して同盟に加はり、一八五五年之を陷れたり。此の時露にてはアレグザンダー二世新に立ち、一八五六年パリス條約に於いて和を媾じ、露は基督教徒の保護權の要求及びモルデーヴィア、チレーキアの保護權を棄て、土は

セバストポル攻圍

Roumania (römā´niə)
Cavour (kavör)

基督及び回々の両教徒に同權を與ふるを約し、又た黑海の公開とこの海に於ける露國船艦の制限とを議決せり。モルデーヴィア、ヲレーキアは一八六一年に至り合併して獨立し、ルーメーニアと稱せり。

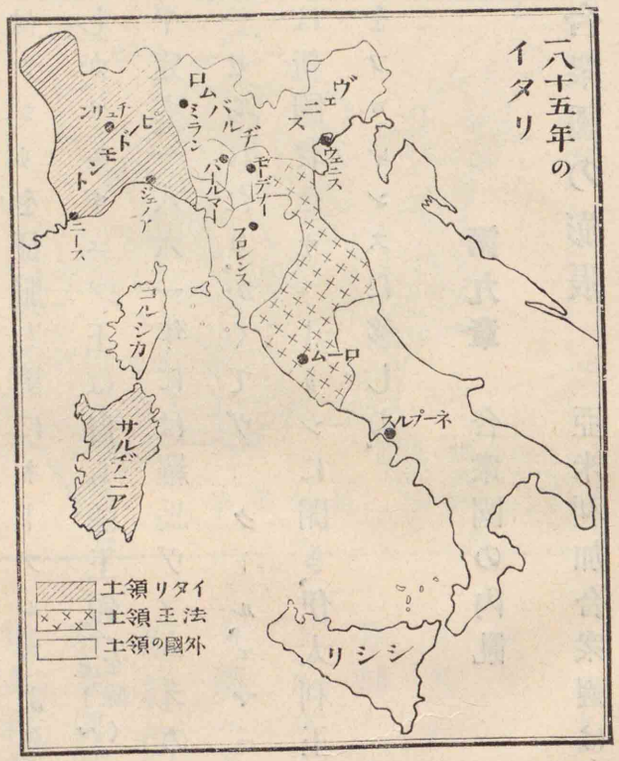
第八章　伊太利の統一

カヴール　サルヂニアにては賢相カヴール政に當りて鋭意内治の改良を勉め、以つて伊太利統一の業を遂げんとし、又たこれがために佛國と密約を結び、普國と親み、伊太利の革命黨ガーリバールヂーの義勇兵とも相結びしが、遂に佛國と聯合して墺に開戰を挑めり。

北部伊太利の合併　一八四九年聯合軍は佛帝の指揮

Nice (nēs)

の下に大勝を得、タスカニ、モーデナー、パールマー及び法王領の一部亦たサルヂニアに連合せしが、佛帝は急に方針を一變し、ロムバルヂ（ヴエニスの外）をサルヂニアに與へ、他の諸國と共に伊太利聯邦を組織せしむることゝして墺帝と和したり。されども伊太利人民皆な之に不滿を抱き、一八六〇年前記の三侯國もサルヂニアに合



し、サルヂニアは其の代りにニース、サヴォイを佛に與へぬ。

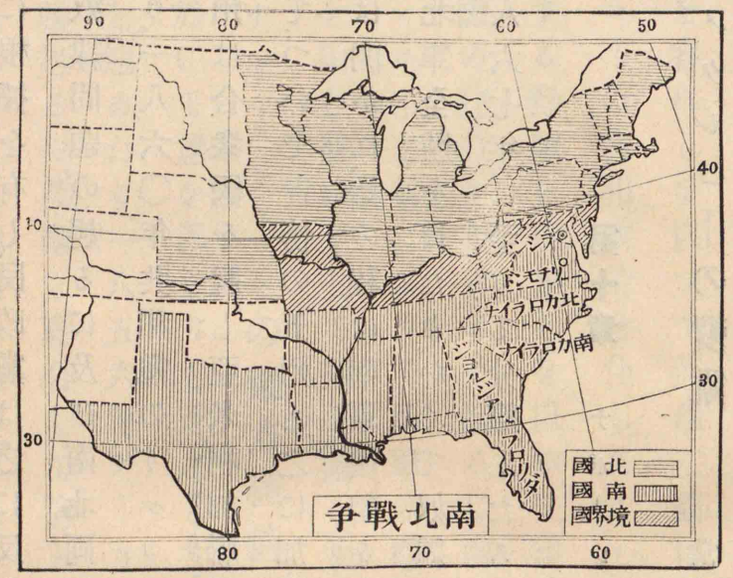
南部伊太利の合併　之と同時にガーリバールヂーはシシリを征服し、更にネープルスより羅馬を陷れんとせしが、サルヂニア王は自ら法王領（ローマを除く）及びネープルスを平定し、一八六一年には羅馬ヴェニスの外伊太利は盡く統一せられたり。かくてヴィクトル、エマニューエル（一八六一―一八七八）は新國會をチューリンに開き、伊太利王の位に即き、翌年都をフロレンスに移しぬ。

Turin (tū'rin)
Texas (tek'sas)

第九章　合衆國の内亂

合衆國の膨張　亞米利加合衆國は其の後フロリダを西班牙より購求し、又たメクシコーに叛きて獨立せるテクサスを合併し、之がためにメクシコーと戰を開きたる結果、ニュー・メクシコー及び上カリフォルニアを得、英國と共にロッキー山以西を分割してオレゴンを得、カドスデンをメクシコーより購へり。

Rocky (rok'ky)
Oregon (or'egon)
Kadosden
Republican
Democrat



奴隷問題及び内亂　合衆國の政界にては其の後共和黨（レパブリカン）及び民政黨（デモクラッ）の二大政黨を生じて互に相爭ひ、共和黨は主として北部

Lincoln (ling'kon)
Confederate State of America
Grant (grant)

に根據を有し、民政黨は之に反して南部に勢力を有せしが、奴隷問題の起るに及び南北両地方の間に大破裂を來したり。一八六〇年共和黨のリンコルン大統領となるや、南部六州は合衆國を脱し亞米利加聯邦（コンフエデレート、ステート、オブ、アメリカ）の名を以つて假政府をたて、ついで近傍の五州も之に加盟せり。かくて所謂南北戰爭は開かれ、始の程は南軍優勢を占めしも、一八六五年に至り北軍全勝を得たり。かくて奴隷を解放し、之に公權を與へ、一八六七年に至りて分離したる諸州を復歸せしめたり。

第十章　ナポーレオン三世の海外經營

メクシコーの變亂

當時メクシコーに内亂ありて在留歐人之が爲めに損害を蒙りしかば、英佛及び西班牙は

一八六一年聯合遠征軍を出せしが、メクシコーは其の要求を容れしを以つて英西二國は軍を旋しゝも、佛帝はメクシコーの共和政治を仆してこゝに羅甸的帝國を建設せんとする野望を抱きしを以つて益兵を送り、一八六三年遂に帝國の建設を布告せり。然るに南北戰爭の平ぐや合衆國はムンロー主義によりて佛軍の撤去を要求しければ、佛帝も之を拒む能はずして兵を撤し、共和國は復興せられたり。

ナポーレオンの東方經營

佛帝はかく亞米利加に於いて意を得ざりしが、之と共に東方に於いて國威の振張を勉めたり。一八五六年アーロー號事件により英、清間に葛藤起るや、英國と聯合して清と開戰し、一八六〇年露國の仲裁によりて和議を結び、又た一八五九年安南と開戰し、一八

Bismark (biz'mark)
Loueuburg (lou'engbörg)

六二年柴棍地方をとりしが、一八六七年に至り盡く交趾支那をとりぬ。又た我が國幕末の際に當り幕府に力を假してなす所あらんとせしことありき。

第十一章　普墺戰爭

シュレスヰッグ、ホルステーン問題　一八六一年普王ヰリヤム一世即位し、翌年ビスマルク首相となりて軍隊の擴張に全力を盡し、以つて獨乙帝國建設の素志を貫かんとせり。一八六三年丁抹が此の二州を合併したる憲法を裁可するや、獨乙聯邦議會は兵を出してホルステーン、ロウエンブルグを占領せしが、普墺の聯合軍は更にシュレスヰッグを占領し、進んで全半島を征服しければ、丁抹は力屈して此の三州を抛棄したり。されど此の善後策に關して普墺の間に爭論起り、一八六五年普はシュレスヰッグを、墺はホルステーンを假に管する事とし、又た普はロウエンブルグを購ひて僅に事を收めたり。

普墺の衝突　普墺の二國は到底衝突の免るべからざるを知り各戰備を修めしが、一八六六年普がホルステーンに於ける墺の處置を不法なりとして之を占領するに及び、遂に戰端を開くに至れり。この時佛國にてはライン左岸回復の熱望熾なるを以つて、ナポーレオンは此の機に乘じ兩國の間に周旋して私に漁夫の利を收めんと圖りしが事成らざりき。戰起るや北部諸小部は普に與し、ハノヴァー、サクスニ及び南部諸邦は墺に與せしが、普軍到る處に勝を得し

かば、墺は遂に和を乞ひプレーグにて和約を結べり。此の條約によりて墺は獨乙聯邦を脱し、普は自ら首領となりて獨乙の新組織をなすの權あるを認められ、且つシュレスヰッグ、ホルステーンを取れり。これより普は墺に與したる數邦を併呑し、又新に北部獨乙聯邦を組織して其盟主となり、一八六七年其の第一議會を開きしが、南部各邦とも攻守同盟を結び、普王は日耳曼各邦兵馬の權を委任せられたり。又た墺は此の年新憲法を發布し、匈牙利には特別の憲法制定を許したり。

墺伊の關係　伊太利は普墺戰爭の際普に與し、プレーグ條約に於いてヴェニスを合併するを得たり。その後ガーリバールヂーは政府の默諾を經て再び羅馬を襲ひしが、又

Luxembarg (luk′sem-bèrg)
Hohenzollern Sigmaringen (ho-en-tsol-lern zig′maringen)

た佛軍の爲に擊退せられぬ。

第十二章　普佛戰爭

佛帝の失意　佛蘭西にてはライン左岸回復の念一日も已まざるを以つて普墺の和成るやナポーレオンは普王に向ひて其の讓與を要求せしも成らず、和蘭よりルクセムバーグを購求せんとして又た普の異議に逢ひぬ。然るに帝が曾つて保護したる西班牙女王イザベラーの國人に追はれ、ホーエンツォルレルン・ジグマリゲン公リーオポールド迎立せらるゝに及び、佛帝は普王に向ひ其の退位を勸告せられんことを要求せしも聽かれず、リーオポールドの自ら位を辭するに及び此の事に關する証言を求めて又た拒絶

せられ、遂に普に向つて開戰を布告せり。時に一八七〇年なり。

兩國の狀態　普はこれより先きパリス條約の變更を條件として露と密約を結びたりき。また獨乙國民はアールザース、ロレーンの統一を希望し、南部諸邦も普に同情を表したり。佛帝は私に南部諸邦の普に從はざるを信じ、又た墺伊二國との同盟をも期したりき。

佛の不利、帝政の顚覆　兩國は君主自ら元帥となりて、各兵を國境に進めしが、佛軍利あらずしてセダンの圍に帝は出でゝ降りぬ。此の報パリスに達するや帝政は直に廢せられて共和政治の建設布告せられたり。新政府は和議を求めしが成らず、普軍は長驅してパリスを圍みぬ。ガンベッタ等ツールに於て兵を募りパリスを援けんとせしも、敵軍の破る所となり、パリスの突擊も其効を奏せず、翌年に至りアールザース及びロレーンの一部と巨額の償金とを普魯西に與ふるを約して事始めて平ぎぬ。

新獨乙帝國　この戰爭の間に於いて獨乙聯邦帝國の新組織成り、一八七一年一月普王はヴァーセールス王宮にて獨乙皇帝の號を受けたり。戰やみて後召集せられし帝國の第一議會は帝國憲法を議定し、普王を世襲日耳曼皇帝となすを決せり。又たアールザース、ロレーンには特別の政治を施し、獨乙的教育を厲行して國性の同化を圖れり。

第二佛國共和政治　平和條約締結後パリスにては社會黨の暴動起りしが、政府はパリスを包圍し激戰の後之

を平げたり。議會に於いてはブールボン黨、オルレーオン黨、ナポーレオン黨、及び共和黨の諸政黨あり、憲法は一八七五年に制定せられぬ。

伊太利　普佛戰爭の間に伊太利は羅馬を占領し、一八七一年王國の首府をこゝに移し、始めて伊太利の統一を完うせり。

第十三章　英國の內政及び其の東方の版圖

愛蘭問題　愛蘭の舊教徒は一八二八年に議員に選擧せらるゝ權を得たりといへども宗教及び耕地の問題に關し、英國政府に對して抱ける不滿は益甚しく、獨立を圖らんとするものさへあるに至れり。是に於いてグラッドストー

ンの首相たる政府は一八六九年に寺院廢止令を公布し、一八七〇年に土地法を公布せしも、なほ愛蘭人の不平を和ぐる能はずして愛蘭自治黨の組織せらるゝに至れり。

印度の領土　一八四〇年の前後に於いて英國は概ね印度の各邦を併呑し、漸次本國の文物を輸入して印度固有の弊風を除去するを勉めしが、印度人が英人排斥の念は却つて次第に勃興し來り、一八五七年に至り各地の雇兵一時に蜂起して叛旗を擧げたり。されど間もなく鎭壓せられ、此の事に與りたるムーガル帝の裔孫は全く其の尊號を奪はれぬ。一八五八年英國政府は印度の政權を印度會社より收め、一八七七年ヴィクトーリアは印度女帝の號を稱しぬ。

埃及問題　一八六九年スエーズ運河の開鑿成就した

り。英國は始め此の事業に不同意なりしが是に於いて埃及の財政困難なるに乘じ、其の所有せる運河會社の株券を購求し、之と共に財政整理の爲め國人を派して埃及政府の顧問官たらしめぬ。然るに佛蘭西の之を喜ばざるを見て更に兩國の委員をして財政を管理せしむることゝなしぬ。

第十四章　露國の內政及び其の亞細亞の經營

露國の狀態

一八七〇年露國は列國に通告してパリス條約中の一項、黑海に於ける艦船の制限を守らざるべしといひ、其の承認を得たり。是より先き露帝は先帝の抑壓主義を一變して內政の改良を勉めしが、一八六三年波蘭の叛亂に對しては頗る苛酷なる方法を以て之を鎭定し、其の民

性を滅却し去らんことを勉めたり。所謂スラヴ一統論（パンスラヴオニズム）は實に當時の輿論たりしなり。

中央亞細亞の征服

露は中央亞細亞の諸汗國を征服せんためアラル海及び西比利亞の方面より兵を進め、一八五〇年頃よりホーカンドの領內に侵入し、一八六八年の條約に於いて其の一部を割取せり。又たボーカラの地の一部をとりて其の餘を保護國となし、一八七三年ヒーヴアよりアム河の右岸を取りて其の國を屬國となし、一八七六年遂にホーカンドを滅しぬ。又た一八七一年伊犁の內亂に乘じ、其の地を占領して淸國との葛藤を開きしが、後之を還付するに至れり。

滿洲地方の割取

太平洋沿岸に於いては一八四〇

Panslavonism
Aral (ar'al)

年頃より連に黑龍江地方の經營を勉め、一八五八年愛琿條約に於いて清國より黑龍江の左岸を讓與せられたりしが、一八六〇年英國との間に仲裁をなしゝ報酬として更に烏蘇江の右岸を得たり。露艦の我が對島に據り英國の勸告に從ひて退去せしは其の翌(文久元)年なりき。又た一八七五(明治八)年に至り千島交換を名として樺太を我が國より得たり。

第十五章　露土戰爭

土耳其の內亂

一八七五年土耳其に於いてボスニア、ヘルツェゴーヴィーナ兩州叛旗を擧げ、サーヴィア、モーンテネーグロー亦た之に應じければ露は獨墺と共に之が調停と土耳其內政改革の要求とに關して議する所あり、また之を他の列國に謀りしに、英國は之に應ぜず却つて土に向ひ列國の要求を却けて獨り速に內亂を鎭定せよと忠告したり。ついでブルゲーリアにも叛亂起りしが、土は之に對し殘酷なる處置をなしぬ。是に於いて英國は列國と共に和睦及び改革の案件を議定し一八七七年最後の要求をなしゝが、土は之を拒絕し又た露が列國の同意を得て提出せる案件をも拒絕しければ、遂に露土の間に戰爭破裂せり。

露土戰爭

一八七八年露軍は深く土の內地に侵入し、之と共にイーパイラス、セッサリ等にも叛亂起り、土の國運甚だ危殆に陷りぬ。ヂスレーリの首相たる英國政府は開戰の始より海陸の軍を地中海に集め、是に至り仲裁を申込み

Disraeli

しが露は之を拒絶せり。是に於いて英露の平和將に破裂せんとする狀を呈しければ、露は急に土とサーン・ステファーノー條約を結びたり。然るに其の條項は大に露の勢力を東歐に增加するものなるを以つて、英は之に異議を挾み事局決定の爲め列國會議の開設を要求し、露も亦た之に同意してバーリンに會議を開けり。

バーリン會議　其の結果はモーンテネーグロー、サーヴィア、ルーマニアを獨立國となし、ブルゲーリアを土の屬國とし、其の南部を割き東ルーミーリアの名を以つて別に土國內の自治州となし、基督教を奉ずる大守をして管治せしめ、イーバイラス、セッサリを希臘に與へ、ボスニア、ヘルツェゴーヴィーナは墺をして統治せしめ、土國內に於ける兩教徒に政治上の同權を與ふべしと決定せられぬ。而して英は是より先き亞細亞に於いて露を防ぐべしとの條件を以てサイプラスを得たりき。

第十六章　最近の現象

三國同盟及ひ露佛同盟　露はバーリン會議の後深く獨乙の反覆を憤るに至りしかば、獨乙は之に當らんが爲め墺と防禦同盟を結びしが、一八八一年佛がチューニスを征して之を保護國となすに當り獨乙は又た伊を招き、一八八三年獨墺以の三國同盟を組織したり。英は暗にこの三國

Arabi Pasha (ärä'bē pash'a)

同盟を助くる意ありしが如し。又た佛がアールザース、ロレーン回復の志望は隱約の間に露佛の結合を催すに至れり。

バルカン半島　希臘はバーリン條約の規定あるに關せず、幾多の紛擾を經て僅にセッサリを得たり。ブルゲーリアはヘス公子アレグザンダー（露后の親戚）を國王に戴きしが、一八八六年東ルーミーリアと合併し、新にサクスニ侯ファーディナンドを迎立せり。土の内政は依然として改革する所なく、近年に至りてアールミーニア及びクリートの叛亂を生ずるに至れり。

埃及　埃及に於ける英佛人の勢力は其の後益增加し來りしかば國人の之に不平を抱くもの多く、一八八一年アーラービー・パシヤ等遂に兵を擧げて副王に逼り、外人を斥けて新政府を組織せしかば、翌年英は獨り軍を出し之を鎭定し、これより埃及に於ける佛國の勢力消滅して此の國は事實上英國の保護國となれり。

英國の狀態幷に其の東洋の經略　英國に於ては愛蘭問題なほ決局を見るに至らず、改進黨は愛蘭の自治を主張すれども保守黨は常に之に反對し、改進黨中の一派は之が爲めに分離して一致派（ユニオニスト）と稱し保守黨と結合して改進黨と相爭ふに至れり。これ實に英國政治史上の一大變化なり。印度の經略は益々度をすゝめ、緬甸より暹羅の西部を征服し、又た亞米利加に於いてはカナダ横貫鐵道を敷設したり。

露國の狀態及び其の亞細亞の經營　アレグザン

Vladivostok (vlādēvostok)

ダー二世が施したる内治の改革は急激黨の不滿を平ぐる能はず、バーリン會議の後に政府に反對するもの益多く、一八七八年には所謂虚無黨なるもの組織せらるゝに至れり。政府は是より苛酷なる方法を以つて之が抑壓を勉めしが、黨員の運動は却つて激烈となり、一八八一年帝は之が爲に弑せられたり。アレグザンダー三世位に即きて後も運動は毫も滅するところあらず、政府は民間の革命思想を鎮壓せんとして人文の開發をさへ抑制せんとするが如き觀あり。さて其の亞細亞に於ける經營は益歩を進めたり。太平洋岸には既にヴラーヂーヴォストックを建てたりしが、一八八四年には朝鮮と通商條約を結び、一八九〇年には西比利亞鐵道敷設の議を決定せり。一八九四年帝歿して、ニコラス二

Pamir (pamēr')

世位に上れり。

中央亞細亞に於ける英露の衝突

英國は露國が中央亞細亞より南下し來るを防がんとてアフガンと防禦同盟を結びしが、後其の國を中立地となさんとし露の同意を得しも、境界に關し議合はずして事行はれざりき。一八七八年アフガンが露を恃みて英に敵意を示せしより、英は屢兵を動かして遂にアフガンを服從せしめぬ。然るに露が益南侵し來るに及び、アフガンとの境界に關して英露の議久しく決せず、一八八五年兩國の戰端將に開かれんとせしかば、英は朝鮮近海にある巨文島を占領し、露を牽制するに至りしが幸に平和を破るに至らざりき。其の西北の境界は二年の後決せられ、東北パミールの境界は一八九五年に至り

英露清三國の間に決定せられぬ巨文島は清及び朝鮮の異議により露が朝鮮に干渉せざる誓約を得て一八八七年其の占領を撤去せり。

獨乙の狀態　獨乙にてはビスマルク首相として新帝國の經營に力を盡せしが、この間には社會黨に對する政策と「人文戰爭」と名つけらるゝ舊教に對する改革とは其の殊に著しきものなり。ヰリヤム一世は一八八八年に歿し、フレデリック三世又た同年に歿して今帝ヰリヤム二世位に上りしが、ビスマルクはこの後退隱したり。

伊墺の狀態　伊は過度に軍備を擴張したる結果、財政の困難國力の萎靡となり、爲に內政の紛擾を釀すに至り、墺も亦た僅に平和を保ちて異人種間の隙裂を彌縫するに過ぎず。

Cambodia (kambō'dia)
Alaska

佛國の狀態　佛國に於いて內政の累をなすものは、他國と同じく主として社會黨及び舊教の勢力なり。右黨と稱せらるゝ內には王政黨、ボーナパールト黨等なほ存すれども共和政治の基礎を動かす力なきが如し。東洋に於ては一八八三年安南を破りて之を保護國となし、之が爲めに清國と戰を生じ、一八八五年の北京條約に於いて東京の佛領たるを承認せしめ、又たカムボーヂアをも保護國となし、西隣なる暹羅の地をも分取したり。

合衆國の狀態　合衆國は獨り歐洲に於ける國際的競爭の外に超在して、益々產業の發達を勉め、太平洋の沿岸地方はこの間に長足の進步をなせり。露國よりアラスカを購

Perry
Nicaragua
Panama
Cuba

ひしは一八六七年にして、一八五三(嘉永六)年には提督ペリを遣はして我が國を開かしめ、爾來我が國の最も親和する所となれり。

中央亞米利加及び南米諸國の狀態　中央亞米利加及び南米諸國が西班牙及び葡萄牙より獨立して後、其の領土に多少の變遷あり其の治體に二三の動搖ありしも、今は皆な共和國となりて次第に發達の運に向へり。之を通觀して注意すべきは合衆國の勢力漸く其の間に浸潤する傾向あることにして、ニカラグァ若しくはパナマ運河開鑿の計畫と共に中央亞米利加殊に其の影響を蒙れるが如し。西班牙が古代の遺物として有せしキューバも一八九七年獨立の軍を起し、合衆國之に干渉して遂に西米間の戰爭となり、西軍大に破れて翌年キューバは假に合衆國の管治に歸せしが、一九〇二年之をして獨立共和國たらしめたり。

Borneo (bor′neō)
New Guinea (nū gin′i)
Hawai

太洋洲諸島嶼の占領　十九世紀の後半に至り歐洲各國は爭つて未開の地を占領せんと企てしが、今先づ其の太洋洲に於けるものをいはんに、英國はこの世紀の始めより次第に開發し來れる濠洲殖民地の外、新に一八四六年にボルネオの一部、一八七四年にフィジー群島、一八八三年に、ニューギニヤの一部を占領し、其の他南太平洋中の島嶼過半はその領となれり。獨乙も一八八四年にヰルヘルムランド及びビスマルク群島を占領し、佛國もニューカレドニヤをとり、米國は一八九七年に布哇を合併し、其の翌年フィリッピン群島を西班牙よりとれり。

Congo
Boers
Transvaal

亞弗利加の占領

十九世紀の前半にありては海岸の地方を除く外、内地は概ね委棄して省みられざりしが、其の後半に及び列國は爭つてこゝに勢力範圍を作るに至れり。然るに其の境域互に衝突して屢々紛爭を釀しゝかば、其の最も廣大なる領土を有する英國は一八九〇年に列國と境界條約を結びてほゞ之を定めたり。其の南部に於いては列國の間に中立を保たん爲め、白耳義王をして其の王位を兼攝せしむるコンゴー自由國、ボーア人と稱せらるゝ蘭人の裔孫が喜望峰地方より英人に逐はれて内地に入り建設したるトランスバール及びオレンジ自由國の外は皆英、獨、佛、葡の占領に歸せしが、其の最も大なるは喜望峰殖民地に根據を有せる英國なり。北部に於いてはチューニス、アルジ

Abbisinia (abisi-n'ia)

ール佛國の領となり、アビシニヤ伊太利の保護國となれる外、英國の勢力埃及より南下して其の東部亞弗利加殖民地及びギニヤ領に連絡を通じ、遙に南方の領土と相呼應せんとするあり。たゞ其の内部にはサハラの大沙漠ありて境界未だ確定せられず、英佛二國の間に屢紛爭を生じたり。英國は喜望峰と埃及との間に於いて自家の領土ならざるところは極めて僅少なるを以て、此の間に亞弗利加縱貫鐵道を敷設して益々其勢力を增加せんと計れり。

歐洲各國の新傾向

かくの如く列國は十九世紀末に至り、爭つて殖民地の擴張に意を注ぐに至りしが、これ一は各國に於ける、人口の增加と民力の經濟的膨脹とが其の發展の道を海外に求むるによるものあり、之と共に國際競

爭、人種競爭の趨勢は益其の度を加へ、各國政府をして所謂帝國主義なるものに傾かしめ、從つて其の兵備的競爭も愈激甚となり來れり。

極東問題　この機運に際して日清戰役起り、其の結果歐洲列國の耳目をして所謂極東に集中せしめ、益々この傾向を甚しからしむるに至れり。一八九五(明治二八)年わが軍大勝を得て遼東半島をとるや、露國が之を喜ばざるを見、露佛同盟の壓力に苦痛を感ぜる獨乙はこの二國に勸め新に三國同盟を組織して我に干涉し、遂に之を還附せしめたるが、之より三國は其の報酬として清國に請求する所あり、獨は膠州灣を佛は廣州灣を租借し、露は大連灣旅順港及び滿洲に於ける重要の利益を得たるを以て、英國も之に對せんが爲に威海衞を租借したるのみならず、清國が自國防衞の備なく、また國產開發の力なきを見、列國爭つて內地に於ける種々の利權を獲得し、甚だしきは支那分割論をさへ唱ふるものあるに至れり、

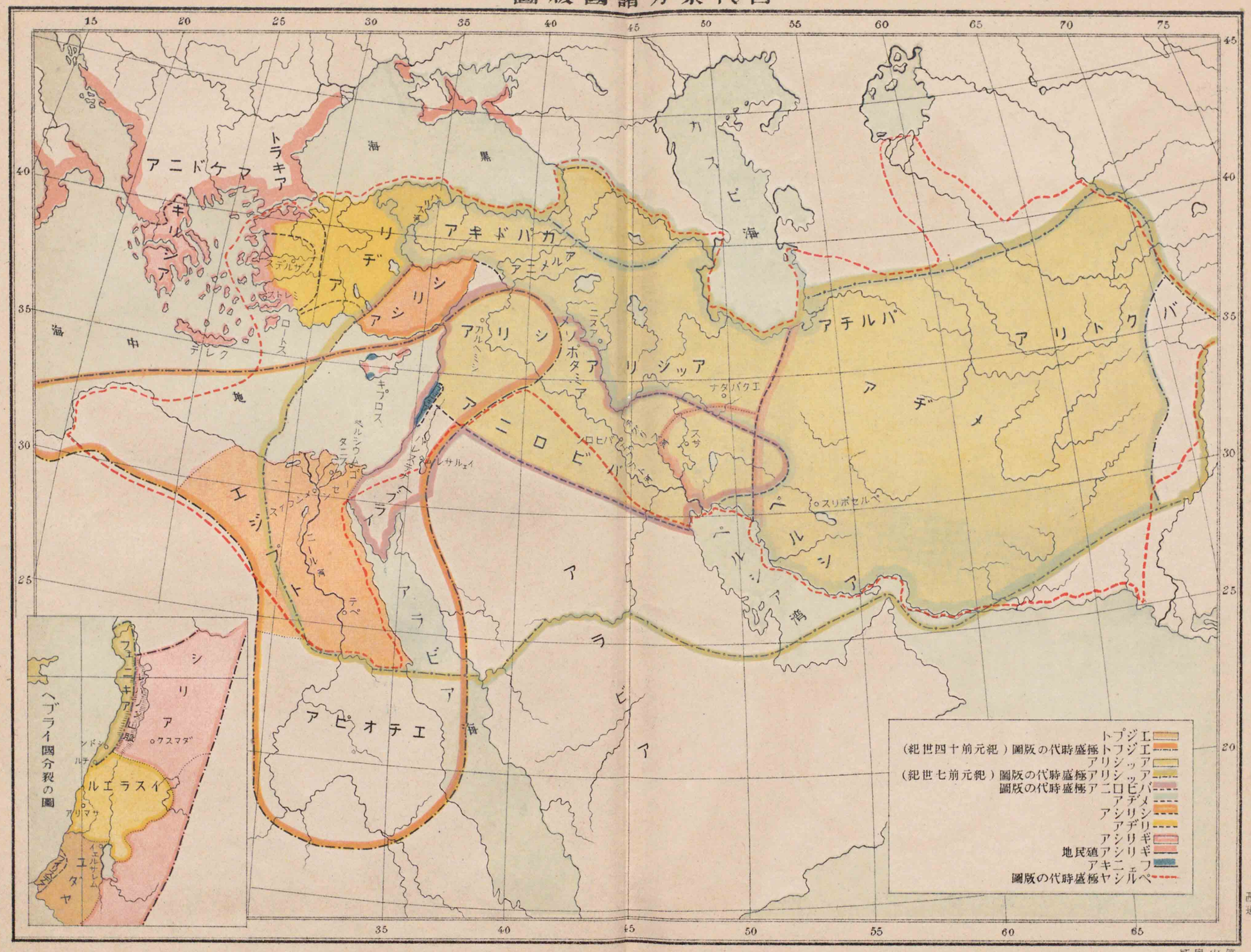
最近の現象　一八九九年露帝主唱して萬國平和會議をハーグに開きしも其の結果は僅に國際法上多少の改良を加ふるを得たりしのみ。列國の武備は日々其の嚴を加へざるを得ずして、國際の案件は常に各地に起る。土耳其の問題も未だ解決を得ず、波斯及びシリヤ地方に於ける英露獨の角逐も益々その度を加へ、所謂大英國主義は遂にオレンジ自由國及びトランスバールを滅ぼし、米國の進取主義と其の經濟上の大勢力とは往々歐人の肝を寒からしむ。而し

て一九〇〇(明治三三)年に起りし北清事件は益々東亞の局面を紛亂せしめ、一九〇二年にはエドワード七世の英國政府新たに我國と同盟を結ぶに至り、延いて之に對する露佛の宣言となり、また之に對する三國同盟の維持となり、波瀾重疊姿態横生、遂に其止まるところを知らざらんとす。

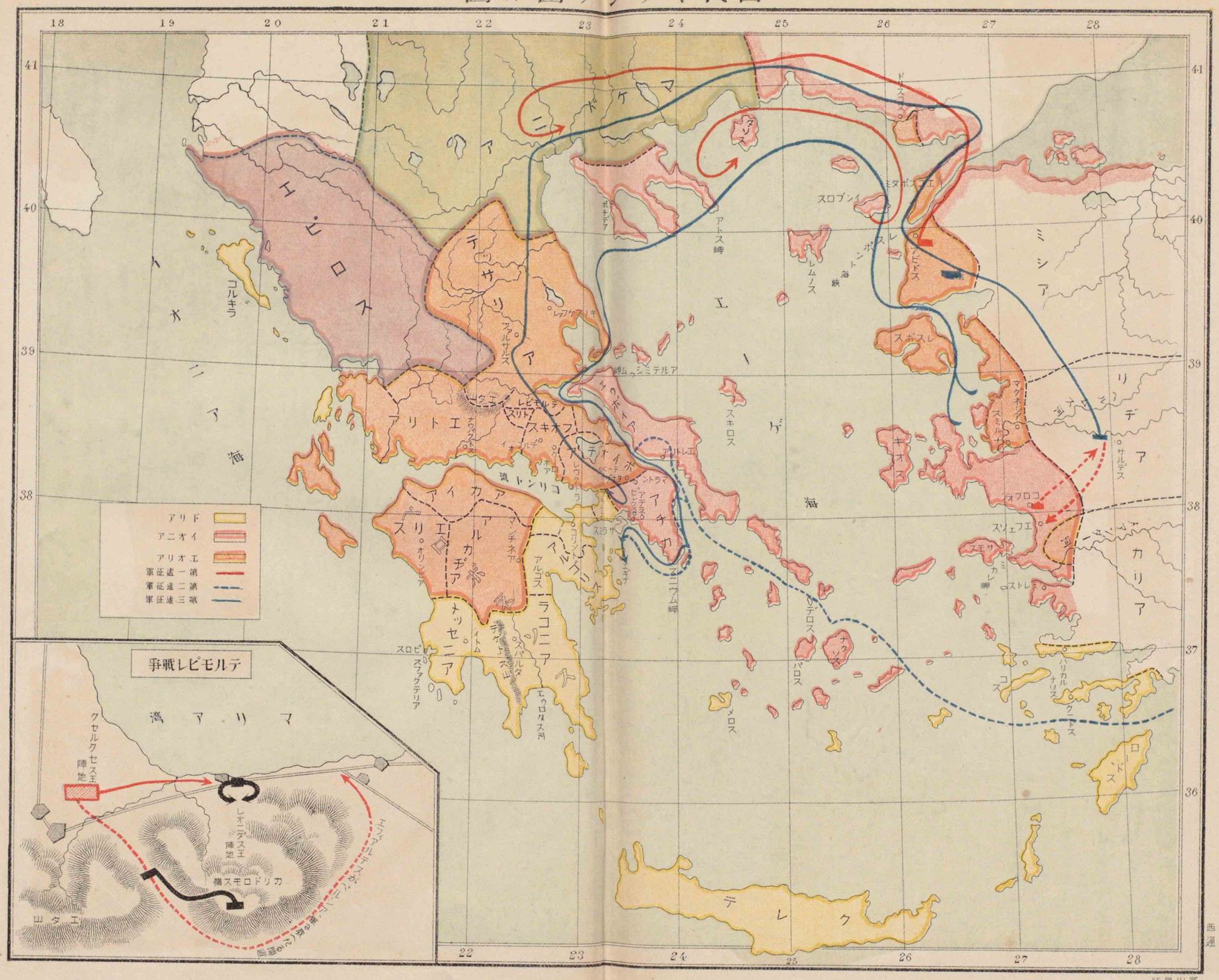
訂正改版 **新撰西洋史** 終

古代東方諸國圖版圖

第一圖

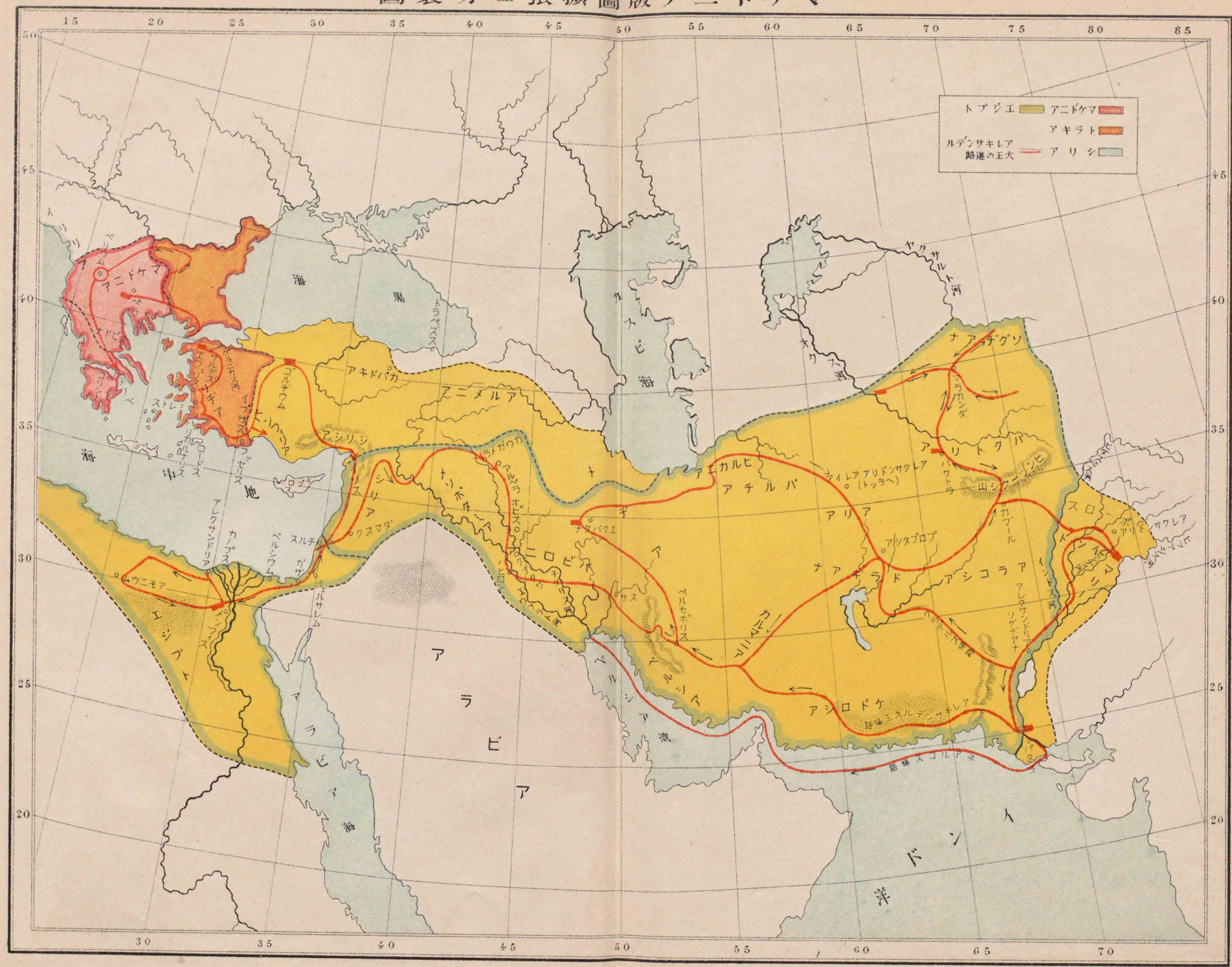


古代ギリシアの國圖


第二圖
アリド
アニオイ
エリオイ
第一遠征軍
第二遠征軍
第三遠征軍
テルモピレ戰爭
マリア灣
クセルクセス王陣地
レオニダス王陣地
カドロモス
エフアルテスが山道を發見した
エタ山
ドゲマ
エピロス
テサリア
アリトエ
アイカイア
アルカディア
メッセニア
ラコニア
アルゴス
アッチカ
ボイオティア
ペロポネソス
ミシア
リディア
カリア
ロドス
テレク
ケオス
スキロス
ミテレネ
ヘレスポント海峡
ドゲマ
ボスポラス
ビザンチウム
ヘラクレア
ケルキラ
アドリア海
ナクソス
パロス
メロス
コス
クレタ
ペリカルナソス
ハリカルナソス
ストラボ
ミレトス
サルデス
ポリカルポス
ポリカルポス
ポリカルポ

マケドニア版圖擴張並分裂圖

第三圖



西邊

富山房版

古代ローマ國の圖

第四圖

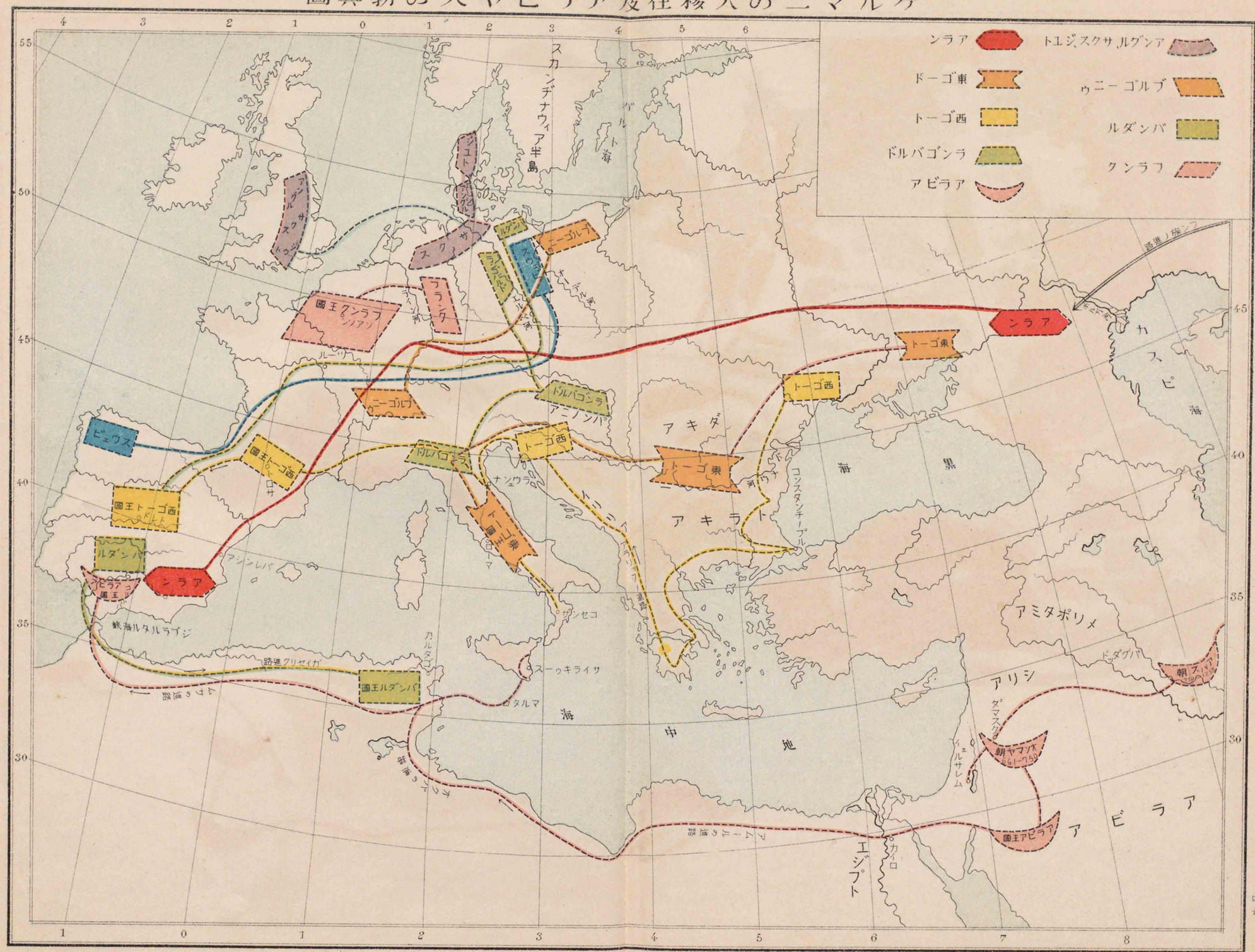
アルプス山脈
ゴルチルド峠
ガリア
キサルピナ
ヒスパニア
ルシタニア
ケルチベリア
ストリア
ダルマチア
アリグリア
ナンヒウラ
ウンブリア
ピセニウム
アンコナ
エトルリア
コルシカ
サルデニア
ローマ
ラチウム
カンパニア
ルカニア
ブルチウム
ブルチウム
シトロ
スリパン
ナポリ
カンネ
ルウンチンルプ
ローマ
ラチウム
ロンガ
ポンプイ
ポンプイ
ルビコン河
ポー河
ポー河
ティベル河
ティベル河
ポー河
ルビコン
ルビコン
ルビコン

第五圖　ローマ版圖擴張圖

ブリタニア
カレドニア
ゲルマニア
アルマニア
ガリア
アキタニア
ルグドゥネンシス
ベルギカ
ルシタニア
ヒスパニア
ムルシア
ムルシア
ムルシ

ゲルマニの大移住及アラビヤ人の勃興圖

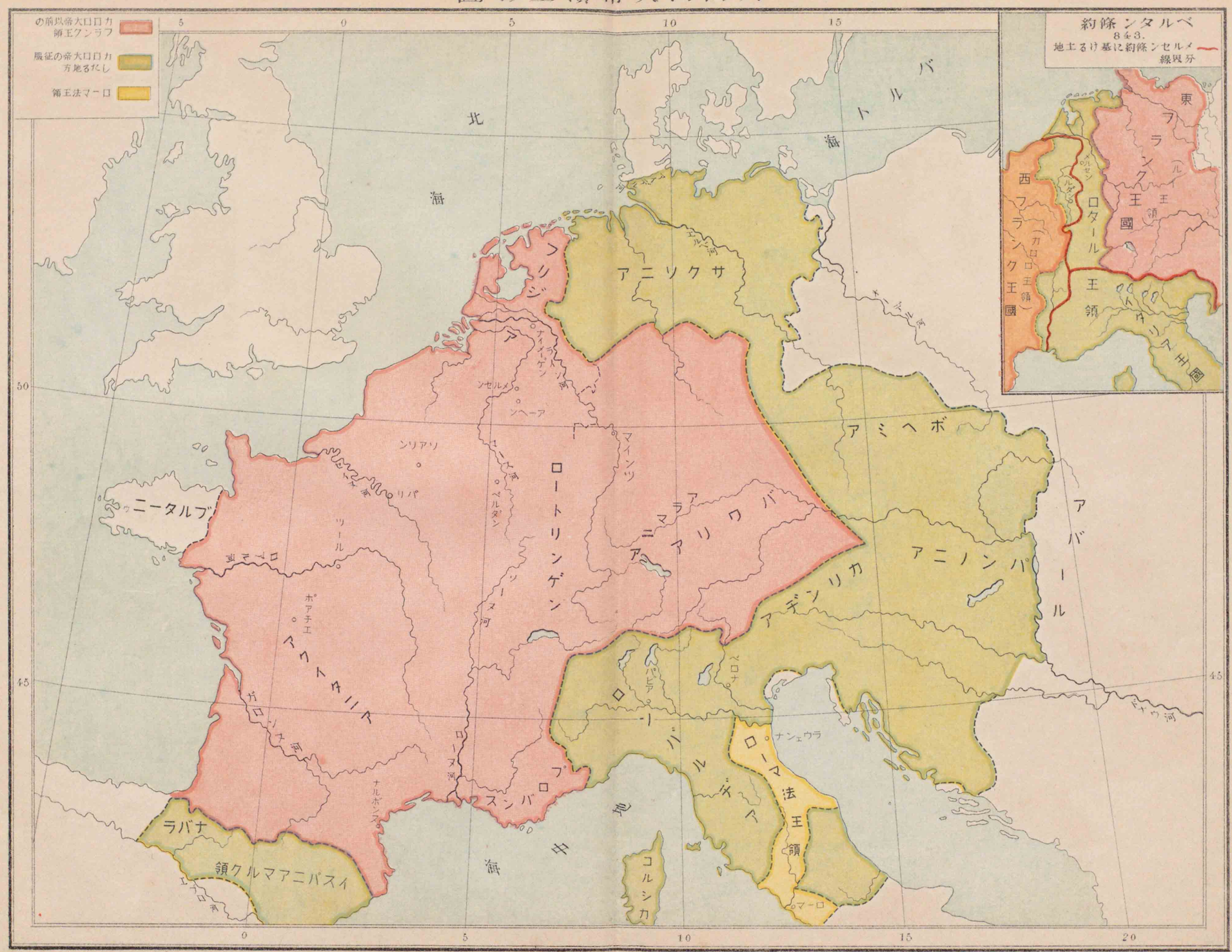
第六圖



冨山房版

カロロ大帝領土の圖

第七圖

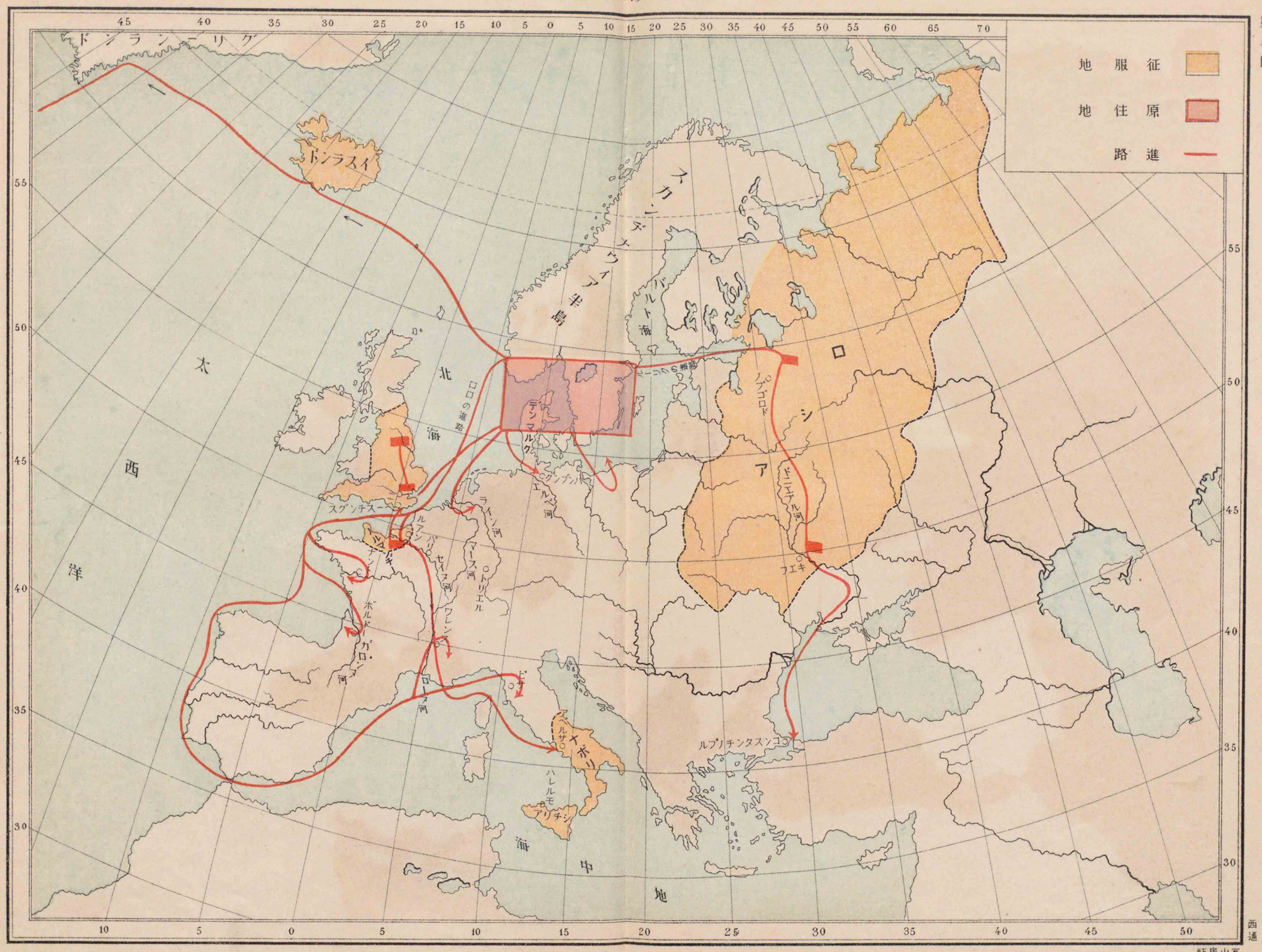


西邇

富山房版

ノルマンの移住侵略圖

第八圖



十字軍略圖

第九圖

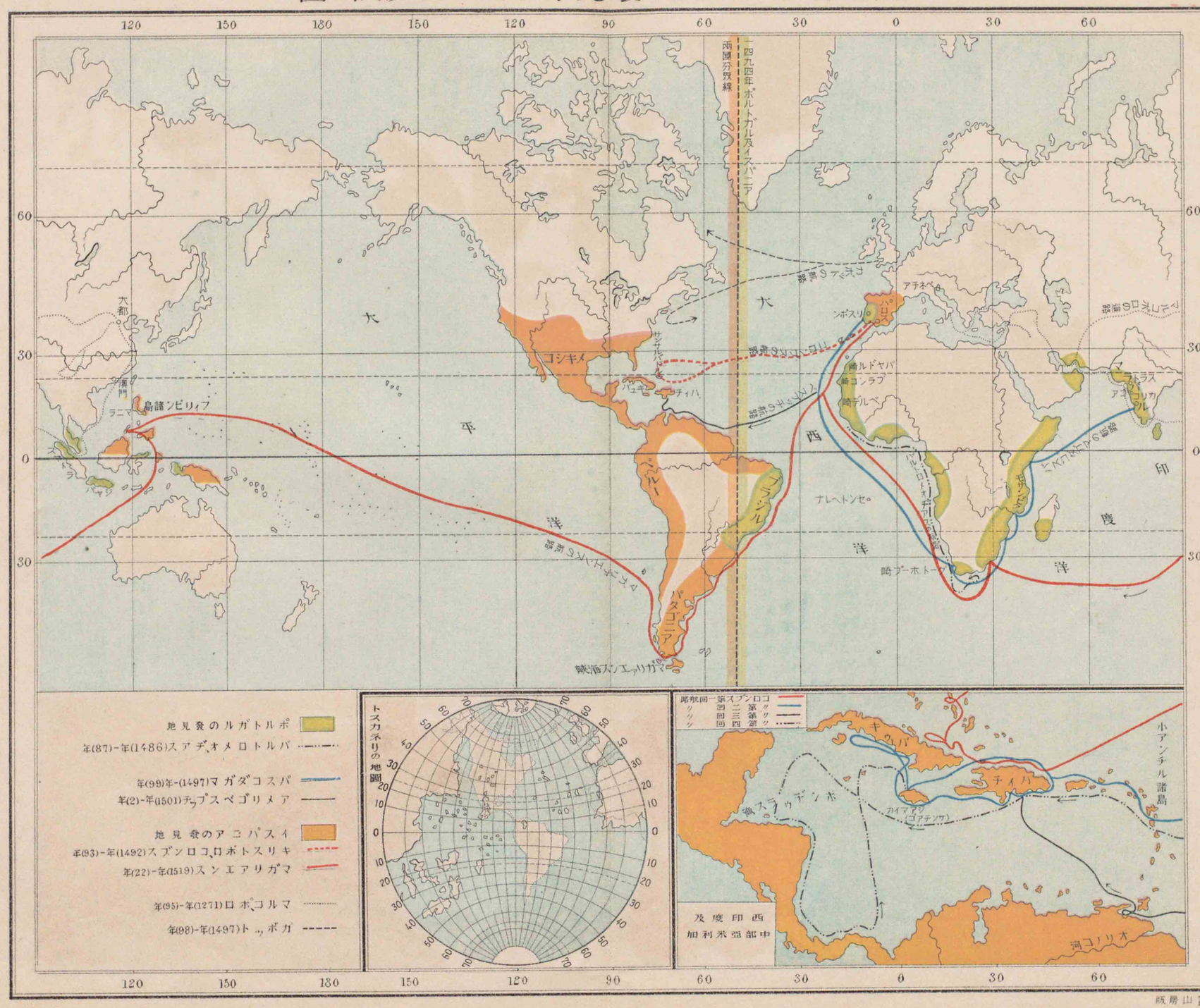
坂廣山舊

國家主義發生時代の歐洲圖

第十圖

新航路及新陸地發見時代の世界略圖

第十一圖



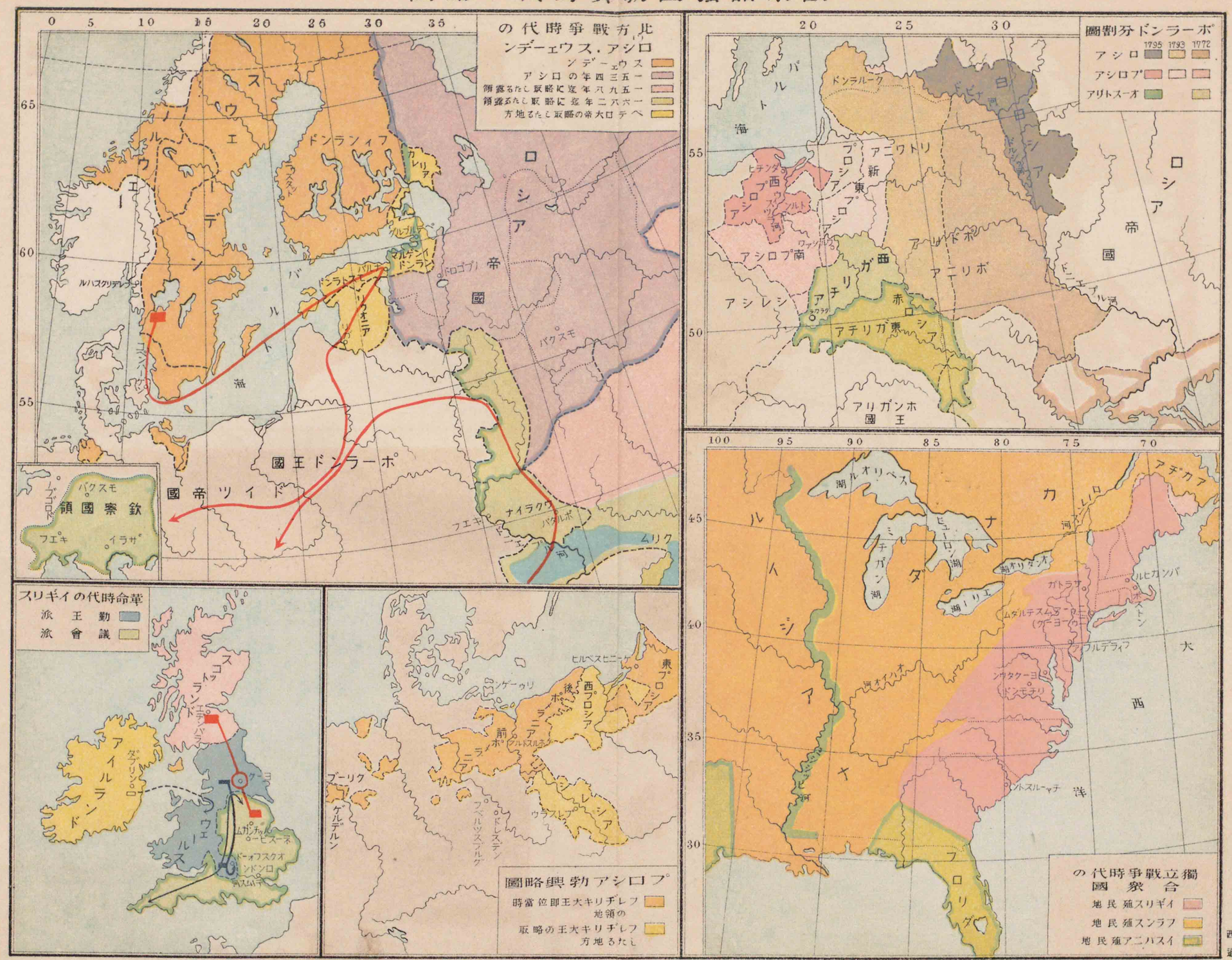
富山房版

十八世紀ヨーロッパ諸國圖.1740

家ンボルブ
家グルブスプハ
域領國帝ツイド
ノルウェー
スウェーデン王國
デンマルク王國
イギリス王國
アイルランド
ドンラトッコス
オランダ
フランス王國
スイス
ビエモンテ
ローマ法王領
ポルトガル王國
スペイン王國
ビスカヤ灣
ピレネー
ポーランド國王
プロシア公領
ロシア帝國
ナイラ
ウパルボ國
アビダルモ
アリガンボ國王
アキラワ
アニスボ
アリガルブ國
アルバニア
モリア
コルト
ムリク
黑海
地中海
ルタルラヴジ
ルセロラ
ルシヤ
ルリア
ルリ
ルリ海
ルリ河
ルリ
ルリ
ルリ

歐米諸強國勃興時代の略圖

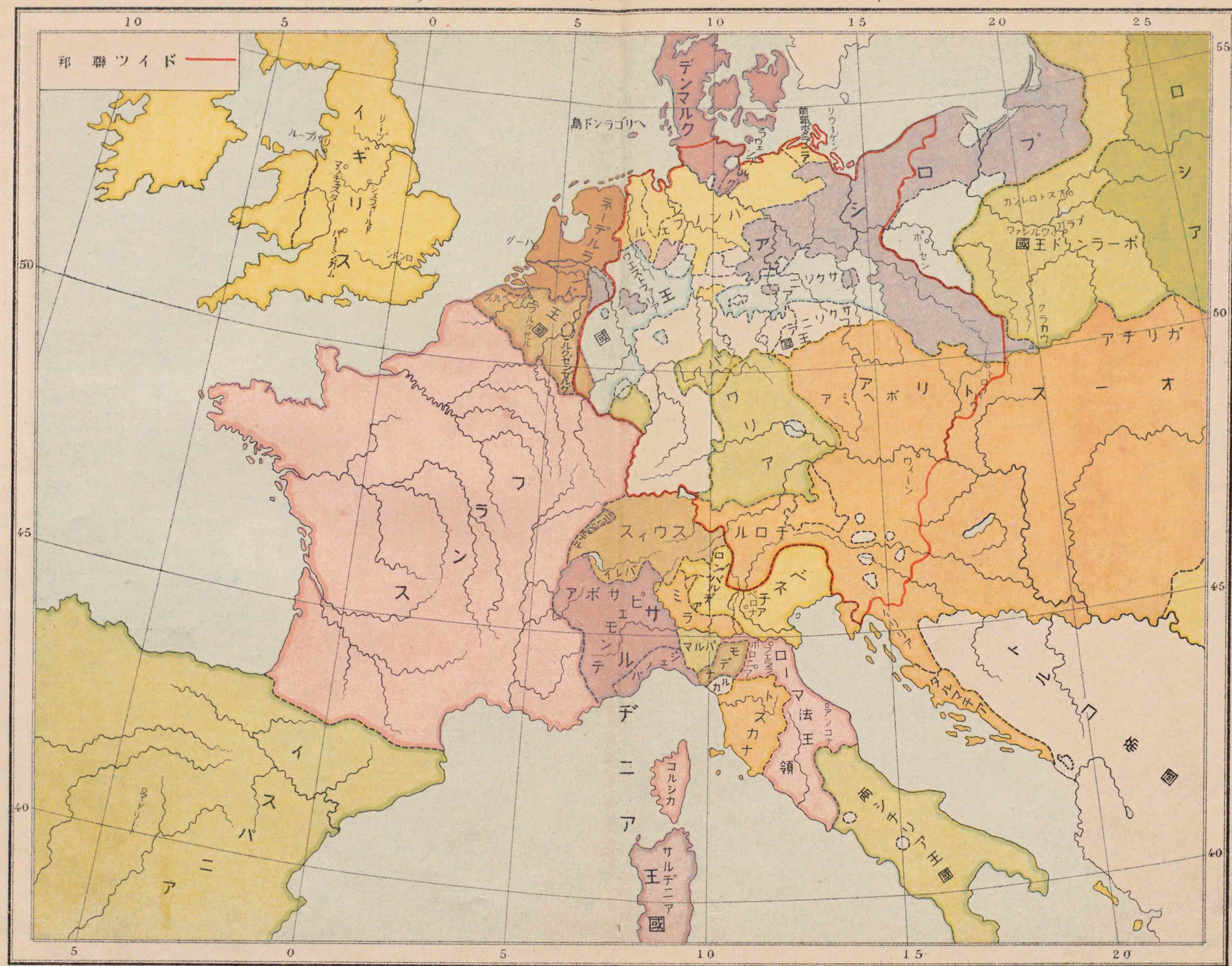
第十三圖


北方戰爭時代の
ロシア・スウェーデン
ロシア帝國
ポーランド王國
ツイード帝國
バルト海
ドンラルーク
ドビナ河
白ロシア
ドニエプル河
ポーランド
アシロプ南
アシレシ
アチリガ東
赤ロシア
アリガンホ國王
ルオリベス湖
ヒューロン湖
ミチガン湖
湖ミリエ
湖ミリガン
カナダ
ルヒガンバ
ボストン
フルデライフ
ンサタクーヨ
ンドモチリ
ムダルテスムラ
ガトラサ
河オハイオ
ミシシピ河
ノトスルーマチ
フロリダ
大西洋
ポーランド割分ドンラー圖
アシロ 1795 1793 1772
アシロプ
アリトスーオ
ロシア帝國
ツイード帝國
ポーランド王國
領察國欽
バクスモ
フエキ
イラザ
ムリク
ナイラクウ
バクルポ
ルバスクリテレ
ドンランフ
カレリア
ペテルブルク
マルゲンロ
ドンラン
ドロゴブル
ドシラトス
ウラジオミア
バクスモ
ルウエーデン
ルウエー
ルウエー
ルウエー

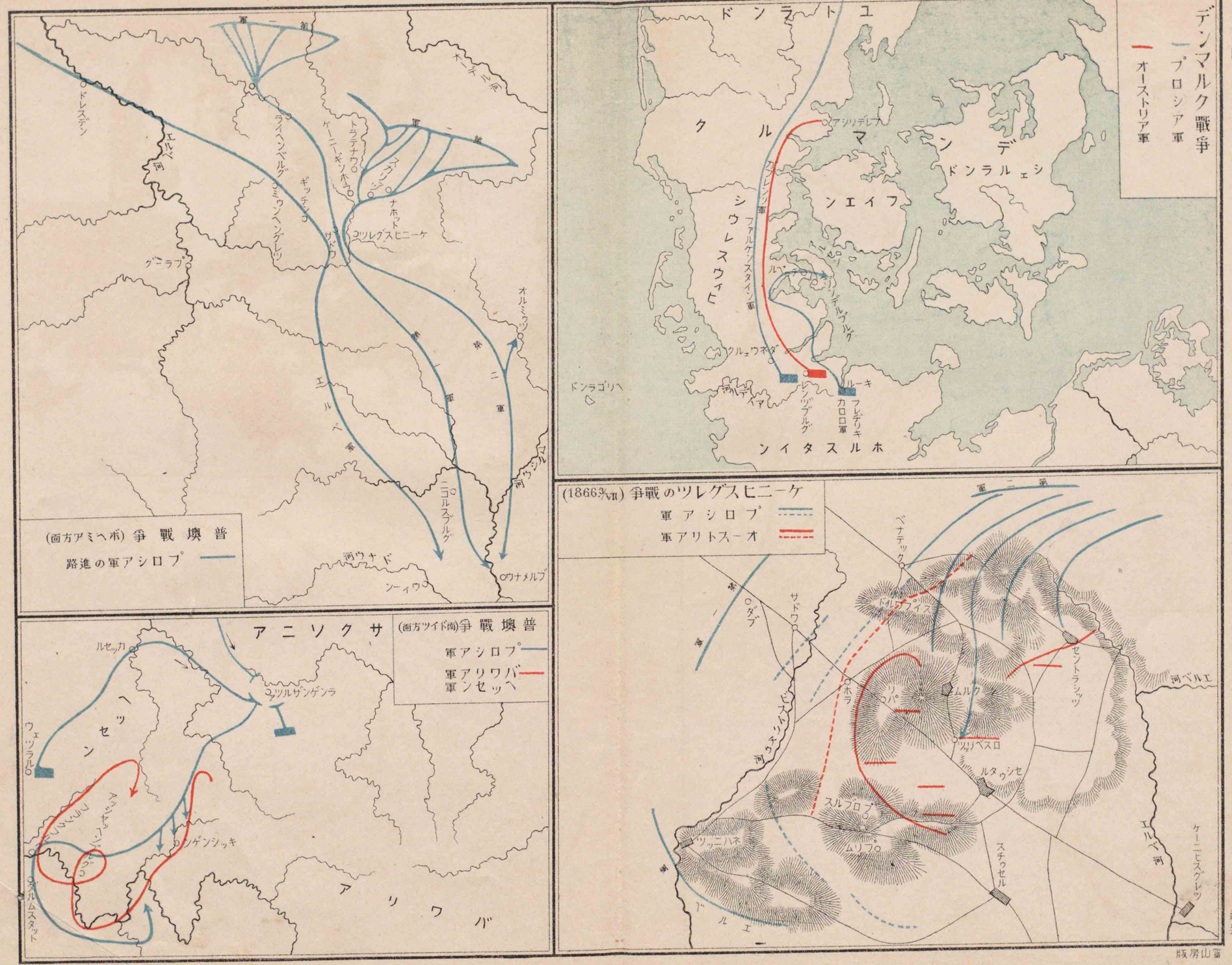
ナポレオン第一世極盛時代のヨーロッパ

イギリス王國
ロンドン
デンマルク王國
コペンハゲン
ダンツヒ
ポーランド
ワルシャワ
國公ワルシャワ
ロシア王國
ロシア帝國
ヒチンダ
ベルリン
ハノーファー
ウェストファリア王國
ライン同盟
ルーロルテーワ
ブラバンツ
ルーベンス
ルーベンス帝國
ルーベンス王國
ルーベンス
ルーベンス
ルーベンス

1815. パッロ－ヨるたれらせ定協てりよに約條ンーィウ


邦聯ツイド
イギリス
ルーパ
リーズ
マンチェスター
シェフィールド
バーミンガム
ンドロ
島ドンラゴリヘ
デンマルク
ホルスタイン
ラウエンブルク
ハノーバ
ネーデルラント王國
グーハ
ルクセンブルク
ワエストファリア
ポーセン
ポーランド
ロシア
ガルロトスカ
ワルシヤワ
國王ドンラーポ
クラカウ
ガリチア
ロドメリア
ハンガリア
ウィーン
ボヘミア
ザクセン
ドレスデン
ライプツヒ
ベルリン
ハノーバ
ブランデンブルク
ポーランド
ロシア
ルーマニア
ブルガリア
ウィーン
ボヘミア
ハンガリア
ガリチア
ロドメリア
ルーマニア
ブルガリア
ルーマニア
ブルガリア
ルーマニア
ブルガ

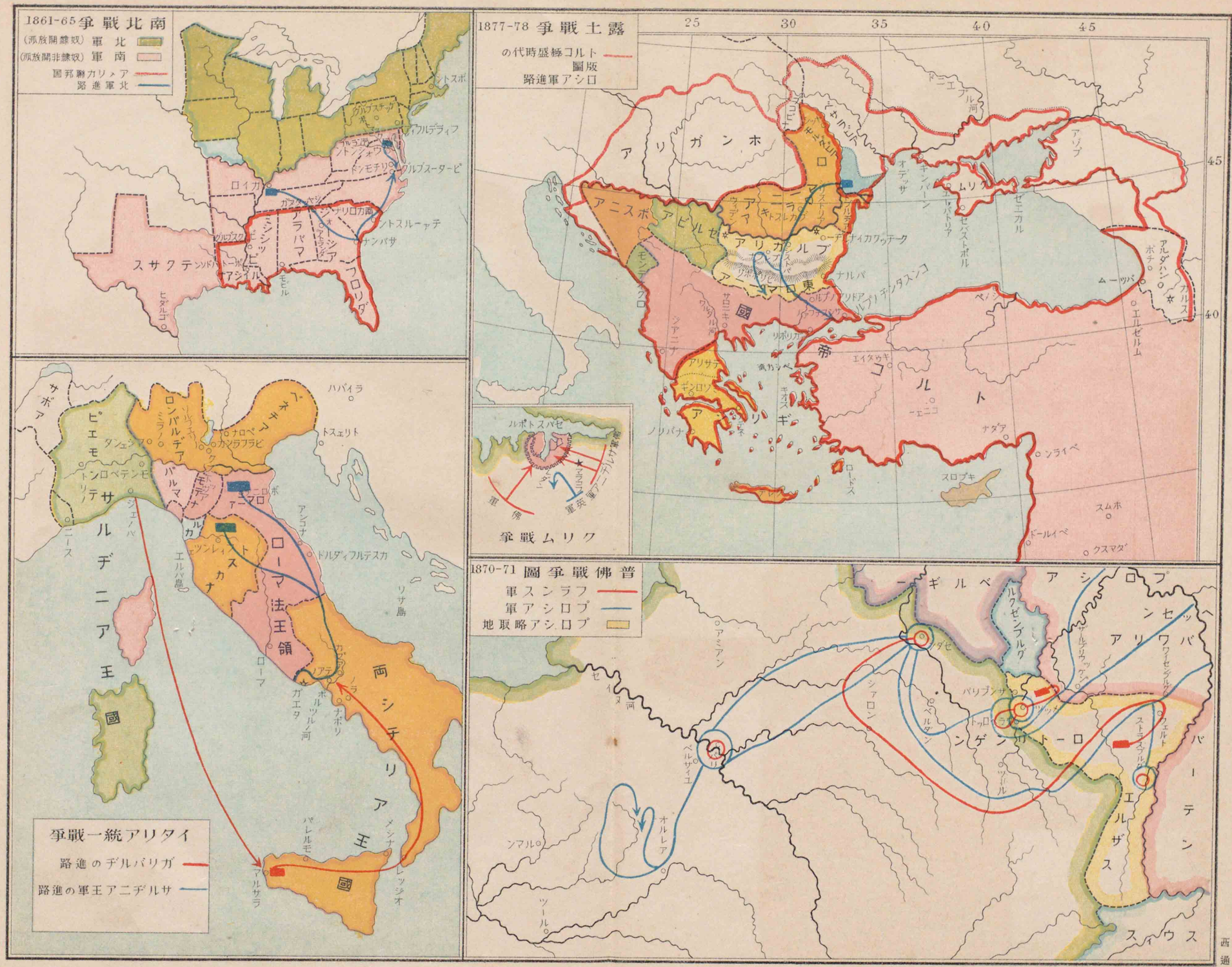
十九世紀後半に於ける七大戰圖（其一）



富山房版

十九世紀後半に於ける大戰圖（其二）

第十七圖

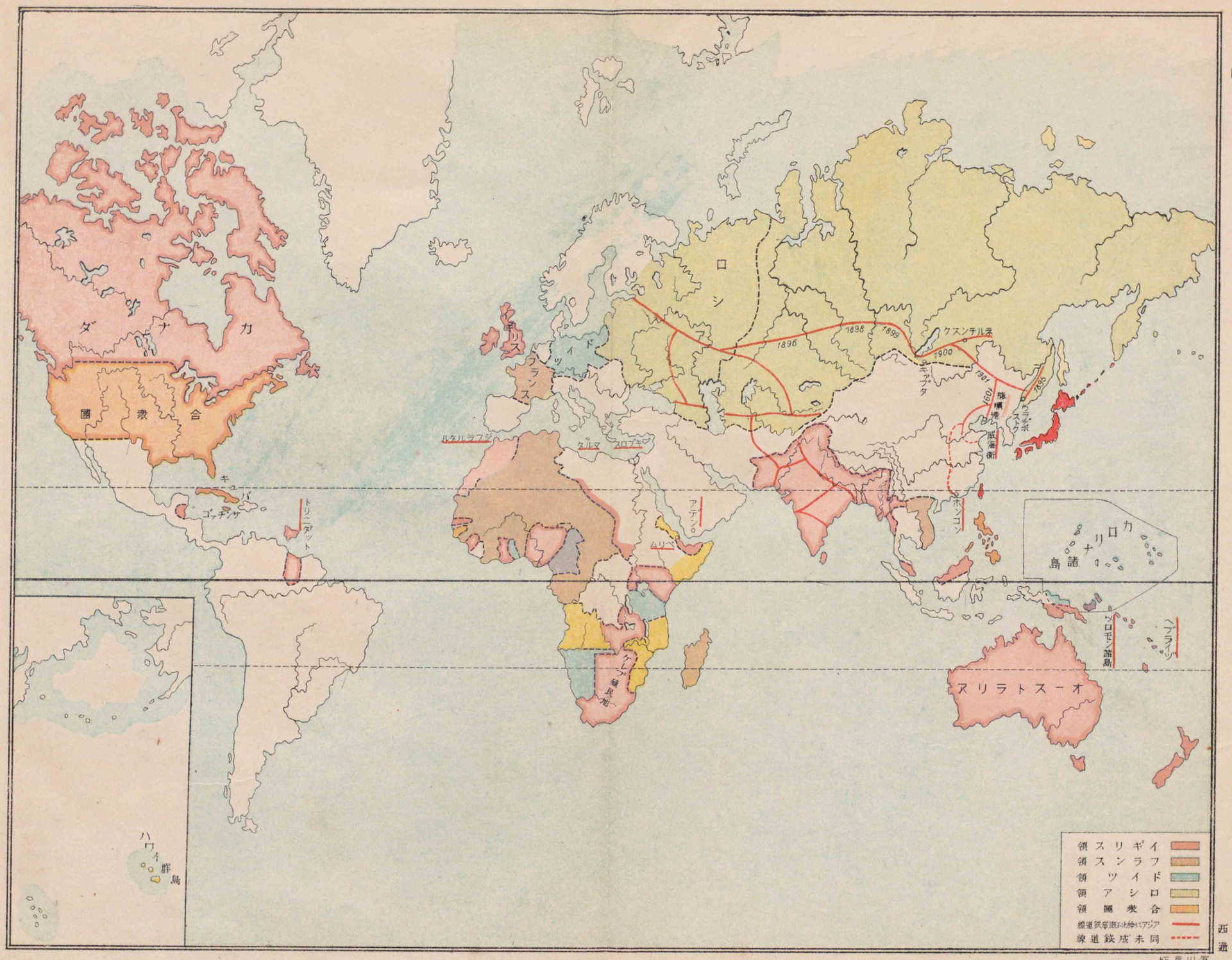


版刷山藤

西通

世界に於ける五大強國の現勢圖

第十八圖



西遊

暮山房版

X

Xenophon
Xeres-de-la-F ontera

Y

York
Yakut
Yezdigerd
Yaloslav
Yorktown
Yenisei
Yeniseisk
Yakutks
Ypsilanti

Z

Zama
Zeno(*Gr.*)=Zenon
Zeus(*Lat.*)Jovis, Jupiter
Zoroaster(*Persia.*)=Zarathushtra
Zurich(*Ger.*)=Zrichü
Zwingli
Zend Avesta
Zenki
Zola

名稱對表終

Valens
Valois
Vandal
Varahram
Varna
Varus
Vasa
Sasco da Gama
Veii
Vendée
Verice(*It.*)=Venezia(*Fr.*)
=Venise(*Ger.*)=Venezig
Vercellae
Verden
Verona
Veronese
Vespucci
Versailles
Venetia
Vermandois
Virgil
Veapasian(*Lat.*)=Vespasianus
Victor Emmanuel
Victoria
Villafranca
Virginia
Visigoth
Vijoyanagar
Vindhya
Vinland
Viconti
Vittelius
Vladimir
Vladislaus
Vladivostok
Volga(Ger.)=Wolga
Valscian
Valtaire
Vyatka

Wagram
Wales
Wallenstein=Waldstein
Walpole
Wartaw=(*Poland.*)=Warszawa
(*Ger.*)=Warsehau(*Fr.*)=Varsovie
Wortburg
Washington
Waterloo
Watt
Wakhan
Waldemar
Wallachia
Wahlstatt
Waiblingen
Walid
Wallia
Weissenbur
Wellsley
Wellington
Wessex
Westphalia(*Ger.*)=Westphalen
(*Fr.*)=Westphalie
Wheatstou
Weimar
Welf
Wendland
Weser
Westminster
Whig
Wicliffe
Wlliam(*Fr.*)=Guillaume(*Cer.*)
=Wilhelm(決定のかぶと)
Wittenherg
Wolsey
Wotms
Wordsworth
Würtemberg

Trent
Trier
Troy
Triumvirat(*Lat.*語*Triumviri*三轉)
Travendal
Toledo
Tribonian(*Lat.*)=Tribonianus
Trinidad(*Sp.*語三位一躰)
Troppau(*Slav.*)=Opava
Tribune
Tudor
Tuileries
Tunis
Turenne
Turin(*It.*)=Torino
Turkey(*Fr.*)=Turque(*Ger.*)=Türkei(*Ter.*)=Osmanli-Vilaieti
Turk(漢史の突厥にして其の本音は*Turk*なり)
Tuscany(*Fr.*)=Toscane(*Ger.*)=Toscana(*It.*)=Toscana.
Tyre(*Heb.*語*Tsor*岩の轉(*Lat.*)=Tyrus(*Gr.*)=Tyros.
Trenton(*Ger.*)=Trient.
Troyes
Tughlakaba.
Turgot
Tullus Hostilius
Turgenieff
Turkmantchai
Tyrant
Tyndale
Tyrrhenean Sea

Ulm
Umbria
Ukraine(*Rus.*)=Ukráina(邊地)
Ugri(*Turanian*種)
Unkiar-Skelessi
Ulster
Unterwalden
Ulfian
Ulfilas
Ural
Uraltsk
Urban
Uri
United States(*Fr;*)=Etats-Unis-(*Cer.*)=Vereinigte Staaten
Utrecht
Utica=(*Cr.*)=Oulike
Uzbeg(*Turanian*種の中*Turk*族自主の義)

Strasburg
Stuart
Stolbovna
Stuttgart
Suevi(*Gr.*)=Souboi
Suez
Sulla
Sumeria
Surat
Susa
Susiana
Swabia(*Fr.*)=Souabe(*Ger.*)
Schwabeu
Sully
Suleiman
Sumatra
Sutlej
Sunnit
Suzdal
Sweden(*Sw.*)=Sverge(*Fr.*)
=Suéde(*Ger.*)=Schwede
Swift
Switzerland(*Ger.*)=Schweiz(*Fr.*)
=Suisse
Swegen
Sviatoslaw
Syagrius
Syracuse(*Gr.*)=Syrakousai
Syria(*Gr.*)=Syrie(*Ger.*)=Syrien

Tacitus
Tamerlan=(*Timur-leug*の轉*dTimur*跛者の義)=Timur(蒙古及土耳其語鐵)
Tanis
Tarentum
Tarik
Tasso
Tabriz=Tavris=Tebris=Tauris
Tahiti
Tanais
Tarquin(*Lat.*)=Tarquinius
Tashkend
Tauaus
Tasmania
Teuton
Texas
Templlar
Tenasserim
Tertullian
Teutoburg
Thames
Thebes(*Gr.*)=Thebai(*Lat.*)
=Thebae
Themistocles
Theodoric(*Gr.*)=Theodorikos
Theodosius
Thermopylae(*Gr.*)=Thermopylai
Theseus
Thessaly(*Gr. Lat.*)=Thessalia
Thiers
Thomas(*Gr.*語*Dydmos*孖子ノ轉)
Thucydides(*Fr.*)=Thoukydes
Thuringia(*Fr.*)=Thuringe(*Cer.*)
=Shuringen
Thasos
Thsinstan=Tehina(漢史の支那、指那、震旦、眞丹)
Tiberius
Tiglath-Pileser(*Assyr.*)=Tukulti-pal-eshara(我が賴みは*Eshara*神の子なり)
Tilly
Tingitana
Tilsit
Tiber(*Lat. Gr.*)=Tiberis(*It.*)
=Tevere
Tigris
Timur=Tamerlan
Titian
Tours
Tobago
Togrul Beg
Tolosa
Toulouse
Tokarestan(漢史の吐火羅)
Tory
Tomsk
Trafalgar
Trajan(*Lat.*)=Trajanus
Transyluania
Tribizond

Sabine
Sadowa
Sagantum
Saladin=Sala-ed-din
Salamis
Salisbury
Samaria(*Heb.*)=Shomrōn(*Shemer*の城)(*Gr.*)=Samareia
Samnium
Samuel(*Heb.*)=Shemuel(*Gr.*)=Samouel
Santo Domingo
Sapor=Shapur
Saracen(*Ar.*語東國人の義)
Sardes=Sardis
Sardinia
Sargon(*Sssyr.*)=Sharru-kenu-(正統の君)
Sassanidae
Saul(*Heb.*)=Shaû(問ひたるの義)-(*Gr.*)=Saoul
Savoy(*Fr.*)=Savoie(*It.*)=Savoja
Saxon
Saxony
Sacred Mount
Sais
Sali
Salian Frank
Samoa
Samarkand
Samos
San Salvador(*Sp.*語神聖なる救世主の義)
Sandon
Sancho
San Stefano
Sarai
Sarmatia
Saxe-Weimar(*Ger.*)=Sacesen-Weimar
Saxe-Coberg(*Ger.*)=Sahhsen-Cobuag
Scandinavia
Schleswig(*Den.*)=Slesvig
Schmalkalden
Schwarzenberg
Scipio
Schiller
Schelling
Schopenhauer
Schweiz
Scot
Scotland
Scott
Scythia(*Gr.*)=Skytia
Sebastopol
Sedan
Serica(支那の一名)
Seymour
Seleucus(*Gr.*)=Seleukas
Selim
Seneca

Servia(*Fr.*)=Servie(*Ger.*)=Servien.
Servius Tullius
Sethos=Seti
Shakespeare
Shofetim
Shashan
Shelley
Semtic
Shirvan
Shuja
Sicily(*It.*)=Sicilia(*Fr.*)=Sicile(*Ger.*)=Sicilien(*Gr.*)=Sikelia.
Sidon(*Gr.*語漁市)
Sigismund
Silesia(*Ger.*)=Silesien(*Fr.*)=Silesie
Simon of Montfort=Simon de-Montfort
Sinai
Sind(*Sanscrit.*)=Sindhu(漢史の信度、辛頭、信河、驗河)
Sistova
Sicyon(*Gr.*)=Sikyon.
Sigeum(*Gr.*)=Sigeion
Sihon
Sir-Darya
Siraj-ud-doula
Slav
Sluys(*Fr.*)=L'Ecluse
Sigmaringen
Smolensk
Smitn
Socrates
Sogdana(*Gr.*)=Sogdiane
Solferino
Soliman
Solomon(*Heb.*)=Shelomōh(和くべき)(*Fr.*)=Salomon(*Ger.*)=Salomo
Solon
Sophia(*Gr.*語智慧の義)
Sophocles(*Gr.*)=Sophokles
Somerset
Soisson
Spencer
Spenser
Spinoza
Spain(*Sp.*)=España(*Er.*)=Espagne(*Ger.*)=Spanien(*Lat.*)*Gr.*)Hispania
Sparta(*Gr.*)=Sparte.
Speyer(*Fr.*)=Spire
Sphinx
Stein
Stephen
Stephenson
Stilicho
Stanovoi
Stanislaus
Stenhen
Stoic(*Fr.*)=Stoïque(*Gr.*語*Stoikos*玄關の轉)
Stadfford

Queensland
Quesnay
Quaker
Quebec
Quintilian

Ra
Rha
Racine
Ramses(*Eegypt.*)=Ramesu(*Ra*の子(*Gr.*)=Rameses
Raphael Santi
Rastadt
Ratisbon(*Er.*)=Ratisboune(*Ger.*)=Regensburg
Revenna
Raab
Raetia
Ramnes
Ranke
Rhine(*Fr.*)=Rhin(*Ger.*)=Rhein(*Lat.*)=Rhenus
Rhodes(*Lat.*)=Rhodus
Rheims(*Fr.*)=Reims
Richard(*Ger.*)=Reichard(有力)
Richelieu
Rienzi
Riga
Riguria
Richmond
Robert
Robespierre
Roger
Rome(*It.*)=Roma(*Ger.*)=Rom(*Gr.*語*Reme*の轉にて力の義ならん)
lusouRm
Roum
Roumania
Rollo
Romania
Romanoff
Rousseau
Rocky
Rudolph
Rubicon
Rurik
Russia(*Rus.*)=Rossiya)(*Fr.*)=Russie(*Ger*)=Russland
Rupert
Rufinus
Rus
Runnymede
Rumelia(*Fr.*)=Roumelie(*Tur.*)=Rumili
Ryaxan
Ryswick
st.Petersburg.(*Rus.*)=Sankt-Peterburg(*Fr.*)Saint Petersbourg(*Ger.*)=SanktPetersburg

Philip(*Gr.*)=Philippos(*Lat.*)
=Phillipus(*Fr.*)=Phillippo
Phillippi(*Gr.*)=Philinnoi
Phoenicia
Phrygia
Phidias(*Gr.*)=Pheidias
Pharsalus
Philistine
Philippus
Phliasia
Philetaelus
Pfalzgraf
Phocis(*Gr.*)=Phokis
Philippine(*sp.*)=Filipinas
Philoppopolis
Piacenza
Phraortes
Piast
Piet
Piedmont
Pindus
Pisa
Pisistratus(*Gr.*)=Peisistratos
Pitt
Pizarro
Picenum
Piraeus(*Gr.*)=Piraieus
Plantagenet(*Lat.*語*Planta genistae*-
金雀花の轉)
Plutarch(*Gr.*)=Ploutarchos
Plato(*Gr.*)=Plato
Perm
Pliny
Plotinus
Plymouth
Plassey
Plevna
Plebeian
Poitiers
Paiton
Poland(*Pol.*)=Polska(*Fr.*)
=Pologne(*Ger.*)=Polen
Phlo, marco
Polovtui
Pomerania(*Fr.*)=Pomèranie(*Ger.*)
=Pommern
Pompey(*Lat.*)=Pompeius
Pondicherry(*Fr.*)=Pondichèry
Pontus(*Gr.*)=Pontos
Poona
Pope(*Gr.*語*Pappa*の轉父の義)
Portugul
Polybius(*Gr.*)=Polybios
Porto Santo
Porus(*Gr.*)Poros
Princeton
Provence(*Lat.*語*Provincia*の轉)
Prussia(*Ger.*)=Preussen(*Fr.*)
=Prusse
Prusa
Pruth
Psammetichus

Protagoras
Province
Prague(*Ger.*)=Prag(*Bohemia.*)
=Praha.
Propus
Presbyterian
Presburg
Praetor
Ptolemy *Gr.*)=Ptolemoios(*Lat.*)
=Ptolemaeus
Ptah
Pteria
Plutowa
Punic
Pyrenees(*Sp.*)=Pirineos(*Fr.*)
=Pyrènèes
Pyrrho
Pyrrhus(*Gr.*)Pyrros
Pythagoras
Pyramid

Obelisk
Obi=ob
Oconnel
Octavius
Oder
Odo
Oeta
Odovacar
Odyssey
Ohio
Okhotsk
Oldenburg
Olympia
Oliver
Oliva
Olmütz
Omar
Ommiad
Omsk
Orange
Oregon
Orinoco
Orleans
Ormuzd
Orkhan
Orenburg
Osiris
Oskan
Ostrogoth
Orissa
Ostracism
Ostia(*Lat*語河口)
Otho
Othman
Otta(*Ger*.語富の義)
Oudh
Ottocàr
Oxford
Oxus(漢史の烏滸水嬀水)
Oxenstierna
Ovid

Palatinate(*Fr*.)=Palatinat(*Ger*.)
—Pfalz
Pelestine(*Lat*.)=Palaestina
Palmerston
Panipat
Pannonia
Panormus(*Gr*.)=Panormos
(總ての天)
Paphragonia
Paris
Parma
Parthia(*Lat*.)=Parthi.(漢史の安息)
Paul(*Lat*.)=Paulus (*Gr*.)
=Paulos(小)
Paria
Panjab=Punjab(*Hind*.語五河の義)
Padus
Palatine(*Lat*.)=Mons Palatinus
Papinian
Paropamisus(*Gr*.)=Paropamisos
Patrick
Panama
Paleologus
Passau
Parthenopean Republic
Parnell
Patrician
Pataliputtla(漢史の巴連弗、華氏城)
Pedro
Pelopidas
Pelodonnesus(*Gr*.)=Peloponnesos
(*Pelops*神の嶋)
Pennsylvania
Petrarch
Pelasgi
Peter(*Fr*.)=Pietre(*Gr*.)Petros(石)
Persius
Pepin
Pergamon(*Lat*.)=Pergamum
Pericles(*Gr*.)=Perikles
Pesth
Persepolis
Periaeci
Perdiccas
Persis
Pelagius
Pentapolis(*Gr*.語五城の義)
Peru(*Fr*.)=Pèrou
Peshawar
Pensilvania
Petersburg(*Rus*.)=Peterbuvrg
Peel
Pegu
Pamir(*Sanscrit*.)
=Pamira(漢史の波謎羅)
Persia(*Fr*.)=Perse(*Ger*.)=Persien
Pentaur
Perdiccas
Pharaoh(Gr. *Lat*.)=Pharao(*Heb*.)
=Parōh(埃及語*Pir-aa*大屋の轉)
Philadelphia

Nabopolassar(*Baby.*)=Nabù-bal-ûçar(*Nebo*は子を保護す)
Nagpur
Nanda(*Sanscrit.*語幸福)
Nantes
Naples(*It.*)=Napoli(*Ger.*)
Neapel(*Gr.*)=Neapolis(新城)
Napoleon
Narses
Narva
Naseby
Nassau
Navarino
Nadirshah
Naxos
Nearchus(*Gr.*)=Nearchos
Mebuchadnezzar(*Baby.*)=Nabû-kuduri-uçur(*Nebo*境界を保護す)
Neckar
Necker
Nehavend
Necho=Neku
Nelson
Nertchinsk
Nero
Nerva
Netherland(*Dut.*)=Nederlanden (*Ger.*)=Niederlandu.(*Fr.*)=Pay-Bas(低地)
Neustria
New England
Newfoundland (*Fr.*) =Ferre Neuve(新國)
New Jersey
Newton
Neva
Ney
Nestor
Neustadt
New Zeeland
Nicaea(*Gr.*)=Nikaia
Nice(*It.*)Nizza
Nicholas(*Fr.*)=Nicolas(*Ger.*) =Nicolaus(*Rus.*)=Nicolai (民の勝利)
Nicias(*Gr.*)=Nikias
Nicomedia(*Gr.*)=Nikomedeia
Nile(*Fr. Ger.*)=Nil(*Lat.*) =Nilus(*Gr.*)=Neilos
Nimwegen(*Fr.*)=Nimégue
Nicephorus(*Gr.*)=Nikephoras
Nicopolis(*Gr.*語勝利の市)
Nika
Nikolaievsk
Nivevh(*Heb.*)=Nînevô(*Assyr.*) =Ninua(*Gr.*)Ninos
Noricum
Normandy(*Fr.*)=Normandie
Norman
Noureddin
Northumberland
Northmen

Norway(*Norway.*)=Norge(*Fr.*) =Nirvège(*Ger.*)=Norwegen (北路)
Novara
Nova Scotia
Novgorod(*Rus.*語新市)
Numa Pompilius
Numidia(*Gr.*)=Moumèdia
Nuremberg
Nubia
Numantia
Nystadt

Marcus Aurelius
Markgraf
Martin
Marseilles
Malwa
Matilda(*Fr.*)=Mathilde
Maurya
Maryland
Mazanderan
Mecca
Medina
Mediterranean sea(*Fr.*)
=Mediterranee(*Ger.*)
=Mittelländisches Meer(地中海)
Medici(語醫士)
Media
Megara
Mehemed Ali
Melanchthon
Memphis(埃及語)
=Mennufer(善者の城)
Menes(*Gr.*)=Men
Merovingia
Mersen
Mesopotamia(*Gr.*語河間の國)
Messana
Messenia
Metellus
Metternich
Metz
Mexico(*Fr.*)=Mexique
Mecklenburg
Megacles
Mediolanum
Menkaura
Mercia
Menshikoff
Meotis Palus
Mermnadae
Metaeci
Menander
Merv
Michael(Angelo)(*Fr.*)
=Michel(神の如き)
Miguel
Milan
Miletus(*Gr.*)=Miletos
Miltiades
Mirabeau
Mississippi(*America*土人の語大河)
Mithridates
Midhas pashah
Milton
Mir jafar
Minto
Minorca
Misore
Mithra
Moesia
Mohammed(*Ar.*語稱讃せられたる者)
Mahach

Moloch
Maldavia(*Fr.*)=Moldavie(*Ger.*)
=Moldau.
Moliere
Moltke
Mongol(蒙古)
Monroe
Montenegro(*Servia.*)=Crna Gora-
(*Tur.*)=Kara Dagh(凡て黑山の義)
Montesquieu
Montezuma
Moors(*Lat.*)=Mauri(*Gr.*)
=Manroi(黑人)
Morea
Moravia(*Fr.*)=Maravie(*Ger.*)
=Mähren
Moses.(*Fr.*)=Moïse
Moscow(*Rus.*)=Moskwa(*Fr.*)
=Moscou(*Ger.*)=Moskau
Moslem(*Tur. Ar.*)=Muslimin(信者に服從する教師)
Modena
Mughal
Morgarten
More
Moawiya
Munster
Nurad
Murat
Musa
Mysia

Lützen
Luxemburg
Lycurgus(*Gr.*)=Lycorgos
Louvois
Lucania
Luna
Lycia(*Gr.*)=Lykia
Lytton
Lydia
Lyons
Lysimachus(*Gr.*)=Lysimachos.

Macao=(國史の媽港)
Macedonia(*Gr.*)=Makedonia
Macmahon
Maccabee
Macra
Madeira
Madras
Madrid
Magadha=(漢史の摩迦陀)
Magdeburg
Magelian(*Pot.*)=Magalhaens
Magnesia
Magyar
Mahmud
Malabar
Mahratta
Mainz
Malacca
Malta
Mameluke
Mamertine
Maine
Manchester
Mantinea(*Gr.*)=Mantieia
Marat
Marathon
Marengo
Margaret(*Fr.*)=Marguerite(*Ger.*)
=Margarethe(眞珠)
Mazeppa
Magenta
Malay(*Fr.*)=Malais(*Ger.*)
=Malaje
Malcolm
Malek shah
Marignano
Manfred
Manila
Maniak
Manuel
Marco Palo
Mannheim
Maurice(*Ger.*)=Moriz
Marburg
Marschall
Maria Theresa
Maria Antoinette
Marius
Marlborough
Mary(*Fr.*)=Marie(*Ger.*)
=Maria(苦き)
Massachusetts
Massagetae(*Gr.*)=Massagetai
Mateo Ricci
Mathias
Mayo
Maxentius
Maximilian(*Fr.*)=maximilien
Mayer
Mazarin
Mazzini
Mauretania

Kandahar
Kanishka(漢史の迦膩色迦)
Karak
Karlmann
Kasan
Kashgar
Kamchatka
Karakorum(漢史の和林)
Karlowitz
Karlstadt
Karchemish
Kashmir(漢史の迦濕密)
Karlsbad
Kanauj
Kasim
Karelia
Kelat
Keple
Kerman
Kerner
Kent
Kerboga
Khafra
Khazar
Kharezm(漢史の貨利習彌)
Kherson
Khokand
Khorassan(漢史の呼羅珊)
Khiva
Khodjend
Kiev=Kieff
Kiel
Kiptchak(漢史の欽察)
Kinburn
Kiakhta
Kirghiz=(漢史の黠戛斯)
Knox
Klopstock
Kobad=(漢史の居和多)
Kosciuszko
Koran *Ar*,)=Quran(書典)
Koreish(漢史の弧列)
Koraes
Kutaiba
Kublai(漢史の忽必烈)
Kunersdorf
Kalamata
Kabul

Labyrinth(*Gr.*)=Labylonthos
Lacedaemon(*Gr.*)=Lakedaimon
Laconia
Ladislaus
Ladoga
Lafayette
La Hogue
Lancaster
Lamartine
Laybach
Langton
La Rochelle
Laon
Latinum
Latin
Lawrence
Lebanon(*Heb.*白山)
Lauenburg
Lena
Leipsic(*Ger.*)=Leipzig
Leo(*Lat.*語獅子)
Leoben
Leon
Leonidas
Leopold
Lepanto
Lepidas
Lesbos
Lessing
Leuctra(*Gr.*)=Leuktra
Lexington
Leonardo Vinci
Leyden
Lee
Lerdo
Leibnitz
Lesseps
Lesbos
Licinius
Lincoln
Lisbon(*Por.Sp.*)=Lisboa(*Fr.*)
=Lisbonne(*Ger.*)=Lissabon
Lithuania(*Poland.*)=Litwa(*Ger.*)
=Litauen(*Fr:*)=Lithuanie
Liverpool
Livonia(*Fr.*)=Livonie(*Ger.*)
=Livland
Liguria
Loire
Lombardy(*It.*)=Lombardiā
Lorraine(*Ger.*)=Lothsingen
Lothair
Louis(*Ger.*)=Ludwig
Louisiana
Loyola
Locris
Lodomeria
Lorenzo
Lotharingia
Lübeck
Luneville
Luther

Iapygia
Ibrahim(*Ar.*語にて*Abraham*の轉)
Iceland(氷國)
Iconitum
Iliad(*Gr.*)=Ilios
Ignatieff
Ignatius de Loyola
Igor
Ilkhan
Illycum
Illyria(*Fr.*)=Illyrie(*Ger.*)
=Illyrien.
Inca
Immanuel Kant
India=(漢史の印度、身毒、天竺)
(*Fr.*)=Indie(*Ger.*)=Indien
Ingria
Innocent(*Ger.*)=Innocenz(*It.*)
=Innocente
Ionia
Ipsus(*Gr.*)=Ipsos
Iran
Ireland(*Er.*)=Irlande(*Ger.*)=Irandl.
Irkutsk
Irtish
Isaac(*Heb.*語笑者)
Isabella(*Fr.*及*Ger.*)=Isabelle
Isgigerd(漢史の伊嗣俟)
Isis
Ispahan
Islam
Israel(*Heb*神の兵)
Ister
Isaiah
Issus
Itil(漢史の亦的勤)
Ivan
Italy(*It.*)=Italia(*Ger.*)
=Italien(*Fr.*)=Italie.

Jacob(*Heb.*)=Jaqobh(*Fr.*)Jacobe-
(*Ger.*)=Jakob
Jacobin
Jagello
Jacobite
Jamaica
James
Jassy
Jaxartes(漢史の藥殺水)
Jahan
Janizary(*Tur.*語新兵)
Jaunpor
Java
Jahangir
Jeres de la Frontera
Jaff
Jean of Arc(*Fr.*)=Jeanne d'Arc
Jefferson
Jehovah=Yahveh
Jeva
Jerusalem(*Heb.*)=Yerushalem-
(*Assyr.*古碑)=Ursaliminu
Jesuit
Jesus(*Christ*)(*Gr.*)=Jesous-
(*Heb. Joshua*ノ轉)
Jerom
Jeremia
John(*Fr.*)=Jean(*Ger.*)
=Johann(君の惠)
Johnson
Joseph(增加)
Joshua(*Fr.*)=Josu'e(*Ger.*)
=Josua(救者)
Judaea
Jugurtha
Junius
Jersey
Jihun
Jhelum
Jovianus
Jobst
Joanna
Julich(*Fr.*)=Juliers
Juarez
Julian(*Fr.*)=Julien
Justin
Justinian
Jute
Juvenal

Hadrian(*Fr.*)=Adrien
Halys
Hamitic
Hamilcar(*Gr.*)=Amilkhar.
Hannibal(*Lat.*語仁君)
Hanover(*Fr.*)=Hanovre (*Ger.*)
=Hannover.
Hanseatic League
Hapsurg=(*Ger.*語*Habichtsburgr*
鷹城の轉)
Hardenberg
Hartmann
Harold(勇士)
Haroun-al-Rhashid(*Ar.*語正しき-
*Aaron*の義、史の訶論)
Hasdrubal
Hastings
Hakem
Halia
Hashem=(漢史の奚深)
Harvard
Hansa
Hagyti
Hampshire
Hegira(*Ar.*語退去)
Helena
Heligoland
Heliopolis(*Gr.*語日神の市)
Helot(*Gr.*)=Eilotes
Helvetius
Henry(*Fr.*)=Henri(*Ger.*)
=Heinrich(富裕の君)
Hercules(*Fr.*)
=Hercule(*Her*の光榮)
Herat
Herodotus(*Gr.*)=Herodotos.)
Hesse-cassel
Hebert
Hegel
Heliast
Herzegovina(*Tur.*)=Hersek
Hellen
Hellenes
Hellespont(*Gr.*)
=Hellespontos(*Helle*の海)
Hesiod(*Gr.*)=Hesiados
Heraclitus(*Gr.*)=Heracleitas
Heraclius
Herder
Herbart
Hieronymus
Hildebrand
Hippias
Hiram
Hispania
Hohenlinden
Hohenstaufen
Hindu-kush=(*Per.*語印度山)
Hogue
Hohenzollern-Sigmaringen
Holland
Holstein

Homer(*Gr.*)=Homeros(俘虜)
Honorius
Hospitaler
Hondras
Horace
Hubertusburg
Hudson
Hugh Capet
Huguenot
Hulagu=(漢史の旭烈兀)
Hungary (*Hungary.*)
=magyarorszag-
(*Fr.*)Hongrie(*Ger.*)=Ungarn
Hun(*Turanian*種)
Huss
Hugo
Humayun
Humbold
Hydaspes
Hyksos
Hyphasis
Hydevraabad
Hyrcania

Galatia
Galileo
Gama, Vasco da
Garibaldi
Galicia
Galba
Galerius
Ganges(*Hind.*)=Ganga(恒河)
Gaugraf
Gaul(*Fr.*)=Gaule(*Ger.*)=Gallien (*Lat.*)=Gallia
Germanicus
Gambetta
Getae(漢史の月氏)
Gerusia
Gascony
Gaugamela
Geneva(*Fr.*)=G'eneve(*Ger.*)=Genf
Gengis khan(漢史の成吉思汗)
Genoa(*It.*)=Genova(*Fr.*) =Gênes(*Ger.*)=Genua.
Genseric=Gaiseric
George(*Ger.*)Georg (耕夫)
Georgia (*Rus.*)=Grusia(*Tur.*) =Gurjitan
Gepidae(*Gr.*)=Gepaides
Germany(*Fr.*)=Allemagne(*Ger.*) =Deutschland
Ghazni
Ghent(Fr.)=Gand(*Ger.*)=Gent
Ghibelline(*It.*)—Ghibellino
Ghiyas-uddin
Ghur
Gibraltar(*Arab.*語*Jelel-al Toarik* = *Farik*山の轉)
Gilan
Gironde
Gladstone
Glasgow
Goa
Godfrey(*Fr.*)=Godefroi(*Ger.*) =Gottfried(神の平和)
Golconda
Goshen
Gordon
Gortschakoff
Goth
Gracchus
Granada
Granicus
Grant
Glanvella
Goethe
Gordianus
Guiscard
Gravelotte
Great Britain(*Fr.*)=Grande Bretagne
Greece(*Fr.*)=Grece(*Lat.*)=Graecia
Greenland
Gregory(*It.*)=Gregorio(*Fr.*) =Gregoire(*Ger.*)=Gregor(警戒す

る)
Grey
Gwelf
Gratz
Guise
Guizot
Gustavas(*Fr.*)=Gustave(*Ger.*) =Gustav
Gutenberg
Guthrum
Guzrat
Gwalior
Guinne
Guinea
Gulisan
Gyges

=Pontos Euxeinos(歡迎の海)
Eylau

Fabius Maximus
Fatima
Feodor(*Rus.*)=Fedor(*Gr.*)*Theodoros*
の轉)
Ferdinann
Feuillant
Ein(*Turanian*種)
Flanders(*Fr.*)=Flandre.(*Ger.*)
=Flanderen
Florence(*It.*)=Fiorenza(*Ger.*)
=Florenz(繁昌)
Florida
Fox
France(*Ger.*)=Frankreich
Franche-Comte(*Fr.*語自由國)
Franese
Fergana(漢史の鏡汗國)
Ferrara
Fichte
Fiji
Flavian
Franciscan
Franklin
Friesland(*Fr.*)=Frisc
Francis(*Fr.*)=Francois(*Cer.*)
=Franz.(自由)
Franconia
Frankrfort(*Ger.*)=Frankfurt
Frank
Frederick(*Fr.*)=Frederic(*Ger.*)
=Friedrich(平和に富める)
Freiburg
Fulton

Dacia(*Gr.*)=Dakia
Dahe 漢史の大夏)
Dalmatia(*Fr.*)=Dalmatie(*Ger.*)
=Dalmatien
Damascus(*Heb.*=Damesheq(*Assyr.*)
=Dimashqu(*Fr.*)=Damas
Dalhousie
Dane
Dante
Danton
Danzig
Danube(*Ger.*)=Donau
Darcus(*Per.*)=Daryavush
Darnley
Darwin
Daras
Daghestan
Dardanelles
David(*Heb.*愛せられたる者)
Deccan
Defoe
Delaware
Delhi(*Gr.*)=Delphoi
Delus(*Gr.*)=Delos
Delphi(*Gr.*)=Delphoi
Demosthenes
Denmark=Danmaak
Decemvir(*Lat.*十人)
Deloces
Derby
Derbend
Democritus
Dictator
Diocletian=Diocletianus
Dionysius
Desraeli
Dizaboul=(漢史の木杆可汗)
Djelal-eddin=Jelal-ed-din(漢史の札闌丁)
Dnieper
Dniester
Dominic(*Fr.*)=Dominique
Doria
Doris
Dover
Draco
Dost Mohammed
Dodona
Don
Donauwörth
Domitian
Drusus
Dragiana(*Gr.*)=Draggiane.
Dresden
Duns Scotus
Dupleix
Dutch
Dwina

Ebro(*Fr.*)Ébre
Ecbatana(*Babylon*古碑*Agamatann*)
Ecclesia
Eck
Edda
Edessa
Edgar
Edmund(*Fr.*)=Edmond.(幸福なる保護)
Edward *Fr.*)=Edouard.(*Ger.*)
=Eduard(幸福なる維持者)
Egbert
Egmont(*Fr.*)=Egypte(*Ger.*)
=Egypten.
Egypt(*Heb.*)=Mizraim(*Assyr.*)
=Muçur.(*Ar.*)=Miçr.(*Copt.*)
=Keme.
Eleatic
Elba
Elbe
Elizabeth(神の誓)
Emir-al-omra
Emmanuel(*Ger.*)=Emanuel(我等と倶なる神)
England(*Fr.*)=Angleterre
Empedocles
Epaminondas
Ephor
Epirus(*Gr.*)=Epeiros.
Ephesus(*Gr.*)=Ephesos
Epicteus(*Gr.*)=Epitetos
Epicurus(*Gr.*)=Epicouros
Eretria
Erfurt
Erasmus
Eratosthenes
Erik
Esarhaddon(*Assyr.*)=Asur-ahaid-din(*Asur*神は兄弟を與へたり)
Essex
Esthonia(*Ger.*)=Esthland.(*Fr.*)
=Esthonie
Ethiopia(*Gr.*)=Aithiopia
Etruscan
Etruria
Euclid(*Gr.*)=Eukleides
Eugene(*Ger.*)=Eugen(*It.Sp.*)
=Eugenio.(*Gr.*)=Eugenes(善き生れ)
Eupatridae(*Gr.*)=Eupatridai(善き生れ)
Euphrates(*Assyr.*)=Purattu(*Heb.*)
=Perath(*Per.*)Ufrates(*Ar.*)
=Frat.
Euripides
Europe(*Semitic* 語 *ereb* 暗黑の義より轉じて日沒地の義なり(*Lat.*)
=Europa(*Gr.*)=Europa.
Euergetes
Euxine Sea(*Fr.*)=Mer Noire(*Ger.*
=Schwarzes Meer.(*Lat.*)
=Pontus Euxinus(*Gr.*)

Cavaignac
Cassel
Chaeronea
Chagatai(察合台)
Chaldea
Chandra-Gupta
Charlemagne
Charles(*Ger.*)=Karl(*Sp.*)=Carlos (*It.*)=Carlo(男らしさ)
Chatham
Chaucer
Chazar=(*Furanian*種、漢史の可薩部)
Champagne
Chandernagor
Charlotte Corday
Chili
China(*Fr.*)=Chine(*It.*)=Cin(*Lat.*) =China,Sina.(*Ar.*)=Sin(佛經の震旦)
Chinsura
Chios
Chitral
Chosroes =Khusrau=Kaikusrau-(*Sanscrit.*)=Sushravas(*Avesta.*) =Husravauh(有名)
Christopher Columbus(*It.*) =Christifolo Colombo(*Sp.*) =Christobal Colon.
Colombia
Clive
Cicero
Cilica
Cimbri(*Gr.*)=Ksmbrai
Cimmeria(*Gr.*)=Kimmeria
Cimon(*Gr.*)=Kimon
Cipango=(日本國の轉)
Cisalpine Gaul
Clarendon
Claudius
Clement(*Ger.*)=Clemens(*It.*) =Clemeuto(溫和)
Cleon(*Gr.*)=Kleon
Cleopatra(*Gr.*)=Kleopatra
Cleves(*Ger.*)=Cleve
Clisthenes(*Gr.*)=Kleisthenes
Civilis
Clazomenae
Clermont
Clovis(*Ger.*)=Chlodwig
Cobden
Codrus
Colbert
Coligny
Calogne(*Ger.*)=Koln
Comte
Comitia Centuriata
Comitia Tributa
Comitia Curiata
Cond'e
Conrad=(材能ある輔佐)
Constance(*Ger.*)=Konstanz

Constantinople(*Lat.*)=Constantinopolis(*Tur.*)=Stambul
Consul
Cook
Cordeliers
Cordova(*Fr.*)=Cordove
Coblenz
Cochin
Coleridge
Connecticut
Condillac
Commodus
Concini
Conradin
Constantius(*Lat.*)=Constantinus(決定)
Copernicus(*Ger.*)=Kopernik.
Corcyra
Corinth(*Lat.*)Corinthus.(*Gr.*) =Korinthos.
Corinthian
Corneille
Cornwalls
Correggio
Corsica
Cortez
Cosmo
Cossacki
Courland(*Ger.*)=Kurlano(*Fr.*) =Courlande
Cracow(*Poland.*)=Krako'w(*Ger.*) =Krakau.(*Fr.*)Cracovie
Crassus
Craterus(*Gr.*)Krateros
Crecy
Crespy
Crete
Crimea(*Rus.*)=Krim
Croatia(*Fr.*)=Croatie(*Ger.*) =Kroatien.
Croesus
Cromwell
Cranmer
Crypteia
Ctesiphon
Cuba
Cyaxares(古碑)=Uvakshatara.
Cylon
Cyprus(*Fa.*)Chypre.(*Ger.*) =Cypern.(*Tur.*)Kibris
Cyrene
Cyrus(*Gr.*)=Kyros(古碑)=Kurash

B.....

Boniface(*It.*)=Bonifacio(*Ger.*)
=Bonifaz(善業者)
Boleslav
Bologna
Borneo
Bordeaux
Boso
Bothnia
Bosporas(*Gr.*)=牛津
Boston
Bouillon
Boule
Bourbon(*Sp.*)=Borbon
Brandenburg
Brundisium
Brazil(*Fr.*)=Bresil(*Ger.*)=Brasilien.
Braganza
Breda
Bremen
Breslau
Bright
Bretigny
Briel
Briton
Britania
Brittany
Bruce
Brunswick(*Ger.*)=Braunschweig
Brussels=Bruxelles(*Ger.*)=Brüssel
Brutus
Bruttium
Bucherest(*Reu*)=Bucresci(喜の市)
Buckingham(*Bucca*の子孫)
Bulgaria(露)=Bolgaria
Bunyan
Burgady(佛)=Bourgogne(月)
=Burgund.
Burk
Byron
Byzantium=Byzantion

C.....

Cabral
Cabul
Cadmeia
Caesar(*Fr.*)=César(*Ger.*)=Cäsar.
(毛を以て飾られたる)
Cairo(*Ar.*)=Maçr-el-Qâhira
Caius
Calais
Calcutta(*Hind.*)=Kalikata
Calicut(*Hird.*)=Kalikodu
California
Calabria
Caligula
Calonne
Caledonia
Caliph=(*Ar. Kalafa*遺留の轉)
Calvin
Cambodia(*Malay.*)=Kambōja
Cambray
Cambyss(*Per.*)=Kambujiya.
Campo Formio
Campania
Canada
Canary
Candia
Cannae
Canning
Canossa
Canterbery
Canton=廣東
Canute
Capet
Cappadocia(*Gr.*)=Cappadokia
Capitoline
Caria
Canaan(*Semitic*=低地)
Carinthia(*Ger.*)=Kärnten
Carlos
Carlist
Carelia
Caracalla
Carbonari(*Lat.*)=Carbonarius
(炭燒者)
Carolina
Carolingia
Carthage=Katrhada
Casimir
Cassius
Castile
Catalaunia
Catherline(*Ger.*)=Katharine(*Rus.*)
=Ekaterina(純粹)
Catiline
Cato
Caucasus
Cavour
Celt
Ceylon
Caspian Sea
Cassino
Castillon
Cateae-Cambresis

A.....

Astyages(古碑文)=Ishtuvegu
Astarte
Athanasius
Athena
Athens(*Athenai*)
Athos
Attica(*Gr.*)=Attike(岬)
Attila
Auerstädt
Augsburg
Augustus =(*Lat.*尊崇)
Aurnugzeb(*Hid.*王位の飾)
Aurelius
Austria(*Ger.*)=Oesterreich(*Fr.*)
=Autriche(東國)
Augustulus
Augustine
Austrasiu
Austerlitz
Aukland
Australia(*Fr.*)=Australie(*Ger.*)
=Australien(南國)
Azerbaijan
Avar(*Turanian*種)
Avignon
Azoff
Azores(*Port Fr.*)=Acores(*Ger.*)
=Azoren.

B.....

Baal(*Heb.Phoe.*)=Ba'al(主君)
Babel
Babylon
Babylonia
Bacon
Bactria
Badakshan
Baden
Bagdad(*Per.*)=(神の賜)
Bahama
Bailly
Bajazet(*Tur.*)=Bagzid
Baku
Balboa
Baldwin
Balkan
Bartholomaeo Diaz
Balticsea(*Ger.*)=Ostsee(東海)
Basel(*Fr.*)=Bale
Bastille
Batavia
Batu(*Mong.*勇敢)
Catoum
Barbarossa(*It.*)=(赤髯)
Basil
Bautzen
Bavaria=Bayern
Becket
Balgae
Belgium(*Fr.*)=Belgique(*Ger.*)
=Belgien
Behar
Belgrad(*Ser.*)=Bielgorod(白城)
Belisarius(*Sla.*)=Beli-tzar(白帝)
Bela
Bel=(*Baby.*神)
Behring
Benedict(*Fr.*)=Benoite(幸福なる)
Beneventum(*It.*)=Benevento(順風)
Bengal(*Fr.*)=Bengale(*Ger.*)
=Bengalen(*Hid.*)=Bangālā
Benjamin(右手の子)
Berlin
Berytus
Bethlehem=(*Heb.*)麵麭の家)
Bernard=(强熊)
Berne
Bessarabia
Bidar
Besika
Bijapur
Biron
Bismark
Bishbalik(*Tur.*)=(五城)
Bithynia
Boccaccio
Boeatia
Bohemia(*Ger.*)=Böhmen.(*Fr.*)
=Boheme
Bokhara
Bombay
Bonaparte

Alaric(*Lat.*)=Alaricus
Alaska
Alba Longa
Albania
Albert(*Ger.*)=Albrecht(*Fr.*)
=Albart=(凡て尖明ある)
Alboin
Alcibiades=Alkibiades
Aleppo
Alexander(*Gr*)=Alezandros
(*Fr.*)Alexandre=(人の救者)
Alexandria=Alexandria
Alexis(*Ru.*)=Alexei(救助或防禁)
Alfonso(*Por.*)=Affonso(*Fr.*)
=Alfonse.
Algeria(*Fr.*)=Alge'rie
Ali
Allah(*Ar.*)=(神)
Almoravide
Almohade(*Ger.*)=Almobaden
=(*Ar.*)(一神の崇拜者)
Alp Arslan(*Tur.*)=(勇獅)
Alsace(*Ger*)=Elsass
Ala-ud-din
Almamun
Alva=*Alba*
Alyattes(*Gr.*)=Alyattes(*Fr.*)
Alyatte.
Alired=(凡て平和)
Alpa
Allia
Alexius
Amalfi
Amenemhat
Amenhotep
America(*Fr.*)=Amerique(*Ger.*)
=Amerika.
Amerigo Vespucci(*Fr.*)
=Americ Vespuce.
Abmehnugger
Amida
Amiens
Amphissa
Amphictyony(*Gr.*語隣人)
Amurath
Amur(*Mad.*)=Sachalien ula(黑河)
Amun
Amu Darya(*Per.*語*Amu*河)
Anatolia(*Tur.*)Anadoli=(*Gr.*東國)
Angle
Angora(*Fr.*)=Engri.(*Gr.*)
=Ankyra.
Anjou
Anna(*Fr.*)=Anne=(惠)
Anne Boleyn
Antigonus(*Gr.*)=Antigonos.
Antioch(*Lat.*)=Antiochia
Antiochus(*Gr.*)=Antiochos
Anglia
Ancus Marcius
Anaxagoras(*Fr.*)=Anaxagoro.
Andronicus(*Er.*)

=Andronic.(人の征服者)
Anastatius(*Gr.*)=Anastasios(*Fr.*)
=Anastase(立ち上る)
Antipater(*Gr.*)=Antipatras
Antonius(*Fr.*)=Antoine
Apennine(*Lat.*)=Apenninus(*Fr.*)
=Apennins(*Ger.*)=Apenninen
Apollo(*Gr.*)=Hermes
Apulia
Aquae Sextiae=(*Lat.Sextius*の泉)
Aquileia
Aquitane
Arabia(*Fr.*)=Arabie(*Ger.*)
=Arabien=(*Heb.*沙漠)
Aragon
Aral(*Tnr.*嶋)
Arcadius(*Gr.*)=Arcrdios
Archangel
Archon
Arcot
Aquinas
Arabi Pasha
Arachosia
Arcesilaus
Argentine *Sp.*)=*R*epublico
Aagentina(銀共和國)
Areopagus(*Gr.*)=Areios Pagos-
(*Ares*神の丘)
Argonauts(*Gr.*)=Arganantai.
Argos
Aria
Ariosto
Aristagoras
Aristides(*Gr.*)=Aristeides
Aristsphanes
Aristotle(*Gr.*)=Aristoteles
Arles
Armagnac
Armenia
Arndt
Arnulf
Arsaces(漢史の安息は此音譯)
Artoxerkes(*Per.*)
=Artachshast(大國)
Artomisium(*Gr.*)
=Artemision(*Artemis*神の廟)
Arthur
Aryan
Arius(*Gr.*)=Areis.
Ascabad
Asia(*Fr.*)=Asie(*Ger.*)
=Asien.(Semitic語日出の義)
Asoka(漢史の阿育王•無憂王•
阿恕迦王)
Asia Minor(*Fr.*)Asie Mineure.(*Ger.*)
=Klein asien(小亞細亞)
Assyria(*Fr.*)=Assyrie(*Ger*)
=Assyrien(*Per*)=Athura
Asurbanipal(*Assyr*)=Assur-bani-
pal(*Ashur*神子を造る)
Ashurnazir pal(*Assy*)=Assr-nazir-
pal(*Ashur*神は子の保護者なり)

明治三十二年十一月一日印刷
明治三十二年十一月四日發行
明治三十三年二月十日訂正三版發行
明治三十五年十一月十七日再訂八版印刷
明治三十五年十一月廿一日再訂八版發行
明治三十八年九月十五日十版印刷發行

（新撰西洋史奥付）
（定價金八拾五錢）

著者　東京市神田區裏神保町九番地　白鳥庫吉

發行者　合資會社　東京市神田區裏神保町九番地　富山房
合資會社富山房社長　坂本嘉治馬

代表者　東京市神田區猿樂町二丁目二番地　上村龍之助

印刷者　東京市神田區猿樂町二丁目二番地　博信堂

印刷所　合資會社　富山房

（明治廿九年六月設立）

電話（特）本局一〇三六　電報略號（ヤマフ）

著作權所有

發兌書肆

名稱對表

符號

A……

Abdulla
Abbas
Abd-er-rahman＝(*Ar.*語神の從僕)
Aberden
Abukir
Abraham＝Ibrhim(信者の父)
Abtal(漢史の悒怛或厭噠)
Abu-bekr＝(*Ar.*語處女の父)
Abul-Abbas(漢史の阿蒲羅拔)
Abyssinia(*Ar.*)＝Habash(混合したる)
Acadia
Achaia
Acre(*Gr.*)＝Acco
Acropolis(*Gr.*語最高市)
Actium
Adam
Adar
Addison
Adrianople(*Lat.*)＝Adrianopolis
Adriatic Sea(*Gr.*)＝Adrias(*Lat.*)
　＝Adriaticum(*It.*)Adriatico.(*Fr.*)
　＝Adriatique.(*Ger.*)
　＝Adriatisches Mer.
Aden
Adolphus(*Ger.*)＝Adolf(*Fr.*)
　＝Adolphe＝(高尚なる狼)
Aegates
Aegean sea(*Gr.*)＝Aigaion telagos (*Lar.*)＝Mare Aegalum.
Aeolia(*Gr.*)＝Aialia.
Aequi
Aeschylus(*Gr.*)＝Aeschylos(*Fr*)
　＝Eschyle
Aētius
Aetolia(*Gr.*)＝Aitolia.
Afghan
Africa(*Fr.*)＝Afrique(*Ger.*)＝Afrika.
Africanus
Agora
Agrigentum
Ahmad Sha
Ahriman
Ahura Mazda＝(*Per.* 語賢君)
Aix-la-chappelle＝Aachen
Akkad(語最大)
Akbar
Akerman
Alamanni
Albasin
Albion
Alimalik
Almaida
Alani(漢史の阿蘭聊)

東京合資會社富山房出版圖書特約販賣所

東京	東京神田區	目黑十郎
文會堂	仝	安田與兵衛
播磨屋	仝	石松造
林平次郎	仝	小田助
青野友三郎	仝	阪山富之盛
至誠堂	仝	福井文吉
東海館	仝	竹內宗吉
北隆堂	仝	木村伊八郎
瓦明館	仝	中次作
松田庄一郎	京都寺町通	成井吉
若林茂助	仝	福錦堂
寶文館	仝	浦文藏
大黑屋	仝	策之房
坂本榮正堂	仝	日東館
岡根平莊	大東區	吉岡支店
三宅藏	仝	積善堂
鹽川豐敕堂	仝	勉強堂
進振堂書店	北海道札幌	第一有隣堂
一貫堂	仝	弘集堂
富二舍	仝	久富廣文堂
魁堀近江堂	仝	村上賴夫
西川文祐	仝	川南重祐
酉堂	仝	堀江堂
一貫堂	仝	近文舍
富二貴	仝	江貴堂
進振堂書店	仝	一二貴堂
三川豐敕堂	仝	弘富集堂
宅豐敕藏	仝	久富廣文堂
岡莊平	仝	富上賴夫
根榮正堂	仝	岡重祐
坂屋	仝	川崎支
吉岡屋	仝	南善
三宅藏	仝	上強
鹽川豐敕堂	仝	賴有隣堂
進振堂書店	仝	重隣堂
一貫堂	仝	祐強堂
富二舍	仝	夫善堂
魁堀近江堂	仝	賴支
西川文祐	仝	崎東
酉堂	仝	支
一貫堂	仝	館
富二貴	仝	店
進振堂書店	仝	堂
一貫堂	仝	藏
富二舍	仝	房
魁堀近江堂	仝	館
西川文祐	仝	吉
酉堂

函號 番號
七 一
和
S

広島大学図書
2000066235